

羽沢先輩目当てでバイ
トするのは不純に違い
ない

Washi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校1年の僕は偶々姉さんにライブに誘われ、『Afterglow』の羽沢つぐみさ
んに一目惚れをしてしまった。でも僕は、彼女にアプローチする勇気は出せなかっ
た。しかし、姉さんの策略によつて彼女の実家の『羽沢珈琲店』で働くこととなつて
しまうのであつた。

目次

	本編		第10話 壊れかけの関係	
166	第1話 一目惚れは唐突に	116	第11話 想いを伝えるのに必要なこと	189
142	第2話 初めてのバイト	100	第12話 手紙	215
	第3話 懇親会？尋問会？	78	第13話 本当に大切なものの	239
	第4話 最初の一歩	55	第14話 E v e n G u i l t y	261
	第5話 初デート	32		
	第6話 雨の中の決意	14		
	第7話 似たもの同士	1		
	第8話 仲良きことは美しかな			
	アフター			
	打ち上げとお祝い			
		318		
			302	

本編

第1話 一目惚れは唐突に

僕が高校1年生になつてから1ヶ月が過ぎた。新しい環境やクラスメイトにも慣れ、各々が所属する部活が定まつてくる頃だ。実際、放課後となつた今も、僕のクラスメイトの多くは足早に教室を去る。もつとも、僕にはあまり関係のない話だ。なにせ、帰宅部なのだから。

元々引っ込み思案な僕は、友達を作るのがあまり得意ではない。中学の頃は1、2人いたのだが、進学に伴つて離れ離れになつてしまつた。大学進学を考えて、僕が実家から少し離れた進学校を選んでしまつたからだ。

寂しいと思うことは少しだけ、ある。でも、1人なら1人なりに楽しく過ごす方法はたくさんある。むしろ、基本的には1人の方が自由で楽だと思つてしまうくらいだ。

僕は忘れ物がないかだけ確認すると、とつとと学校を出るのであつた。

自動ドアが開いた瞬間、けたたましい騒音が鼓膜を震わせた。地元のゲームセンターだ。それなりに大きく、フロア別に様々な筐体が設置されている。

僕の趣味の1つがアーケードゲームで遊ぶことだ。厳格な父が子供のころは少し苦手で、土日に父を避けるように遊びに来ている内に、すっかりお気に入りとなつてしまつた。

今日はなにを遊ぼうか。格闘ゲーム、シユーティング、あるいはカードを使うゲーム……色々と迷つたが、やはりここは僕が1番好きな音ゲームを遊ぼう。

階段を上り、目当ての音ゲームが置いてある区画へと向かう。あちこちのプレイ中の筐体から、全く統一感のない音楽が好き勝手に流れている。この破天荒な感じは意外と好きだ。

幸い、僕が遊ぼうとしていたゲームは空いていた。キーボードを模したタイプのゲームだ。ピアノを弾いたことはないが、それに近い演奏感を得られるらしいのが特徴だ。

お金を入れて、自前のイヤホンを接続する。これで周囲の音に邪魔される心配はない。さて、今日はどんな曲を遊ぼうか。そんなことを考えながら、僕は画面に表示された曲の一覧をスクロールさせていくのだった。

「ただいまー」

「あ、お帰り。ちょうどよかつた。あんたこのあと暇?」

少々早めにゲーセンでの遊びを切り上げた僕は、まだ明るい内に家に戻った。そして

リビングに入ったその瞬間、姉さんに声をかけられた。姉さんは僕の2つ上で、今は丘女子学園高等部の3年生だ。

しかし、姉さんがいきなり話を振つてくるのはいつものことだが、一体なんなんだろうか。

「まあ、暇と言えば暇だけど、どうして？」

「これ、一緒に行かない？」

そう言つて姉さんは手を掲げる。なにか手に持つているようだ。よく見てみると、それは2枚の細長い紙だった。その紙にはこう記されていた、『ガールズバンド☆ライブ』と。

「……ライブのチケット？」

「そ。一緒に行く予定の友達がドタキャンしちやつてさ。余らせたままなのも勿体ないから、どうかなつて」

「僕、ライブとかバンドとかつて全然分からぬいけど」

なにせ中学時代はゲームと読書と勉強にほとんど捧げてしまつたのだ。そんなエネルギッシュなイベントに参加したことなんて全くない。事実、体育祭で応援とかするの苦手だし。

「へーきへーき。私だけであんまり詳しくないし。むしろ、だか

ら誰かと一緒に行きたいんだし』

「ふーん……」

姉さんの言葉に適当に返事をしつつ、チケットを受け取る。裏面を見ると、出演するバンドの一覧があつた。『P o p p i n , P a r t y』、『A f t e r g l o w』……やつぱり全然分からぬ。そもそもテレビに出るようなアーティストだつて口クに知らないのだから、当然と言えば当然だ。

うーん……正直、ライブを見に行くよりゲームなり読書なりがしたいんだけど。外出もしないといけないわけだし、ライブ会場も電車を使わないといけない距離だし。

そんな感じで僕が悩んでいると、姉さんは続けて口を開いた。

「もちろんタダでとは言わないよ。帰りに夕飯、好きなもん食べさせてあげるからさ」

「え、ほんとに？ なんでも？」

「高級焼肉とか高級寿司とかじやなけりやね。まあ、どうしても嫌つてんなら私一人で行くけど」

そこまで無理強いする感じではないようだ。悩ましい選択だ。外食を引き換えるライブに行くか否か。実を言えば、結構外でラーメンが食べたい気分ではある。同時に、外出は面倒くさいとか考えちゃう自分もいる。

うーん、うーんと十数秒間は唸つた末……勝利したのは、食欲の方だった。

「……分かつた、行く」

「じゃあさつさと準備して。10分後には出るから」

姉さんはもう準備を済ませているらしく、近くに外出用のかばんが置いてある。僕は頷くと、急いで自室に移動した。

とりあえず、私服には着替えないといけない。流石に制服でライブを見に行く気はない。クローゼットから適当に服を見繕い、着替える。ジーンズにパークー。簡素だが、別にこれでいいだろう。そんなにおしゃれな服を持つてはいるわけでもないし。

あとは財布と、スマホと……定期もか。それらをポケットに入れておく。これで準備完了だ。

まだ5分しか経っていないことを確認しつつ、リビングに戻る。それから更に5分後、僕たちは出発するのであった。

チケット制だから会場もそれなりに大きいのでは、と思っていた僕の予想は少々裏切られたこととなつた。大体、2～3クラス分の座席数の会場だつた。

ライブなんてテレビで流されるやつくらいしか知らなかつた僕は無意識にそのイメージに引っ張られていたらしい。会場は小さいとまでは言わないが、結構コンパクトだ。あ、でもその分、バンドとの距離が近くて見やすいのかも、とも思つた。

実を言うと、それ以上に気になることがあつた。なんというか……観客に女子が多い気がする。男子もちらほらとはいるが、割合としては1割未満だろう。これまたテレビのアイドルグループのイメージに引っ張られていたらしい。てっきり、男子が多いと思つていた。

「なんか、気まずい……」

「大丈夫だつて。どうせライブ始まつたら気にならなくなるつしょ」

先程購入したドリンクをストロー越しに飲みながら、姉さんは背もたれに体重を預けている。いつもこんな感じでマイペースなのだ。消極的に周りに影響を受けやすい僕としては羨ましいと思う。僕は座席に座つてているだけでそわそわしているというのに。

でも、これがライブ会場か。天井に照明がいくつも備え付けられていて、舞台の上にもマイクとかスピーカーとかの機材が色々置かれている。ドラムもある。

まだ始まつてはいないのだけど……ちよつぴり、張り詰めた空気を舞台から感じる。ここまで来た以上、流石に幾らかはライブに興味が出てきた。

出演順を再度確認する。えつと……先発は『P o p p i n , Party』で……ふむふむ……ラストは『Afterglow』みたいだ。確か、チケットの裏面でもちらつと見た気がする。

そうやつて2分、3分としばらく待つていると、少しずつ会場が暗転していく。いよいよ

いよ始まるみたいだ。しん、と会場が静まり返る。この感じは知つてゐる。中学のイベントで演劇の鑑賞に行つたときの、劇が始まる直前の空氣に似てゐる。

そんなときだつた。突然、「ポピパ！ ピポパ！ ポピパパピポパ！」と暗闇の中で謎の掛け声が木霊した。一体なんだと微かに動搖するが、そんな暇すら与えてはくれないようだつた。

闇を切り裂くように、無数の照明が舞台に向かつて照らされた。そしてそのスポットライトの中心にいたのは、僕と同年代くらいの女子の5人組だつた。白を基調に、それぞれが別々の色をワンポイントにした統一感のある衣装に身を包んでゐる。

そんな中、最初に声を出したのは真ん中の特徴的な形のした赤いギターを持つた女子だつた。

「こんなには！ 私達、Poppin' Partyです！」

自己紹介と同時に、会場が一気に沸いた。待つてましたと言わんばかりにたくさんのが細長いライトが左右に軌跡を描き、歓声が聞こえる。1曲目が始まつてもいないので、すごい熱気だ。テレビで見るそれに勝るとも劣らない感じだ。

これは……思つてたよりすごいのかかもしれない。場の雰囲気があてられたせいか、ワクワクとした気持ちになつてきた。

「——それでは聞いてください！ „Yes! Bang Dream!“」

曲が始まった。軽快にドラムステイツクが踊り、リズムを生み出す。キーボードがそれを支え、ギター（ベースとかいうのもあるらしい）が主役に踊り出る。

戸山香澄と名乗ったボーカルの人が歌い出す。バンド名通りと言うべきか、ポップ調の柔らかい音楽だつた。それくらいなら僕にも分かる。

控えめに言つても、とてもいい音楽だと思う。トップアーティストたちと比べられるほどじやないとは思うけど、それでも想像を遙かに超えるくらい上手だつた。それが、同年代の女子たちが奏でているというのだから驚きだ。

少しずつ、彼女らの世界に引き込まれる。1曲目の演奏が終わるころには、時間を無駄にしているなんて考えは彼方へと吹き飛んでいた。こういうのもいいのかもしれない、そう思えるようになつた。もつとも、それでも1人で来るのは雰囲気的にちょっと無理そうだけだ。

『Poppin' Party』の演奏が終わつたあとも、次から次へとガールズバンドが登場し、演奏していく。どのバンドもそれぞれの音楽というか個性があり、ダレることなく楽しめた。

そして、いよいよ最後のバンドである『Afterglow』の登場となる。前のバンドが退場を終え、舞台が暗転する。観客が持つてゐる色とりどりのライトが、あちこ

ちでまだかまだかとゆらゆらと揺れている。

暗闇の中で静寂が続く。何秒ほど待ったかは分からぬけど、少し前まで演奏で盛り上がつていたせいか、とても長く感じた。

そんな緊張がピークに達したとき、その場面は訪れた。照明が復活し、『Afterglow』と呼ばれている女子たちの姿を映し出す。5人組のバンドのようだつた。なにげなく、メンバーの顔を一瞥する。

——次の瞬間、信じられないことが起つた。具体的には、キーボードの後ろに立っている短めの茶髪の女子を視界に収めたときに起きた。なんと時間が止まつてしまつたかのように、視線を彼女に固定してしまつたのだ。

それだけに留まらず、頭を鈍器で殴られたかのような衝動が走つた。鼓動が爆発した。急に恥ずかしくなり、そのままの顔から視線を外してしまう。電子ケトルのように耳が一瞬で沸騰した。体温が上昇したのか、暑くなり、汗もかいてきた。

なにが起つたのか自分でも分からず、混乱のあまりボーカルの子の挨拶を聞き逃してしまつた。しかしながら、『キーボードの羽沢つぐみ』という部分だけは聞き逃していなかつた。

キーボードの羽沢つぐみ……そのワードを心の中で反芻する度に、温かいような、むず痒いような感覚が胸の内で渦巻く。完全にどうかしてしまつてゐる。

演奏が始まる。しかし、もう曲は頭に入つてこなかつた。ロック調だということ以外、なにも分からなかつた。演奏中も、トーク中も、視界に収まつていたのはただ1人……羽沢つぐみさんだけだつた。

キーボードの上で踊るしなやかな指、照明でキラキラと輝くその瞳、真面目そうな雰囲気に反したロック風の衣装、リズムをとつて体を動かす度に揺れるスカート。そして眩しい笑顔。まるで彼女1人だけが舞台にいるかのようだつた。彼女の所作の全てに夢中になつてしまふ。

結局、全ての演奏が終わつて他のバンドも勢揃いで挨拶のときも……そして、彼女らが舞台裏に消えるその最後の瞬間まで、僕は彼女から目を離すことができなかつた。彼女が見せた柔らかい笑みは、完全に僕の脳裏に焼きつけられるのであつた。

ライブが終わり、約束通り駅の近くのラーメン屋で夕食を食べている間も、僕の頭の中は羽沢つぐみさんのことでいっぱいだつた。

他の何もかもがどうでもよくなる感覚。昔、小学生くらいの頃、これと似たような感覺を抱いたことがある気がする。……いや、自分を誤魔化すのは止めよう。僕だつてもう高校生だ。自分がどうなつてしまつたのかくらい、当然分かっている。

「……あなた、途中からずっと羽沢さんのこと見てたでしょ」

「——ツ!? ザ、ザほツ、ザほつ!」

ただ、それを面と向かって指摘されて平静を保てるかというと話は違うわけで。突然姉さんに核心を突かれた僕はむせてしまつた。

「き、気づいて……」

「そりやあ、あんなに長いこと見てたらね。ここに入つてからも様子おかしかつたし、気づくつて。……そんで? どうなの、好きになつちゃつたの?」

「う、うるさい……」

ニヤニヤとからかうような口調に対し、僕は顔を背けるしかなかつた。

そう、その通りだ。俗に言う、一目惚れだ。彼女を一目見た瞬間、完全に心を奪われてしまつたらしい。まさか高校生にもなつてこんな経験をすることになるなんて、思つてもみなかつた。

「でも羽沢さんかー。言つておくけど、あの子結構な人気者だよ?」

「え? 知つてるの?」

「あの子、うちの高校の2年で生徒会の副会長。ついでに、実家が喫茶店。私も偶に行くけど、常連さんには人気だよ?」

ま、常連さんにはお年寄りも多いけど、なんて補足しながら姉さんは呑気に麺を啜る。一方で僕は、その情報をありがたいと思いつつも、頭を抱えることになる。確かに好

きになつてしまつた。それは認める。だけど、アプローチなんてことは、とてもじやないがする勇気はなかつた。

慣れてるゲーセンとかならともかく、家から離れた喫茶店に1人で行くのだけつらいし、なによりそんな露骨な真似ははばかられる。ライブを見に行くのも同じだ。あの男女比率はつらいものがあるし、あんな風に盛り上がる性格でもない。

昔からこうなのだ。自分から他人に話しかけるなんてできなかつたし、積極的に行動することもできない。小学校の頃の初恋だつて、結局は遠くから気になる子をチラチラと見ていただけだつた。

ましてや、相手は他校、それも女子校の年上の人だ。そんな人に声をかけることすら、雲を掴むような話なのだ。

「ねえ……偶に今回みたいなライブに付き合つてよ」

だから、僕にできそなのは姉さんと一緒にまたライブを見に行くことだけだつた。そうすれば、少なくとも羽沢つぐみさんの姿を見ることはできるのだから。それに対して、姉さんは露骨に不満そうな顔を浮かべる。

「ライブくらい、いつでも付き合つてあげるけど……ほんとにそれでいいの？　ちよつとくらい声をかけてみたつていいんじゃないの？」

「む、無理だよ……そんなこと。絶対、心の中では嫌がられるよ……」

「あんたのその性格も重症だねえ……そんなんじやバイトだつて……ん？　あ、そうか……」

「ど、どうしたの？」

なにかよからぬことを思いついたのか、姉さんは手のひらを握りこぶしで軽く叩いた。はつきり言つて、嫌な予感がする。そしてその予感はすぐ的に的中する。

「確か羽沢さんの家のお店……『羽沢珈琲店』って言うんだけど、あそこ前バイト募集してたわ。キッチン兼ホールで。——あんた、あそこでバイトすれば堂々と羽沢さんと話せるんじやない？」

「ぜ、絶対に無理ッ！」

結局、声をかける以上に衝撃的で難易度の高い提案だつた。僕はその場で大きく首を横に振るのであつた。

第2話 初めてのバイト

あのライブから既に1週間が経過した。当然と言うべきか、僕は『羽沢珈琲店』にバイトの希望の連絡を入れてはいなかつた。姉さんから、店に貼り出されているらしい募集のチラシの写真が送られてきたので連絡先は知つている。でも、連絡する気はなかつた。

いや、正確にはほんのちよつとはあつた。砂漠の中の1粒の小石程度にはあつた。スマホに店の番号を打ち込むところまで行つたこともある。でも結局、怖くなつてそのまま消してしまふの繰り返しだつた。

それに不満を抱いていたのは、他ならぬ写真の送信主である姉さんだつたようだ。土曜の放課後、僕が自室で寛いでいると、姉さんはノックもせずに突然部屋に侵入して來たのであつた。

「な、なに、いきなり……？」

「ちよつと。あんた、いつになつたらバイトに応募するの？」

「いや、だから……しないつて前に言つたじやん……」

どうやら、姉さんは意地でも僕に『羽沢珈琲店』でバイトさせたいらしい。それが面

白がつてのことなのか、僕を気遣つてのことなのかは分からぬけど。一応、後者だと願いたい。

「あんなに熱心に見つめてた癖に、そんな簡単に諦めちやうの？」

「いや、だつて……無理だよ……いきなり、その人の実家で働くなんて。第一、僕バイトの経験ないし……」

まあ、高校生になる以前からバイト経験があつたらそれはそれで大問題だろうけど。それはそうと、僕の回答をどう受け取つたのか、姉さんは分かりやすいくらいに盛大な溜息をついた。

「んなのやつてみなきや分かんないっしょ。言つておくけど、このままなにもしなかつたら絶対に後悔すると思うよ。あんただつてそれくらいは分かつてるんでしょ？」

「それは……まあ、ちょっとは、そんな気もするけど……」

でも、怖いものは怖いし、勇気が出ないのもれつきとした事実なのだ。変に拒絶される方が、きっと後々に響く気がしてならない。

「……もう一度だけ確認するよ。本当に応募する気はないの？　言つておくけど、これが自主的に応募する最後のチャンスだから」

姉さんも姉さんで怖いことを言う。でも、その程度で行動できるんだつたらとつくにやつている。逡巡はあつたものの、僕の答えは変わらなかつた。もしかしたら、ボロク

ソに言われて意気地になつてゐるのかかもしれない。

「……ないつたらないよ」

「ふーん……なら、こつちにも考へがあるから」
僕の返答を呆れた様子で受け止めた姉さんは、懐から自身のスマホを取り出した。そしてなにかを入力したあと、それを耳元に当てる。

普通に考へれば、どこかに電話しようとしている。そして会話の流れからすると……いやいや、まさか。いくらなんでもそこまで強引な手法を取る筈が……。

「あ、もしもし。実は私の弟が現在バイトを探してまして、偶々通りかかったときにチラシを見たんですけど、募集つてまだしてます?」

「ちょ、ちょっと……っ！」

平然と取つてきた。なんの躊躇すらなかつた。僕が慌てて電話を止めようとすると、口元に手のひらを被せられ、しゃべれなくなつてしまつた。無理やり通話を切ることも考えたが、そこまでやるのは相手方に失礼だと思い、思い留まつてしまふ。僕は姉さんとは違うのだ。

「はい……はい……えつと、今日の16時ですか？　はい、大丈夫だと思います。本人に伝えておきます。名前は……『木下勇樹』です」
募集が終了していることに一縷の望みをかけてみたが、どうやら駄目そうだ。無情に

も、話はトントン拍子で進んでいく。姉さんの口から漏れた時刻は多分、面接の時間とかだと思う。本人の了承なしに、僕の外出が決定されてしまった。

「はい、それではよろしくお願ひします。失礼します…………というわけで、16時に『羽沢珈琲店』ね。普通に入店して面接だって言えば伝わるらしいから」

「……最低」

嘘だと言つて欲しかつたが、どうやらそんなことはないらしい。意地の悪い笑みを浮かべる姉さんに対し、手のひらから解放された僕は精一杯の怨嗟を込めて睨みつけることしかできなかつた。

面接の時間の少し前、僕は『羽沢珈琲店』の最寄りの駅に到着した。今回の件で1つだけ幸いだと言えるのは、その駅が定期の範囲からそこまで外れていないことだろう。予定外の外出ではあるものの、追加の電車賃はそれほどかかつてない。

スマホで地図アプリを開き、お店までのルートを検索する。どうやら、近くの商店街にあるみたいだ。歩けばすぐの距離だ。

正直、今でも気が重いことには変わりない。具体的には、高層ビルの下敷きになつてしまつたかのようだ。逃げてしまいたいが、正式に決まつた面接を無視できるほど、僕の神経は図太くもない。大人しく向かうしかないのだ。

……いや、でも、僕なんてそもそも採用なんてされないか。料理とかほとんど未経験だし、話すのも得意じゃないし。動機が下心満載な分、相手に申し訳ないので落として欲しいという気持ちも少なからずある。

そんな自己評価に自己嫌悪を抱きつつも、少しは気が楽になつた。

一方で、永遠に店に辿り着かなければいいと思っていたが、悲しいかな、駅からそう離れていないことは自身で確認済みだ。ほんの僅かな時間で商店街が見え、商店街に入つてからものの数分でいとも簡単に目的地を発見してしまつた。

『羽沢珈琲店』

そう、看板に書いてある。何度読んでもそう書いてある。地図アプリもここが目的地だと主張している。間違いなく、ここが羽沢つぐみさんの実家である『羽沢珈琲店』だ。アプリを閉じるついでに時間を確認する。面接の7分前。……いや、まだ入るのはちょっと早い……そう、5分前になつたら入ろう。そうしよう。誰にしているかも分からぬ言い訳をしつつ、適当に周囲をうろつく。

もつとも、2分なんて時間はあつという間に過ぎてしまうわけで。ほんのちょっと歩いた所で、僕は来た道を戻つて店の入り口に再び立つのであつた。
……行つて戻つてくるだけとか、絶対周りに変な人だと思われてる。穴があつたら入りたい。

……しようがない。入ろう。面接から逃げちやうのだけは駄目だ。姉さんにバレたら後が怖いし。覚悟を決めた僕は、固唾を飲みながらゆつくりと入り口のドアを開けるのだつた。入店を知らせるベルが店内に鳴り響いた。これ、注目されやすいから僕は苦手だ。

「いらっしゃいませ！　お一人様ですか？」

「ツ?!」

雷に打たれたかのように肩が跳ね上がり、視界がグラリと揺れた。心臓が飛び出るかと思つた……。全く予想していなかつた人物…………今最も会いたくて、かつ最も会いたくなかつた人が目の前に立つていた。

愛嬌のある笑顔、そして短めに切り揃えられた茶髪。忘れる筈もない。あの、羽沢つぐみさんが僕の前にいるのだつた。しかも、喫茶店の制服らしき、白いシャツにベージュのエプロンを着けた姿で。制服の自己主張が控えめな分、本人の容姿と合わせて素朴で清純な感じが出ていて、その……とても可愛いかつた。

まさか、家の手伝いましてるとは思わなかつた。その上、都合よく僕が来たタイミングで対応に出てくるなんて。

入店してすぐに言おうとしていた言葉が頭の中から消し飛んでしまつた。

「あ、その、僕……っ！」

「……？」

顔が沸騰する。相手に聞こえてしまうのではないかと心配になるくらい、バクバクと心臓が鳴る。体が石のように固まってしまい、急に声が出なくなる。呼吸の仕方を忘れてしまい、息苦しくなる。

「え、えっと……！　ぼ……じやなくて、じ、自分……？　その、め、面接に来た……つ！　き、木下です……！」

それでも、なんとか奇跡的に記憶を取り戻し、声を絞り出すことができた。よくよく考えたら”自分”という1人称もなんかおかしいけど、そんなの気にする余裕はなかつた。

きつとこの時点では相当変な人に思われている筈だ。なんだかもう、帰りたい……。

「——あ、面接の予定の木下さんですね！　お待ちしてました。ご案内しますね！」

接客だからなのか、それとも単に優しいからなのか、羽沢つぐみさんは嫌な顔を浮かべることなく満面の笑みで対応してくれた。その笑顔は、色んな意味で僕には強烈過ぎる……。

その後彼女に先導され、店の奥へと進む。客席は結構埋まつていて、お客様の年齢層も結構マチマチに見えた。一応、学生服の人が多いようには見える。少なくとも、繁盛してそうだというのは分かつた。バイトを募集しているだけはある。

「お父さん。面接の方がいらっしゃったよ」

コンロやらシンクやらが並んでいるキッチンスペースと思しき場所まで連れられると、彼女はそこでコーヒーを淹れていた男性に声をかける。どうやら、彼女の父親のようだ。

「ああ、ありがとう。……君が、木下勇樹君だね？ それじゃあ、奥で話そうか。つぐみ、しばらくの間頼むよ。あ、それとこのコーヒーもよろしくね」

「はーい。行つてらっしゃい」

今度は彼女の父親……マスターとかでいいのかな？ とにかく案内がマスターに変わり、更に店の奥へと連れられた。椅子がいくつかとテーブルが置いてあって、休憩所兼事務所のようなものなのかなと思つた。

そこにお互腰掛け、すぐに面接は始まつた。

「店長の羽沢です、よろしくね」

「は、はい。き、木下です。よろしくお願ひします」

緊張のせいで言葉がつづかえる。今の心境的には採用されたくないが9でされたいが1くらいだと思う。やつぱり、ちょっとくらいは期待するものはある。ただ、それ以上に恐怖心やら羞恥心が強いつてだけで。

……一応、結論だけ先に言つてしまふと、僕は採用されることとなつた。なんという

か、相当人手不足だつたのか、最初から採用する前提かのようにトントン拍子で話が進んでしまつたのだ。というか、直接人手不足であることを告げられてしまつた。流石に、やつぱり止めておきますなんて言える雰囲気じやなかつた。

ちなみに、動機は大学進学に備えてみたいな感じで適当に誤魔化した。
ま、まあ……採用されてしまつた以上はやるしかないとは思う。僕だつてそこまで無責任ではない。

1つ問題があるとすれば、それは……。

「それで、もしよければなんだけど、今からでも入れないかい？　あまり忙しいときは教える暇もないだろうし、お試しつてことで」

……採用が決まつたその直後からシフトに入ることになつてしまつたということだろうか。もうちょっと、心の準備は欲しかつたかな……。僕みたいな人間は、家族以外に“ノー”と言えない人種なのだ。

支給された制服に着替え、手を洗う。これで店に出る準備はできた。しかし、入店してから今に至るまで、僕の心臓は早鐘を打つことを一向に止めようとしてくれなかつた。

だつて、同じ仕事場に羽沢つぐみさん……いや、一応同じ場所で働くことになつたん

だから羽沢先輩の方がいいかな。とにかく、羽沢先輩と同じ空間での仕事だ。しかも、バイト自体が初めて。あらゆる意味で、不安と緊張でいっぱいだった。

ひとまず、深呼吸をして少しでも心を落ち着けよう。吸つてー、吐いてー、吸つてー

……

「木下くん？ 準備はどうかな？」

「ツ!? ゴホッ！ つ、だ、大丈夫です……！」

まるで見計らつたかのように羽沢先輩がやつてきた。不意を突かれた僕は、またもや拳動不審な所を見せてしまつた。いい加減死にたい。

「ゴ、ゴめんね！ 驚かせちゃつた？」

申し訳なさそうに謝る羽沢先輩を見た僕は慌てて首を横に振つて否定する。タイミングこそ悪かつたかもしれないけど、彼女のせいではない。

「いえ、そんなことないです……すいません……」

どもることはなかつたものの、消え入るような小声で答えてしまう。耳まで熱くなつてきたり……顔、赤くなつてないかな……

お互ひ、黙つてしまふ。なにかしやべつた方がいいのだろうけど、こういうときになにを話せばいいのか分からぬ。変なことを聞いたら、ますます空気を悪くしてしまうかも。

「えーっと……そ、うだ！ ま、まずは、自己紹介からだよね！」

幸いにも、妙な空気を打ち破るようにして羽沢先輩が声を張り上げてくれた。助かった。

「羽沢つぐみです。今は高校2年生で、こうして偶に家のお手伝いをしています。担当は、主にホールかな。よろしくね！」

「その……木下勇樹です。高校1年生です。それから……バイトは、初めてです。よ、よろしくお願ひします……」

「そつか、バイト初めてなんだね。でも大丈夫！ 最初は大変だと思うけど、きっとすぐに慣れるから！」

それを聞いて少しは安心する。それはそうと、羽沢先輩は家の手伝いに、バンドもやつてて、姉さんの話によれば生徒会の副会長までやつてることだよね。それに丘女子つて進学校だし……完璧超人だ。好意云々を置いておいても、すごい人だと思う。

「今日はまだ初日だし、シフトも2時間だけだから、軽めのキッチン作業だけにしようか。ケーキとか軽食とか、すぐに用意できるものを作ったり、お皿を洗つたりとか。それで大丈夫かな？」

「は、はい、大丈夫です……！」

いよいよだ。どこまでできるかは分からないうけど、せめて仕事中くらいは集中するようになないと……。羽沢先輩に、変な所見せたくないし。

こうして、羽沢先輩の指導のもと、僕の初めてのバイトが始まった。あれだけ嫌がつておいてなんだけど……やつぱり、こんな近くで羽沢先輩と一緒に居てもらつて、しかも指導してもらえるなんて……なんだか幸せだ。直接は言わないうけど、ありがとう姉さん。

——ところが、そんな邪な考えを徹底的に咎めるがごとく、仕事の出来そのものは悲惨の一言に尽きるのであつた。

「うわ……」

「うーんと……ちょっと……ほんのちょっとだけ焦げちゃってるね。もう一回、やつてみよっか……」

——ホットサンドを焦がしたり。

「あ、最初にバターだよ。そうしないと、野菜の水分がパンに染み込んでしまうから」「す、すいません！」

——たかだかサンドイッチの手順を間違えたり。

「つ……」

「だ、大丈夫!? 指切つてない!？」

——洗おうとした食器を割つてしまつたり。

多分、考えうるあらゆるミスを、たつたの2時間で成し遂げてしまつた。ほぼ常に隣に羽沢先輩が居たのにも関わらずだ。アピールとしても、戦力としても完全にやらかしたのだつた。

そんな僕を責めることはせず、羽沢先輩は必死にフォローをしてくれた。それが逆に、惨めで、恥ずかしくて、申し訳なかつた……

バイトが終了する頃には幸せな気分はすっかり消え失せ、魂は抜け殻のようになつていた。多分、傍から見たら絵画の『叫び』みたいな感じになつてると思う。

「……すいません。割つた食器は弁償します……」

「えっ!? ううん、そんなことしなくても大丈夫だから!」

バイト終了後、待機所で死人のように項垂れている僕は、今日の責任を取ろうとしていた。それを、羽沢先輩はなぜか止めようとする。

……ああ、そつか。そうだよね。弁償とかその前に、クビに決まつてるよね……

「……お世話をになりました」

「……? あつ!? 違う、それも違うよ! そういうことでもないから落ち着いて!」

両手を振りながら、慌てた様子で羽沢先輩は僕の考えを否定する。じゃあ、一体なん

なんだろうか。まさか、お咎めなしと/orいこともあるまい。

「……あのね、木下くん。私だつてお皿を割っちゃつたことはあるし、恥ずかしい失敗もたくさんしちやつたよ。木下くんが辞めちやうんだつたら、私なんてもう何回も辞めなくちゃだよ」

「え…………そう、なんですか？」

…………どうやら、そのまさかのようだつた。頬を指で搔きながら、羽沢先輩は仄かに顔を赤くしながらポツポツと己の失敗経験を語つてくれた。いかにもなんでもできそうに見えるのに、意外な事実だつた。

「うん。でもね、その度に今度は失敗しないようにとか、もつと頑張らなくちやつて思うの。ほら、落ち込んだままだといつまでもなにも変わらないけど、頑張つて上手くできるようになつたら嬉しいでしょ？」

「それは…………まあ…………」

そう言われて、音ゲームを始めた頃を思い出す。今になつて思い返せば、なぜクリアできなかつたのかが不思議になるような曲はいっぱいあつた。だけど、当時は全然クリアできる見込みがなくて、失敗ギリギリになりながらも成功させたときはすごく嬉しかつた覚えがある。

「だから、次また頑張ればそれで大丈夫だよ！　木下くんよりずっとたくさんのお皿を

割ってきた私が保証します！」

グツ、と両手を握つて力強く頷いてくれた。僕を元気付けようとしてるのは明らかだつた。

羽沢先輩が言うことが事実だとして、1日目の僕が割つた皿の総数で勝つてたらそれこそ一大事なのに、そんな慰め方をしてくれるなんて……なんだかそれがおかしくて、思わず頬が緩んでしまう。

「その……ありがとうございます」

「えへへ、どういたしまして！」

うん……次、頑張ろう。とにかく、まずは皿を割らないようにしないと。そう、改めて決意するのであつた。

「それじやあ、お疲れ様…………あ、ごめんなさい！　まだ1つ聞かないといけないことがあるんだつた……」

「聞きたいこと、ですか……？」

僕は首を傾げる。すると、羽沢先輩は「ちょっと待つてね」と一旦席を外す。しばらく待つていると、すぐに戻ってきた。その手には、自身のものと思しきスマホが握られていた。

「なにかSNSつてやってるかな？　シフトの確認用に、連絡先の交換をお願いしても

いい？ もちろん、メールとか電話とかでもいいんだけど」

「——っ！」

核ミサイル級の爆弾発言に、僕の脳回路はショートし、しばらくは言われたことの意味を理解できないのであつた。

……気づいたら帰りの電車に乗っていて、それまでの間の記憶はすっぽりと抜け落ちていた。我ながら、怖すぎる。

しかし、車内で確認したらちゃんと羽沢先輩とチャットアプリでの友達登録がされていたので、どうやら無事交換できたらしい。その日の夜、スマホを弄っている間、僕は隙あらばアプリを起動しては、友達に追加された羽沢先輩のアカウントを眺めているのであつた。

翌日、そんな自分の行動を振り返って凄まじい罪悪感に苛まれたのはまた別の話。

私は店の裏口から、今日お店の後輩になつたばかりの木下くんを見送った。連絡先を交換した辺りから少しば一つとしてたみたいだけど、疲れちゃつたのかな？

最初、お父さんから同年代くらいの男の子が新しくバイトに入るかもしさないと聞いたときは、ちょっとびっくりしちやつた。

学校は中学から女子校だし、幼馴染はみんな女の子だし、この1年で交流が増えたバ

ンド繋がりのお友達もやつぱりみんな女の子だ。お客さん以外で歳の近い男の子と話すこと自体、久しぶりだつた。

ちゃんと話せるかな、と思つていたけど、そんな心配は実際に木下くんと会つたら吹き飛んでしまつた。だつて、私なんかよりもずっとずっと緊張してたんだもん。バイトをするのは初めてみたいだつたし、学年も1つ下の後輩。私がしつかりしなきや駄目だつて思つたら、不思議と普通に話すことができた。

……まあ、お店の仲間として初めて話しかけたときはすごく驚かせちゃつて申し訳なかつたけど。

それに、木下くんはとても責任感のある子だつた。些細なミスでもすごい落ち込んで、なんと割つたお皿の弁償までしようとしてくれた。お皿を割つちやうことなんて、私やイヴちゃんも未だにやつちやうのに。もちろん、割らないのが一番なんだけど。

だからこそ、しっかりとサポートしてあげたい。私はホールがメインだし、コーヒーは練習中だからそんなに教えられることがあるわけじゃないけど、それでもできる限りのことはしてあげたいと思う。それで、最終的にこのお店のことが好きになつてくれたら嬉しいな。

あ、そうだ。今度、お店のケーキとかを試食してもらわないと。お客さんに説明やお

すすめをするとき、やつぱり実際に食べたことがあるかどうかで全く違うから。コーンヒーの種類の説明とかも必要な筈だ。……プラツクが苦手な私が説明しても、説得力がないかも知れないけど。

……そろそろお手伝いに戻らないと。もうすぐ閉店だし、頑張らないと！

そういうえばチャットで同年代の男の子と友達登録したのも初めてだなあ、と思いつつ、私はホールに戻るのであつた。

第3話 懇親会？ 尋問会？

日曜日、『羽沢珈琲店』の開店の10分前。僕は店の裏口から店内へと入る。早いもので、こうして裏口から入るのは既に5回目だ。

「おはようございまーす」

「おはようござりますユウキさん！ 今日も一緒に頑張りましよう！」

元気な声が返ってきた。待機所には、既に制服に着替えた三つ編みの銀髪の女子が立っていた。若宮イヴ先輩。ハーフの帰国子女であり、僕のバイトの先輩だ。初めて会ったのは、先週の日曜日だった。

とても社交的で明るい人で、休憩中などの仕事以外の時間でも僕に積極的に話しかけてくれた。話題さえあれば僕でも普通の受け答えができるので、意外にもすぐ打ち解けられた。偶に、彼女独自の『武士道』の話を聞いて、反応が遅れることがあるけど。

……それと、どこか別の場所でも見た気はするのだが、全然思い出せない。どこだつけ？

ちらりと待機所を見渡す。羽沢先輩の姿はない。やつぱりか。元々今日は手伝いに入らないということをチャット経由で聞いていたので驚きはない。でも、ちょっと残念

だつた。心の中で、小さく溜息をつく。

「……？ ユウキさん、どうかしましたか？」

「ああ、いや、なんでもないんです……」

マスターがこつそり教えてくれたことだが、そもそも僕を雇つたのは人手不足もあるが、羽沢先輩の負担を少しでも和らげる為のようだ。だから、僕がシフトに入つていて羽沢先輩が入つていらない今の状況というのは、むしろ理想的なのだ。

……まあ、残念でることに変わりはないのだけど。

仕事そのものには、少しづつ慣れてきた。初日みたいな凡ミスは起こさなくなつたし、仕事の範囲も僅かに広がつた。簡単な部類の仕事にしか関わつていないものの、サポートなしでキツチンの仕事を進められるようになつた。近々、ホールなどもやるらしい。

先週の記憶では、日曜日は結構忙しい感じだつた。今週こそは、もう少し役に立つてみせたいと思う。

そんなことを考えながら、僕は開店の準備をしていたマスターに挨拶をするのであつた。

* * *

家から少し離れたところにある、練習用のスタジオ。今、私はそこで『Afterglow』のみんなと一緒に次のライブを想定した練習を進めている。みんなの演奏に耳を傾けつつ、自主練で克服したフレーズをなんとか合わせる。よかつた、今日は一度もミスせずに弾けた。

今日は久しぶりに全員で集まれる練習だし、可能な限り進行を止めないようにしたかつたんだけど、上手くいってよかつた。

でも、みんなもたくさん練習してみたいで、すぐ上手になつてたし、ここで満足しちゃ駄目だよね。置いていかれないように、もつともつと頑張らないと。

「……うん、まあまあかな」

演奏が終わり、蘭ちゃんが僅かに口元を緩めながら頷いた。表情の変化は少ないけど、とっても嬉しそうだ。それに、蘭ちゃんがああ言つてるときは、実は結構褒めてる証拠だ。

「めっちゃいい感じ、の間違いじゃないの、らくん？」

「う、うるさい。どうせ通じるんだから、別にいいでしょ」

モ力ちゃんが口元を細めながら蘭ちゃんに詰め寄る。すると、蘭ちゃんは顔を真っ赤にしながらモ力ちゃんから顔を背ける。あんなに簡単に蘭ちゃんの本音を引き出し

ちやうなんて、やつぱりモ力ちゃんはすごいなあ。

「うんうん、前よりかなりよくなつてるよ！ いっぱい練習してきてよかつた！」

「だな。次のライブがいつになるかは分かんねーけど、そんときはみんなを驚かせてやろうぜ」

ひまりちゃんと巴ちゃんが同意する。もちろん、私も。最近はお客様の数も増えてきたし、1人でも多くの人に楽しんで欲しいなつて思う。

「時間は……うん、あともう1回だけできる。次で、ラストにしようか」「りょうか〜い」

蘭ちゃんの号令のもとに、私たちは再度構える。ラストだし、いい雰囲気のまま終わらせたい。でも、気負いすぎると力んじやつて失敗しやすくなるから、なるべく自然体で。最近、ちょっとだけ意識してできるようになつた。

巴ちゃんのドラムがリズムをとる。それに続くようにして、私たちは前奏を開始するのだつた。

* *

最高の出来栄えで練習を終えた私達は、レストランで遅めの昼食を取つてゐる。ちなみに私が頼んだのはハンバーグ。子供っぽいって言われちやうかもしないけど、今でも好きなの。

「ねえねえ、みんなはこのあとどうするの？」

「別に、特になにかあるというわけじゃないけど。強いて言うなら、花屋とか見ておこうかなって感じ」

ひまりちゃんの問いに、最初は蘭ちゃんが答えて、モ力ちゃん、巴ちゃん、私と続けて答えていく。するとなんと、みんなこのあとは時間が空いているということが判明した。

「ここまでみんなのスケジュールが噛み合うのって、すごい久しぶり。なんだか嬉しいなあ。

「じゃあさ、久しぶりにみんなでつぐの所に行かない？ 私、あそこのケーキが食べたくなっちゃった」

「えへ、ひーちゃん、この前甘いもの減らそうって言つてたのに～？」

「う、そういうえば言つたような…………だ、大丈夫！ 今日いっぱい演奏したし、上手にできた自分への褒美つてことで！」

「なにそれ。……でも、それもいいかもね」

「だな。つぐはどうだ？」

巴ちゃんに聞かれた私も「大丈夫だよ」と笑顔で頷く。あ、そうだ、みんなに木下くんのことって話してないや。ついでに紹介しておかないと。

「そういえばね、先週から新しいバイトの人が入つたんだ。1年下の男の子で、木下くんって言うんだけど」

「え、ほんと!? ねえ、その木下君つて子子は今日はいるの!?」

「えつ!? うん、夕方くらいまではいるけど……」

予想以上にひまりちゃんの反応がよくて、少し狼狽えてしまう。一体どうしたんだろう?

「どんな子なの!?」

「とつても真面目な子だよ。あ、それと、仕事を覚えるのも早いんだよ。初日は緊張して失敗も多かつたんだけど、最近はすごい助かってるの」

これは自信を持つて言える。料理は初めてつて言つてたけど包丁の扱いとかもすぐ上達したし。木下くんつて手先がすごい器用なんだなあ、つて思つたもん。

……だけど、ひまりちゃんが期待していた回答とは違つたみたい。

「そういうのも大事だけど、そうじやなくて〜! 見た目とか、身長とか、そういうの！」

「ええ!? 身長は……巴ちゃんと同じかちょっと高いくらいで……見た目は……えーっと……」

答えに困ってしまう。どちらかと言うと、中性的な顔だよね。髪は黒くて……体は、

細めかな……。私は、可愛い感じだと思うけど、ひまりちゃんは瀬田先輩の男性版みたいな人を想像している気がする。

「そこら辺で止めときなつて、ひまり。どうせこれからつぐん家に行くんだから、直接見て確認すればいいだけだろ？」

幸い、巴ちゃんが間に入つて止めてくれた。ひまりちゃんもそれで納得したようでは「はーい」と落ち着いてくれた。

「ちなみに、つぐ的にはどうなんですかな？ その、木下君って人は？」「あり“か”なし”かでお答えください」

「どういうこと!? えっと、うーん…………」「あり“？」

もちろん、嫌いということは断じてないし、もつと仲良くなりたいとは思う。でも、『あり“か”なし”かつてそういうこと?』

あまり質問の意味が分からず、首を傾げながら答えてしまった。

「止めなよモカ。そんな聞き方したつて、つぐみが“なし”って言うわけないじゃん」

「分かんないよ？ もしかしたら、もしかするかもよ？ モカちゃんの勘は百発百中ですから～」

「……??」

結局、蘭ちゃんが止めてたけど、どういうことだろう？ 疑問だけが残るのであつた。

とにかく、久々に勢揃いになつた私たちは実家の喫茶店に向かうことで決定したのだった。

僕は休憩を挟み、午後の業務へと戻る。午前中の動きは悪くなかつたけど……多分、今から夕方くらいまでが一番忙しくなる筈だ。油断せずに行こう。

そう思つていると、入り口の扉が開いてベルが鳴る。新しいお客様なんだ。若宮先輩が対応に出る。この時間の新規のお客さんは十中八九軽食かデザートを頼む筈だ。すぐに取りかかるるようにしておく。

「いらっしゃいませー！　あ、ツグミさん！　それにみなさんも一緒に一緒なんですね！」

“ツグミさん”という言葉に反応し、僕の胸が一瞬高鳴る。その衝動に誘われるように入り口の方へと視線を向ける。

羽沢先輩が居た。今日は1日中外出していると思つてたから、1目見れただけでも嬉しい。しかも、今日は制服じゃなくて私服だ。茶色のワンピースにベージュのカーディガン。めちゃくちや可愛い……。

……あれ？　羽沢先輩の後ろにも4人の女子が立っている。羽沢先輩の私服に気を

取られて、気づくのが遅れてしまった。友達だろうか？

……そう思っていたが、厳密にはそれだけではなかつた。その4人は、2週間前……羽沢先輩を初めて見たとき、一緒に居た人たちだつた。

つまり、バンドの『Afterglow』のメンバーが勢揃いしていた。色々あつて名前は全然覚えてないけど、容姿くらいは覚えている。例えば……たしか、あそこの黒髪に赤メッシュの人がボーカルだ。

「こんにちは、イヴちゃん。えっと……席、空いてるかな？」

「はい！ 奥のテーブルに椅子を追加すれば大丈夫です！ ご案内しますね！」

「ありがとうございます、イヴちゃん。私も少しだけ手伝う……」

「いえ、駄目ですツグミさん！ 今日のツグミさんはお客様です。私達に任せて、ゆっくりしてください。ブシにも休息は必要です！」

羽沢先輩が働くとしていた所を、若宮先輩が押し留める。現状、ちゃんと店は回っているし、友達と一緒に来たのならお客様としてゆっくりして欲しい。そんなところだろう。それに関しては、僕も同意だ。

しかし、羽沢先輩もそう簡単には引き下がらなかつた。やや押され気味ながらも、“する”、“しない”的攻防が繰り広げられていた。まあ結局、バンド仲間の説得もあって渋々納得したみたいだけど。

「えーっと、じゃあ、お言葉に甘えて……ごめんね？」

「気にしないでください。それでは5名様、ご案内です！」

話は終わつたみたいで、ようやく若宮先輩が案内を始める。5人はそれに続く。あんまり見ると不審がられるかもしれないと思つて、僕は視線を外す……んだけど、今度は向こうから視線を感じる。

顔は動かさずにチラリと見ると、ピンクの髪の人が僕の方を見ているのが分かつた。えーっと……そうだ、ベースつて奴をやつてた人だ。

……うわ、なにあれ……大きい……。若宮先輩を含めても、あの中でぶつちぎりなんじや……いや、駄目だ駄目だ！ 女子はそういう視線に敏感だつて姉さんが言つてたし、見ないようにしないと。集中、集中……

「——木下くん、お疲れ様」

「うわああ！ お、お疲れ様です……」

集中しようとした矢先、いつの間にか近くまで来ていた羽沢先輩に声をかけられ、素つ頓狂な声をあげてしまつた。なんか、先週にもこんなことがあつた気がする。

「ごめんね、急に声をかけちゃつて……」

「いや、大丈夫です。その、なんですか？」

「あ、うん。あのね、ちょっとだけでいいんだけど、時間あるかな？ 今、一緒に来た人

たちつて私の幼馴染でね。多分、よくお店にも来るから紹介したいんだ。もちろん、お父さんの許可は貰つてるから」

「えつと、はい、そういうことなら……」

その提案に内心びっくりしている僕がいるが、断る理由もないでの承諾する。とか、羽沢先輩の誘いにならなんにでも承諾する所存だ。

4人の座っているテーブルに向かう羽沢先輩に続く。当たり前だけど、全員女子だ。あそこまで女子が固まっている集団に自分1人が向かうという経験は今までにない。気まずいような、緊張するような……なんか変な気分だ。

「お待たせ、みんな。紹介するね……こちら、新しくバイトに入つて貰つてる木下くん。えっと、簡単に自己紹介とかしてもらつても大丈夫かな？」

4人の視線が僕に集中する。さつきの変な気分がますます強くなる。……ん？ あれ？ なんでベースの人はそんなあからさまにがつかりしてるの？ 僕、なんか失礼なことした？

「その……木下勇樹です。高校1年で……1週間前から、ここでバイトさせて貰つています。羽沢先輩にはいつも助けてもらっています」

最後に「よろしくお願ひします」と付けて、軽く頭を下げる。羽沢先輩の幼馴染ということは、これから何度も顔を合わせる可能性があるということで、出来るだけ丁寧か

つ簡潔な挨拶を心がけた。

それが功を奏したのか分からぬが、4人は幾分か表情を和らげてくれた。……いや、銀髪の人は最初からあんな感じだったかも。

「美竹蘭。ここにいるみんなそうだけど、高校2年生。まあ、よろしく」ボーカルの人……美竹先輩は淡々と告げる。この人のことは比較的印象に残つてゐる。印象の通り、クールな人みたいだ。

「ふつふつふく、蘭はねく、なんと、家が華道の家元なのだ。お花のことならなんでも聞いてくれたまえ！」

「ちよつと、モ力……！　今はそういうのいいから……！　というか、なに勝手に質問受け付けてんの」

……と、思つたら、銀髪の先輩——名前はモ力というらしい——に褒められたことで目を丸くし、髪のメッシュのように顔を赤らめていた。どうやら巷で言う、ツンデレつて奴みたいだ。

「宇田川巴だ。よろしくな」

「上原ひまりです。部活はテニス部！　よろしくね！」

続いて、赤髪の人……ドラムをやつてた人だ……が宇田川先輩で、ベースの人が上原先輩。

「青葉モカで～す。え～っと、コンビニでバイトしてて～……ん～？」

そして、最後にギターの青葉先輩か……って、あれ？ 青葉先輩がなんか難しい顔で僕のことを見つけてくる。なんだか不思議な雰囲気を纏つてはいるが、その容姿のレベルは羽沢先輩に勝るとも劣らない。そんな人に見つめられ続けているせいか、妙に落ち着かない。

しかし、こちらから止めるように言うこともできず、向こうの出方を待つしかできなかつた。

「どうかしたの、モカ？」

「んー、……ねえ、ゆー君？」

「は、はい？」

ゆー君……勇樹を略してゆー君か。まさか初対面でそんな呼び方をされるとは思わなかつた。女子に名前で呼ばれてことなんてないから、なんだかムズかしい。

——そう思つていた直後、青葉先輩の口からとんでもない爆弾が飛び出るのであつた。

「なんか、どつかで会つたようなー？」
「な……っ！」

「なんか、なんで気づいたのっ!? もちろん、あのライブ以外で彼女らと顔を合わせた

ことはない。あのときは結構なお客さん居た上に、客席は照明が暗くて顔は分かりづらい筈なのに、青葉先輩は僅かでも僕のことを認識していたの……？

「い、いや……多分、ないと思います……」

当然、この場はしらを切る。もし僕があのライブに居たことを知られたら、バイトを始めるまでの期間的に、動機がバレてしまう可能性まである。羽沢先輩の居るこの場でそんなことが起きたら……終わりだ。

思い出すな、思い出すなど全力で祈る。これは、あれだ。受験のときの合格発表直前のときの緊張感に似ている。落ちていたらどうしよう……お願いだから受かつていてくれ……そんな切実な思いで発表を待っていた気がする。

果たして、今回の結果は……

「んー……まあ、いつかく。そんじや、今後ともよろしく〜」

…………危なかつた。そこまで興味がなかつたのか、特に追求されることも、思い出されることもなかつた。

青葉先輩……この中では要警戒対象である。これからもその言動には注意しよう。

「えっと、じゃあ、羽沢先輩……」

「あ、うん。時間取らせちゃつてごめんね。もう大丈夫だよ。残りの時間も頑張つてね！」

羽沢先輩の素敵な笑顔に見送られつつ、僕は逃げるようにしてその場を離れた。その後は少々忙しくなった為に彼女らと接触する機会はなかつたが、結果的にそれでよかつた。羽沢先輩の様子を窺うことができなかつたのは残念だけど。

*

夕方、道路が茜色に染まつた頃、僕はバイトを上がりて店を出た。再度青葉先輩と接触しないようにと急いで帰る準備をした結果だ。

……ところが、どうやらそれが裏目に出たようだ。

「じゃあ、みんな、また明日ね！」

店の入口から聞こえた声に、僕は思わず物陰へと隠れてしまう。羽沢先輩の声だ。それが入り口で聞こえるということはつまり……。

「うん、また明日」

続いて聞こえたのは美竹先輩の声。その後もあのテーブルに集つていた面々のさよならを告げる声が聞こえてくる。どうやら彼女らの帰宅のタイミングと重なつてしまつたらしい。最悪のタイミングだ。

お願ひだからどうか、彼女らの帰宅ルートが裏口側の見えるルートでないようにと再び必死に祈つた。

しかし、今回はその祈りは通じなかつたらしい。こつちへと歩いてくる。隠れる場所

なんてないし、後退できる道もない。このままだと鉢合わせだ。

どうする……どうする……と考えを巡らせるが、なにも思いつかなかつた。結果的に、その場に立ち尽くして彼女らを待ち構える形になつてしまつた。

「…………あれ、あんた……木下だっけ？」

「おう、木下。今、帰りか？」

先頭を歩いていた美竹先輩と宇田川先輩と目が合う。しかも、声までかけられてしまつた。これはもう回避は不可能だつた。

「つ……お疲れ様です」

「お疲れ、木下君！　木下君は、いつもどこから来てるの？」

「えっと……、ここから3つ先の駅で……」

「そうなんだ！　じゃあ、ちょっとだけだけど途中まで同じだね。一緒に行こつか」

女子4人と一緒に歩く。字面だけ見れば非常に素晴らしいイベントなのだが、今の僕には上原先輩の言葉は脅迫にすら聞こえてくる。

「おお、両手両足に花ですね～…………ん？…………おー…………そうだつたー」

「いや、両足つてなに……つてモカ？　どうかした？」

あ、嫌な予感。なにを考えているのかよく分からぬトロンとした目をこちらに向けてくる。ああ……お願ひ、後生だから……当たらないで……

「ゆー君、どつかで見たな～って思つたけど～そうだ～、前のライブで初めて見たお客様
んだ～」

駄目……でした。残酷にも、恐れていた事態が起きてしまつた。不幸中の幸いと言え
るのは、ここに羽沢先輩が居ないということだろうか。

「い、いや、それは……！」

「ん～？ それでー、ライブが2週間前で～バイトを始めたのが1週間前か～。おやお
や～？ これはこれは、どういうことかな～？」

なんとか会話を流そうと思つたが、青葉先輩に先んじられてしまう。自分から話しか
けにいけない僕には、難しすぎたようだ。

「……あ！ もしかして、もしかして……!? 恋の予感!?」

「ほーう……面白いことになつてきたりじゃねえか」

上原先輩が目を輝かせ、宇田川先輩は不敵な笑みを浮かべながら鋭い視線で僕を射抜
く。青葉先輩以外の人にも、完全に察せられてしまつた。

「……ちよつと、木下。どういうこと？」

「えつと……その……」

「うう、なんか美竹先輩……急に怖くなつた……。僕よりずっと背は低いのに、すごい
迫力だ……流石、バンドのボーカルやつてるだけはある。猫に睨まれた鼠の気分だ。

「まあ、待てよ蘭……落ち着けって……」

「落ち着けって言つたって……！ つぐみのストーカーかもしんないじやん！」

「いや、それはねーだろ。つぐの奴があんだけ信頼してんだ。別に悪い奴じやないつて「でも……！」

美竹先輩は必死に宇田川先輩に食い下がる。正直、美竹先輩の言い分は分かる。とい
うか、ちよつとはそういう自覚はあつたからバレたくなかったわけだし。

「ねえねえ！ それってつまり一目惚れってこと!? そうだよねー、つぐはとつてもい
い子だし、可愛いもんねー！ 分かる分かる！」

あの、上原先輩……あまり大きな声を出さないでください……羽沢先輩に聞かれた
ら、死んでします……。

「ところで木下。お前、このあと時間あるよな？ 少し早いけど、一緒に飯でもどうだ
？」

話が一段落したのか、宇田川先輩は僕に首に腕を回しながら夕飯に誘ってきた。う
わ、近いよ……でも、これってつまり……。

「あの……それって……」

「心配すんなって、別に取つて食つたりしないさ。あれだ……ちよつとした”懇親会”
だ」

尋問会の間違いではないだろうか。もちろん、決して口には出さないが。

……こうして、僕は近くのファミレスへと連行された。ことここに至つて誤魔化すなんてことができる筈もなく……僕は全ての事情を白状してしまったのであつた。

*

夜の8時。空がすっかり真っ暗になり、1人でゲーセンに入れる時間がとうに過ぎてしまつた頃。尋問会兼懇親会は終わりを告げ、僕たちは解散した。バイト上がりといふことも相まつて、結構疲れてしまつた。

ファミレスに入つてからというものの、質問に次ぐ質問の嵐だつた。どうして好きになつたの？ とか、どういう経緯で『羽沢珈琲店』を知つたの？ とか、進捗はどうなの？ とか。最後のみたいな、本当に心が抉られる質問もあつて、人前でなければ泣きたかつた。

一応、問い合わせられるだけの徒労には終わらず、成果もあつた。

1つ目は、とりあえず美竹先輩からのストーカー疑惑が晴れたこと。決め手は姉さんに無理やりバイトに応募されたという事実と、尋問中に僕が顔を真っ赤にさせていたかららしい。……なんでそういうこと本人に言うの。ただの拷問だよ……。

同時に、「つぐみを傷つけたら、許さないから」と釘を刺されもしたが。

ちなみに、僕の羽沢先輩への好意を確認した他の3人の反応は三者三様だつた。

宇田川先輩は「ま、頑張れよ」と、ほぼ中立。

上原先輩は「相談したいことがあつたらなんでも聞いてね！ 応援してるから！」と、友好的。もつとも、興味本位な感じも見受けられたけど。

そして青葉先輩だが……よく分からぬ。「いやー、エモいねー」とか言われたが、理解不能である。多分、面白がつてゐるんだと思う。

2つ目は、その4人と少し打ち解けたこと。羽沢先輩が僕のことを紹介前から話していくくれたらしく、尋問が終わつてストーカー疑惑が晴れてからは結構穏やかに会話ができた。なので、後半はなんだかんだ言つて懇親会ばかつた。彼女らと険悪な関係のままバイトを続けるというのは多分無理なので、よかつたと思う。

そして最後に、彼女らの口からバンドをやつてることを教えてもらつたこと。これで変に知らないフリをせずに済む。どうやら最近は『Circle』というライブハウスでライブをすることが多いらしく、よかつたら見に来いと誘つてもらえた。うーん……正式に誘われたなら……なんとか、1人でも行ける……かな？

まあ、そんなこんなで、意外にも悪い結果とはならなかつた。しかも、連絡先まで交換してしまつた。羽沢先輩に統いて、4人も友達登録が増えた。まさに快挙だ。

ゲーセンには行けなかつたけど……有意義な時間だつた。そう思い、駅に向けて歩きだす。

「へい、そこのお兄さん。いいモノがあるんだけど、ちょっと話を聞いてかねーかい？」

「……なんですか、青葉先輩」

歩きだそうとしたその瞬間、後ろから青葉先輩に呼び止められた。他の3人とはもう別れたらしく、1人だつた。

ヤクの売人のようなふざけた口調に、今度はなにが来るんだと警戒する。

「ふつ、ふつ、ふう。まずは、これを見なされ〜」

彼女はスマホを操作すると、その画面を僕へと向けた。

——ソレを見た瞬間、僕の体は石になつた。

「こ、これって……！」

「ココだけでしか手に入らない、限定商品だよ〜。気に入つたか〜い？」

内緒話でもするかのよう、青葉先輩は手を口元に寄せながら潜めた声で語りかけてくる。彼女の顔がかなり近くまで寄つて来るが、僕はそれどころではなかつた。

——画面に映つていたもの、それは羽沢先輩の写真だつた。こつそり撮つたものじやないことは、カメラ目線の羽沢先輩の顔を見れば分かる。

撮られたとき恥ずかしかつたのか、微妙に頬を染めつつ、困つたように眉をへの字にしている。それだけでも1発K.O級の破壊力を秘めているが、もつと恐ろしいものが

あつた。着ている衣装だ。頭に黄緑のリボンを巻き、黄色を基調とした丈が短めのワンピース、そしてやや大きめの黒のパークー。これはヤバイ。特にパークーが少し大きい所がヤバイ。普段の彼女のイメージを知っている分、ニューヨークのストリートファッショントピの衣装とのギャップがヤバイ。もし仮にこの衣装で、いかにも世の中がつまんないんですけどみたいな表情をしていたら、完全にいい所のお嬢さんがグレちやつた不良の構図だ。はつきり言つてこの写真は危険だ。僕にとつてはヤクと同義だ。一度見てしまつたらもう目が離せなかつた。

「前々、新しいバンドの衣装を合わせてたときの写真です。どうかね？」 やまぶきベーカリーのパン30個で手を打ちましたよ。もちろん、みんなには内緒ですよ？」

…………悪魔だ。悪魔が目の前に居る。…………いやいや、確かに盗撮された写真じやないけど、本人の許可なくこの写真を手に入れていいわけがない。そうだ、我慢だ木下勇樹。やつていいことと悪いことがあるだろう？ ここは青葉先輩を注意する場面だ。よーし……

「青葉先輩、そういうのは——」「ちなみに、いらない場合は、容量がもつたないので削除します」「ツ！…………つ…………うぐ…………いや…………う…………くだ、さい」

永遠にも等しい葛藤の末……とても、とても小さな、そよ風で吹き飛んでしまうような声で、そう答えてしまった。……僕は、僕……は間違いなく日本一駄目な日本人だ。そして僕にとっての日本一素晴らしい日本人は、「毎度あり」と惚けた顔で告げるのだつた。

……ごめんなさい、羽沢先輩。でもこの写真、めっちゃ可愛いです。宝物にします。

第4話 最初の一歩

「そんできー、あんた、そろそろ羽沢さんとなんか進展とかないわけ？」

バイトを始めてからそろそろ1ヶ月が経とうとした頃の日曜日、今日も今日とてバイトに向かおうと準備していた僕を、姉さんが呼び止める。そしてなんの前触れもなく、僕の心にナイフを突き立てた。

「いや……別に、ないけど……」

「はあ？ マジで言つてんの？ なんつーへタレ……」

「うぐ……」

その物言いに腹が立たないわけじやないが、事実だけに言い返せない。既に結構な回数、羽沢先輩と一緒にバイトしたが、せいぜいがちょっとした雑談で他はほとんど仕事中のやりとりばかりだ。

その程度で男女の仲が進展するなんて奇跡が起ころる筈もなく、連絡先の交換が今の所の最高の戦果だ。

ついでに言えば、悲しいことに……いや、むしろ当然か……羽沢先輩には全く意識されていない。その証拠に、仕事中に指が触れ合うなんていうラツキーなアクシデントが

あつたが、僕が慌てて手を離して謝罪した一方で、羽沢先輩は「ううん、大丈夫だよ。私こそごめんね」と平然としていた。あれは……ちょっとへこんだ。

「別に……今までいいよ。近くに居られれば、それで……」
 「それは、羽沢さんに彼氏がいないからでしょーが。もし羽沢さんに彼氏ができたら、あなたそれでも今と同じこと言えるわけ？」

「え……」

姉さんの指摘に言葉を失う。もし……羽沢先輩に彼氏ができたら…………あ、うわ……無理、ダメージ大きすぎるかも……。だつて、もしそうなつたらバイト中に2人で店に来るかもしれないんでしょ？ それをずっと見せつけられるんでしょ？ そんなの生き地獄に決まっている。

「ほらやつぱり駄目なんじやん。言つとくけど、あんた今相当ラツキーなポジションに居るんだからね？」 羽丘は女子校だから学校にライバルは居ないし、バンドもガールズバンドだし。バイト先でも男子はあんただけなんでしょ？」

「た、確かに……姉さんの言う通りだ。考えれば考えるほど、自分がいかに幸運なのかが分かる。

「動くなら今之内つしよ。いい加減、デートにでも誘つてみたら？」

姉さんの提案に、普段の僕だったらすかさず「無理！」と叫んでいたことだろう。し

かし、先ほどの“最悪の未来”を聞かされてしまった以上、そもそも言つてられなかつた。
 デート……デートか……誘えるかな、僕に……。こういうときつて、なにに誘えればいいんだろ。……映画とか？ よく分からん。

止むを得ず、姉さんに聞いてみた。

「まあ、映画は無難ちや無難だけど、相手の好みのがやつてるとは限らないかな。ご飯も、なにかのお礼とかでもない限り露骨じやない？ 羽沢さんを交えてご飯に行つたこと、ある？」

「ううん、1回もない……」

羽沢先輩以外の『Afterglow』との懇親会を除けば、さっぱりだ。

「うーん……だつたら、最初はとりあえず勉強を教えてもらうとかの方がいいんじやない？ 先輩と後輩だからお願ひする理由としては妥当だし、話も途切れにくいでしょ。羽沢さんは生徒会に入つてるくらいだから、極端に成績が悪いとかはないだろうし」「……なるほど」

思つた以上に堅実で、実現可能そうな案が出てきた。勉強か……僕の学校は1学期の定期テストは期末のみらしいから、今すぐがつづりやる必要はないけど、羽沢先輩を誘う口実としては、一番現実的だ。

「ありがと。一応、その方向でやつてみる」

「んー、頑張りな。上手くいったらお礼になんか奢つてね」「はいはい」

姉さんの言葉を適当に流しつつ、僕は残りの準備を終えてから家を出た。まだ店に着いてすらないのに、なんだかもうドキドキしてきた。

いや、大丈夫、大丈夫。勉強を教えて欲しいってお願ひするだけだ。デートの誘いつて思っちゃうと緊張するからこの際一旦忘れておこう。ともかくにも、こつちから声をかけるのが大事なのだから。

……チャットツールを使おうともしたのだが、文章がなかなか纏まらず、その文章ができあがつても、いざ送信する段階になつたら怖気づいてしまい、送信せずにそのままにしてしまった。こうなつたら、もう直接言うしかない。

道中、何度も深呼吸を挟みつつ、心の準備を進めておくのであつた。

*

『羽沢珈琲店』に到着し、着替えを終えてシフトの時間まで待機中の僕は、いよいよぞと己に言い聞かせる。

羽沢先輩に直接話を切り出すタイミングはそれほど多くない。待機中の今、休憩時間、そして上がつた後だ。そのいずれかで誘う必要がある。

うう……手が汗ばんできだし、心拍数はもはや異常な数値を叩き出している。なん

か、なにもしてないのに息切れしてきたし。昔、授業の一環でプレゼンをやつたことがあるけど、そのときの、クラス全員の前で発表するときの緊張感を何倍にも高めた感じだ。

「あ、木下くん、おはよう。今日も早いね」

既に制服に着替えている羽沢先輩が姿を現す。最初のチャンスがやつて来た……！
「おはようございます、羽沢先輩。…………えっと、その…………」

「…………？ どうしたの？」

話を切り出そうとする。しかし、喉になにかが詰まってしまつたかのように続きが出てこない。ほら、行け、木下勇樹…………！ “勉強教えてください”と言えばいいだけだ……今こそ、なけなしの勇気を振り絞つて……！

「つぐみー、ちよつといいかーい？」

「お父さん？ はーい、今行くー！ ……ごめんね、木下くん。また後でね」

「え…………あ、はい…………」

……駄目だつた。突如マスターに呼ばれた羽沢先輩は、そのままキツチンへと行つてしまつた。僕だけがポツンと待機所に取り残される。お前は敗北者だと言われているかのような静けさだつた。

いやいや、ここで折れちや駄目だ。さつきも話しかけるタイミングの確認はしたじや

ないか。まだ後2回も残っている。大丈夫、必ずできる。

——そう、思っていた。だが、現実はそうは上手く行かなかつた。

まず、休憩時間。先週は休憩時間の一部が被つていたので、話す時間はあるだろうと見込んでいたのだが、今日はそうじやなかつた。見事に入れ替わりでの休憩となつていた。

よつて、休憩時間に話しかける案は挑戦することもなくボツとなつた。

そして、次にバイトを上がつた後。このタイミングであれば時間に制限などないのでは、自由に話しかける機会を窺うことができる。なんだかんだ言つて、このタイミングが本命ではあつた。

ところが、その目論見は大きく外れることになる。なぜならば……

「木下くん。今日はこれからバンドの練習があるから、お先に失礼するね。お疲れ様!」

「え……あ、はい、お疲れ、様です…………はあ」

……と、まさかの先に上がられるという事態。このケースは全く想定していなかつた為、虚を突かれた僕は咄嗟に誘うことができなかつたのだ。

結果として、この日は僕はほとんど会話することができず、『勉強を教えてもらおう大作戦』は見事に失敗に終わつた。勉強のべの字も言い出すことすらできなかつた。

……いや、まだだ。単に今日が失敗に終わつただけだ。必ず、誘うチャンスは来る筈

だ。今回ばかりは、そう簡単に折れるつもりはない。なにせ、結構な危機的状況なのだから。

——こうして、僕は来る日も来る日も羽沢先輩を誘おうとした。誘おうとしたんだけど……結論から言えば、僕がいかにヘタレなのかを認識するだけの日々の連續だつた。

初日は、單に間が悪いだけだつた。仕方がなかつたと、言い訳のしようもあつた。だけど、それ以外の日は話しかけるチャンスくらいならばいくらでもあつた。實際、話しかける所までは行つたこともある。なのに、その後が続かないのだ。誘おうとする瞬間、断られたときのイメージが脳裏に浮かび、言葉を止めてしまう。そして、結局はどうでもいいことばかりを口から出してしまいうの繰り返しだつた。

立ち止まつている場合じやないことは分かつてゐるのに、羽沢先輩ならきっと勉強を教えてくれるだろうことも予想がついているのに……まだ体験してもいない最悪な結末の空想の前に、僕は足を止めてしまつた。

……やつぱり、僕には無理なのかな……恋人を作るなんて。そういうのは結局、もつと明るくて、気遣いが上手くて、話上手な人だけに与えられた特権なのかな。

そんな風に考えが下向きになりつつあつたとき、再び日曜日がやつてくるのであつた。もし、今日誘えなかつたらもう絶対に誘えない氣がする。そう考えてしまうほど、

僕は追い詰められていた。

日曜日。いつものようにお店を手伝うべく、制服に着替えた私は開店に備える。今日はイヴちゃんが居ないから、お父さんを除けば木下くんと2人でのシフトになる。頑張らなくちゃ。

……そういえば、その木下くんなんだけど、なんだか最近元気がない気がする。多分だけど……今週の半ばくらいからかな？　ほんの少しだけど、いつもより口数が少ないのだ。今日も、まだ挨拶しか交わしていない。

体調が悪いというわけではなさなんだけど、ちょっと心配だなあ。もしかして、なにか悩みとかあるのかな？　もしそうだつたら、どれだけ力になれるかは分からぬけど、相談に乗つてあげたい。違うかもしれないから、無理に聞いてみたりはしないけど。

せめて、今日はできるだけ木下くんの様子を気にかけるようにしておこう。もちろん木下くんのことは信頼してるけど、念の為。一応、先輩だしね。

「つぐみ、ちょっといいかい？」

「お父さん？　どうしたの？」

そんなことを考えていたとき、お父さんが近くまでやつてきた。

「突然なんだけど、午後からしばらく外出しないといけなくなつてね。多分、17時くらいまではかかるから……すまないんだけど、その間はつぐみがコーヒーハーの面倒を見てくれないかな？」

「え、私が？　でも、いいの……？」

ずっと練習してきたし、1年生の頃と比べれば上手に淹れられるようになつてきたとは思うけど、それでも私一人でやるのは不安だなあ……。任せてくれるのはすごい嬉しいけど、大丈夫、かな……？」

「父さんは大丈夫だと思つてるよ。まあ、これも経験つてことで、やつてみなさい」

「…………うん！　頑張つてみる！」

よーし！　せつかくの機会だし、精一杯やつてみよう。私が一人でできるようになれば、お父さんももつとゆつくりできるようになるだろうし。

私は両手で握り拳を作り、己を奮い立たせるのであつた。

*

午後になり、予定通りお父さんがお店を出た後、お店には私と木下くんだけになつた。流石にキツチンかホールのどつちかに専念する余裕はなくなつちやつたので、私も自分

で注文を受け、自分で淹れたコーヒーを自分でお客様へと運ぶ。

「お待たせしました。オリジナルブレンドです」

「おや、ありがとう、つぐみちゃん。今日はお父さんの姿が見えないけど、これはつぐみちゃんが淹れたのかい？」

「はい！ よかつたら、感想とか聞かせてください！」

カウンターに座っている常連のお爺さんの田中さんにコーヒーをお出しする。今日どころか、人生で初めてお客様に飲んでもらうコーヒーだ。常連さんが相手とは言え、緊張する。お父さんとか、みんなには美味しいって言つてもらえてるけど……どうだろう？

「……うん、美味しいよ。いやー、あんなに小さかつたつぐみちゃんが、もうこんなに美味しいコーヒーを淹れられるようになつたのかー。時間が経つのは早いねえ……」「そ、そういうのはいいですから……！」 とにかく……！ ありがとうございます」

うう、子供の頃から私のことを知つて いる常連さんは、事あるごとにこういう褒め方をしてくる。褒めてもらえるのは嬉しいけど……ちょっと恥ずかしいな……。

なにはともあれ、常連さんに合格を貰えたので一安心かな。使う豆さえ間違えなければ、なんとかやっていけそう。

「いらっしゃいます。3名様ですね、ご案内します」

そんな風に考えながらキツチンに戻っている間も、新しいお客様がいらっしゃる。2人だけというのもあるけど、今日は全体的に結構忙しい。ランチ系のメニューも、どんどん飛んでくる。

本当は、もうちょっと木下くんの様子も気にしてあげたかったんだけど、そんな余裕はなさそう。それどころか、ホールにキツチンと縦横無尽に動いてもらつていて、現在進行系ですごく助かっている。

木下くんも頑張ってるんだし、私も頑張らないと……！

「あ……おつとつと……！」

危なかつた……体の向きを変えた拍子に、お湯が残つてているドリップポットに右手が引っかかり、倒れそうになつたのだ。急いで支えたおかげで、なんとか無事だつた。淹れる為に少し冷ましてあるとは言つても、まだそれなりに熱いし、気をつけないと。

——そう思つた矢先のことだつた。なにか、肉が焼けるような嫌な音がした。直後、炎で焼かれたような鋭い痛みが左手の小指側の側面から感じた。

「つ!? あ……ッ!!」

声を出さなかつたのは奇跡だつた。周囲を見渡してみるけど、気づかれた様子はない。よかつた……。手を洗うフリをして、左手を水で冷やす。

……なにが起きたのかは、すぐに分かつた。ドリップポットに氣を取られすぎて、左

手が湯沸かしに使つたやかんに触れちゃつたのだ。沸かしたお湯がたっぷりと入つていて、まだ熱々のやかんを。それも、一時的にではなく結構な間。

触れた部分が、赤くなつて。痛みで、ヒリヒリする。水で冷やしてから少しの間は痛みが和らいだものの、すぐに復活する。でも、我慢できない程じゃないかな。試しに手を開いたり閉じたりしてみる。……うん、大丈夫。ちゃんと動かせる。

「羽沢先輩。オリジナルブレンドが1つとアイスカフェラテです」

「あ……うん！ 了解！」

咄嗟に左手を木下くんから見えないようにしながら答える。今、お店に居るのは私と木下くんだけなのだ。せつかくお父さんにコーヒーを任せてもらえたのに、ここで抜けることは出来ない。

こまめに冷やすようにすればきっと大丈夫。せめて、お父さんが戻つてくるまでは頑張らないと。

その後、私は木下くんの目を盗むようにしながら定期的に手を冷やしつつ、仕事を続行した。

…………したんだけど、私が思つてたよりかは深い火傷だつたみたい。

「つ…………う…………」

痛い。最初はヒリヒリするだけだったのに、時間が経つにつれてジンジンと刺すよう

な痛みに変わってきた。水ぶくれが出来ちゃって、患部がなにかに触れるだけでも痛い。手を拭くのに使うペーパーすら痛いので、止むを得ない場合を除いて自然に乾くのを待つようになった。

ただ、お店が忙しくなるに連れて、手を冷やす余裕もどんどんなくなってしまった。そうなると、塞いでいた穴がジワジワと広がるかのように、痛みは強くなる一方だつた。時計を確認する。まだ15時を過ぎたばかり。つまり、少なくとも2時間はこの状態が続く。流石に、それはちよつと辛いかも……。せめて、薬くらいは塗りたい。でも、飲食物を扱つてゐるのに薬を塗つた手で作業するのは……。包帯巻いたら、動かせなくなつちやうし。

……あ、でも今、お客様が2組退店された。それに、ちようど注文も落ち着いたみたい。新しいお客様が来るまでは、安全かな。今の内にもう一度手を冷やして……

「……あの、羽沢先輩？」

「え、あ、ぼーっとしててごめんね！　えつと、ご注文かな？」

間の悪いつて言つちやうのはとつても失礼なんだけど、木下くんが近くに来てしまつた。これじやあ、手を冷やしに行けない。またもや左手を隠しながら、平静を裝う。

「いや、そうではないんですけど…………その…………今、ちよつといいですか？」

「うん、大丈夫だけど……どうしたの？」

……もしかして、本当ににか相談があるのかな？ 今日は休憩時間が少しだけ被つてたけど、そのときはなにもなかつたから、てつきり私の勘違いだと思つてた。キツチンで話し込むのもあまりよくなないので、私達は一旦待機所へと移動する。と言つても、お客様からの呼びかけには応えられるくらいの距離で。

顔をしかめたくなつてしまふ痛みに耐えながら、木下くんの話を待つ。

……あまりにも痛みが酷いので、手短にしてほしいって思つちやう自分が嫌になる。全部自業自得なのに、木下くんを責めちやうのは違うよね。もし相談だつたら、ちゃんと聞いてあげないと。

「えつと……ですね……」

木下くんはしばらく言い淀んでいたが、やがて意を決したのか顔を上げる。これは

……とても大事な相談みたい。ますます、きちんと聞いてあげないと。

「――間違つてたら、謝ります。……羽沢先輩、左手を見せてください」

「え……」

ギクリ、と背筋が凍つた。予想もしなかつた言葉に、私は呆然とするしかなかつた。

羽沢先輩の様子がおかしい。そう思つたのは、午後の仕事に入つてからしばらく経つた頃だつた。

結局、休憩時間のときも話を切り出せなかつた僕は、焦燥と諦めを同居させながらも残つた僅かなチャンスを窺つていた。その為、普段より羽沢先輩をチラ見することが多かつた。そして、だからこそ異変に気づけた。

根拠となつた要素は3つ。

第1に、羽沢先輩が時計を確認する回数があまりにも多かつたこと。そもそも、羽沢先輩が能動的に時間を気にかけること自体ありえない話だ。上がりの時間だと誰かに指摘されるまで仕事に没頭していることの方が圧倒的に多い。

第2に、いつもより作業のスピードが遅いような気がしたこと。初めてコーヒーを担当している影響もあるのだろうけど、それにしても少し遅い気がした。普段は僕よりも遙かに手際がいいのに。明らかに妙だつた。

そして最後に、僕との受け答えの最中に限つて左手を隠すこと。あまりにさり気なかつたので最初は気づかなかつたが、何度も同じ所作で隠されればいくらなんでも分かる。もし様子がおかしい原因があるとしたら、左手になにかあると考えるのが自然だ。こんな感じで、異変だと断じるだけの根拠はいくつもあつた。しかし、実際にそれを

確かめる為に羽沢先輩に声をかけるのには、随分な葛藤があつた。

もし違つたらどうしよう。無理に問い合わせて鬱陶しく思われたらどうしよう。そう思つたら、なかなか動き出せなかつた。バイトを始める前の僕だったら、きつとそのままで諦めただろう。

そんな僕の背中を後押ししてくれたのは、『懇親会』のときに美竹先輩や宇田川先輩が話してくれたとある話だつた。

曰く、羽沢先輩は1年前に無茶をし過ぎて倒れたことがあること。以降、本人も反省はして改善傾向にはあるものの、それでも頑張り過ぎるくらいがあること。だから、バイトで一緒のときはちゃんと見ててあげてほしいということを。

仮に、本当になにかしらの問題が起きてて、それを見過ごすようなことがあつたら……僕は、先輩方に顔向けができない。だからこそ、今度ばかりはなけなしの勇気を振り絞ることができた。

「え、えつと……なんのこと？ 別に私、なんにも……」

「……なにもないなら、見せられる筈です。どうして駄目なんですか？」

誤魔化そうとする羽沢先輩を問い合わせる。話しかける前は半信半疑な所があつたが、状況証拠的にはほぼ確定だ。僕は語氣を強める。

羽沢先輩は怯んだように顔を俯かせ、怒られた後の子供のような顔になつてしまつ

た。それでも、左手を見せようとはしてくれない。

「……仕方ない。もし、間違つてたら土下座でもなんでもする。そう開き直つた僕は、羽沢先輩に近づいて、強引に彼女の左肘辺りを掴んだ。「あ……」と微かに抵抗はあつたものの、すんなりと彼女の左手を目の前に引き寄せることに成功した。

「……羽沢先輩の左手の一部が、痛ましいくらいに真っ赤に腫れていて、水膨れが出来ていた。

「……これ、結構酷い火傷じやないですか。いつからこんな……」

「……その、最初にコーヒーをお出しした後、沸かしたばかりのやかんに触つちやつて……」

「……ということは、約2時間もの間、口クに冷やしもせず、治療もしないでこのままずっと？」 どうしてそんなこと……つて、そうか。コーヒーを淹れられるのが羽沢先輩だけだからか。

「とにかく……ちゃんと治療して休んでください。せめて、痛みが引くまでは……」

「でも、それじゃあコーヒーが……」

う、確かにその通りだ。僕にコーヒーを淹れることはできない。豆の種類や焙煎とかの基本的な知識は教わったけど、実践はまだだ。ドリップの際のお湯の注ぎ方が重要らしく、今この場で教わった所でいきなりできるようになるとは…………ん？ ドリッ

「？」

「……あの、羽沢先輩。ドリップの為にお湯を注ぐのって、片手でやりますよね？」

「……？ うん、蓋を押さえたりすることもあるけど、片手でもできるよ」

「……なら、こうしましよう。まずは、治療してください。そしたら、左手は使わないでドリップだけやってください。他は全部僕がやりますので、やり方を教えてください」
「これなら、なんとかなる筈だ。一豆を計つて、挽いて、お湯の温度を調整する。そして、羽沢先輩がドリップしたコーヒーをカップに注ぐ。こうすれば、羽沢先輩は片手だけの作業で済む。火傷した左手を使う必要はない。

「で、でもそれって……！ ホールもキッチンもほとんど木下くんに任せちゃうことになっちゃうよ！？ これからまた忙しくなるかもしねないので……！」

「……まあ、なんとか頑張ってみます。本当は、今すぐにでも休んでほしいくらいなんです。……お願いですから、無理しないでください。他の先輩方から去年のこと、聞いています」

「あ……」

一向に納得してくれそうになかったので、僕はどうとう去年のことを持ち出した。目を丸くしている辺り、その点を突かれるとは思っていなかつたのだろう。

……多分、僕は少し怒ってるんだと思う。無理をしていることに、そして僕を頼りに

してくれないことに。だから、普段だと言えないようなことまで言えてしまう。

しばらくの間、羽沢先輩からの返答はなかつた。……だけど、どうやら僕の願いは通じたようだ。うん、うん、と頷くと、羽沢先輩は顔を上げた。

その顔は、透き通るように綺麗な微笑みを浮かべていた。

「……うん、そうだよね。ここで無理しちゃつたら、バンドの練習でも迷惑かけちやうかもしれないんだよね。……ありがとう、木下くん。大変だと思うけど、お願ひしちゃうね。すぐに戻るから、ちょっと待つてね」

治療の為、羽沢先輩が一時的に仕事場を離れる。それを見届けた所で、ようやく僕は安堵のため息を吐いた。……はあ、すごい緊張した。もう絶対にあんなことしたくなかった。

…………でも、納得してくれてよかつた。とにかくこの後、頑張らなければ。そう、決意を新たにするのであつた。

——そして、マスターが戻つて来るまでの間、特殊な2人体制が始まるのであつた。
「えつと、オリジナルブレンドのときはミディアムのモカ、ハイのコロンビア、それとフルシティのブラジルをこの割合で混ぜて……」

——左手に包帯を巻いた羽沢先輩の指示のもと、ブレンドした豆を挽いたり。
「挽いた粉から茶こしで微粉を取り除くの。そうすると、すつきりした味わいになるん

だ

——微粉を取り除いたり。

「お湯の温度はドリップポットに入っているときに87度くらいになるように調整するの。まずは一回こつちに移して……」

——ドリップ用のお湯の温度を調整したりした。

……大口を叩いたものの、はつきり言つてこの2時間の作業は地獄のように大変だつた。来客対応、注文を取る、料理を作る、デザートを作る、コーヒーを淹れる準備をする、その他飲み物の準備、そしてそれらを運ぶ。再び客席が賑わってきたことも相まって、体がいくつあつても足りないかと思われるほどだつた。

結局、羽沢先輩はコーヒー以外の飲み物の用意など、片手でもできそうなキッチン作業も受け持つてくれた。ちょっと情けないことになつてしまつたが、あまりにも苦しめたので素直に甘えた。……まあ、羽沢先輩に無理をさせないという目的は達したので、トントンだらうか。

それからしばらくして、17時ジャストにマスターが戻つて来たことで羽沢先輩は完全に現場から下がり、休んでもらうことができた。現場もなんとか持ち直し、最悪の結果だけは回避できたのであつた。

*

「お疲れ様でしたー」

やつと、やつと終わつた……今日は、ちよつともう、クタクタだ。帰つて、早く休みたい。

「お疲れ。今日は大変な中、ありがとうね。すぐ助かつたよ。今度から、少しずつコーヒーの淹れ方の練習も始めようか」

「え……はい……了解です」

なんと、本格的にコーヒーの講習を始めてくれるらしい。今日のようなことを再発させない為か、元々そういう予定だつたのかは分からぬけど。それでも、なんだかちよつとだけ認めてもらえた気がして嬉しかつた。今日、豆挽いたりするのも楽しかつたし。

待機所に入り、更衣室で着替えを済ませる。そして、更衣室から出たそのときだつた。
「木下くん、お疲れ様」

横から声がかかる。体ごとそちらに顔を向けると、羽沢先輩が立つていた。左手には、今も包帯が巻かれている。そして火傷の為にマスターが戻つた時点で上がつた彼女もまた、既に私服だつた。

「お疲れ様です、羽沢先輩。……その、具合はどうですか？」

「うん、さつきと比べればだいぶよくなつてきたよ。……ありがとう、木下くん。今日

は、本当に助かりました」

そう言うと、羽沢先輩は僕に向かつて丁寧に頭を下げた。それを受ける側の僕は、突然のことにも慌てふためく。

「い、いや……！ 結局、コーヒー以外でも色々と助けてもらつちゃいましたし、あんまり大したことは……！」

それに、もつと早くに羽沢先輩に声をかけてれば、今よりも軽傷で済んだかも知れないのに。あんな遅いタイミングで、あんな風に偉そうに羽沢先輩を問い合わせた自分が恥ずかしい。

「ううん、そんなことないよ。あのとき木下くんが私のことを注意してなかつたら、多分だけど、私はお父さんが戻つてくるまで無理しちやつてたと思う。そしたら、もつと悪化しちやつて次のバンドの練習には間に合わなかつたと思うの。だから、本当にありがとう」

「い、いえ、その…………どういたしまして」

そこまで言われてしまつては、素直に礼を受け止めるしかない。ましてや、意中の相手である羽沢先輩からのお言葉だ。本音を言つてしまえば、嬉しくない筈がない。顔が熱くなるのを感じつつ、頷くのであつた。

「あつ、それとね、ちょっと聞きたいことがあつたんだ。木下くんつてたしか、来週の土

曜日はシフトから外れてるけど、なにか用事とかつて入つてるかな?」

「え、土曜日ですか? いえ、今の所は……」

即答する。そもそも、僕にそんなスケジュールとかいう高尚な概念はない。せいぜいが、ゲーセンで遊ぶくらいのものだ。もしかして、緊急でシフトに入つてほしいのだろうか?

「よかつた。あのね、今日のお礼になにかごちそうさせてほしいの。ここから馬場の方に向かつた所にショッピングモールがあつてね。そこのどこかでどうかな?」

「……………え」

一瞬……どろか数十秒もの間、僕はその言葉の意味を理解できなかつた。夢だと言われたら確実に信じていたであろうくらい、リアリティの感じられない提案だつた。

よく分からないまま承諾し……翌日に待ち合わせ等の詳細な連絡が届いたとき初めて、僕はデートの約束をしたことに気づいたのだった。……棚からぼた餅だ。

その後、慌てて上原先輩とかに連絡して助言を求めたのはまた別のお話。

第5話 初デート

土曜日の放課後、14時にショッピングモール内部の入り口付近に私服で集合。それが月曜日に羽沢先輩から届いた約束の詳細だ。集合時間がやや遅めなのは、自宅と学校が少し離れている僕への配慮だ。まあ、ランチのピークは避けられるし、却つていいのかもしれない。

それともう1つ。羽沢先輩から、せっかくだから食後に一緒にショッピングモールを回らないか、という提案があったのだ。どうやら『懇親会』のときに自分だけ出れなかつたのを申し訳なく思つていたらしく、それを兼ねる形のようだ。

理由はどうあれ、僕にとつては1秒でも長く一緒に居られる絶好のチャンスだ。僕はもちろん承諾した。顔には出さなかつたけど、心は相当舞い上がつていた。

そしてその素晴らしいご提案をいただいた放課後。僕は助言を求めて『Afterglow』のメンバーの4人と、前と同じファミレスに集まるのであつた。多忙な先輩方だが、なんとか1時間だけ都合をつけてもらつた。

ちなみに、彼女らとは全員同時にとはいかないものの、バイト中にお客さんとして来てくれることも多いので、ホールのときはちょくちょく話すようになった。羽沢先輩の

幼馴染だからというわけではないけど、みんないい人だ。

「……というわけで、どうすればいいと思します？ 助けてください、お願ひします」

「まつかせて！ 私たちで完璧なデートプラン、考えてあげるから！」

一番最初に相談のメッセージを送った相手である上原先輩が快諾する。それは嬉しいのですが、もう少し声を下げてください。周りに聞こえてしまします。

「ひーちゃんのプランか～。ゆー君、止めておいた方がいいと思うよ～？」

「あー、モカ、ひつどーい！ 私だつてやるときはやるんだからね？」

上原先輩が横槍を入れた青葉先輩に対して頬をふくらませる。実を言うと、この中で最もお世話になつてるのは青葉先輩だ。なにせこの前、早くも2枚目（パン40個の分割払い）を購入してしまつた。なんていうか、僕……ダメダメだなあ。

「ま、なにはともあれおめでとさん。あ、それとつぐのこともサンキューな。聞いたよ、つぐが火傷したのに気づいて助けてくれたつて」

「あ、いや、宇田川先輩、あれは偶々で……」

それどころか、仕事中にデートに誘うチャンスを窺う、なんて邪なことをしていたのだ。決して褒められる行為ではない。

だが、それを否定するように、美竹先輩は静かに首を横に振る。

「別に偶々でもなんでもいいけど、あんたは約束を守つてくれた。だから、まあ……あり

がと

「い、いえ……」

それだけ言うと、美竹先輩はそつぽを向いてストローを咥えたまま黙つてしまつた。基本的にはドライな感じの態度なんだけど、こういう要所で誠実なところは華道の家元の娘なんだな、と思う。

「それでそれで!? 大まかにどうしようとか考へてるの?」

「えつと、一応聞きたいことはあらかじめ纏めてきたんですけど……」

スマホのメモアプリを起動し、そのメモを表示する。えつと、最初は……

＼質問その1＼

「お昼なんですけど、どこで食べたらいいと思ひます?」

＼上原先輩の回答＼

「デートって言つたらイタリアンだよ! もうこれで間違ひなし!」

「……なんか、テレビとかでも聞いたことのあるようなアドバイスだ。まあ、一応覚えておこう。

＼宇田川先輩の回答＼

「やっぱラーメンだろ! あそここのフードコートのとこの豚骨ラーメンなんて最高だぜ?」

「……それは、宇田川先輩が好きなだけなんじや？　流石にラーメン、それもフード「コートが”ない”ことくらいは僕でも分かる。」

「青葉先輩の回答」

「やまぶきベーカリーのパンなんかが一、おすすめですな」

「……あの、ショッピングモールの中にあるものでお願いします。」

「美竹先輩の回答」

「……お礼なんでしょ。あんたが食べたいとこにすればいいんじゃない？　つぐみもそれを望んでると思うけど」

「そんなこと言われても、そこまで遠慮せずに行くわけには……。」

「……その後、質問を変えた結果、羽沢先輩の好物の1つがハンバーグということを知ったので、そういう店にしようと決めたのであつた。」

「質問その2」

「お昼の後、どこを回つたらいいと思います？」

「上原先輩の回答」

「デートと言つたら恋愛ものの映画だよ！　あそこのショッピングモールは映画館も

入ってるんだよ！」

これまたどこかで聞いたようなアドバイス、というか発想のレベルが僕と同じだ。もつとも、調べたけど今つて恋愛系の映画、あそこでやつてないんだよね。

（宇田川先輩の回答）

「うーん、そうだな……たしか、土日つて偶にどつかのアーティストとかがミニライブやつてるんだよな。それを観るとか？」

とつてもいい案だと思います。その日にやつてるかは分からぬけど、もしやつてたらそれがいいかもしねない。

（青葉先輩の回答）

「あたしがバイトしてるコンビニで、デザートを買う（

なんで頑なにショッピングモールから出させようとするんですかね？ もしかして、遠回しに反対してます？

（美竹先輩の回答）

「適当に2人で楽しめそうな所を回ればいいんじゃない？」

適当つて……その適当の中身が知りたいんですけど。2人で楽しめそつて言つたつて、僕の好みが羽沢先輩と一致するとは思えないし。

……こんな調子で、僕が質問をしては4人から各自の回答を貰う。そして、今回の件で分かつたことがある。

上原先輩は一番協力的ではあるのだけど……ちょっと、なんというか、役立たずだつた。ああ、でも、ファッショングループでは頼りになつたと思う。

宇田川先輩は、真面目な回答もたくさんあるのだが、同じくらいぶつ飛んだ回答もあつて、総合評価はプラマイゼロだつた。真剣に考えてくれるのは分かるので、ちゃんと聞くようにはしてたけど。

青葉先輩は、おそらくはわざとボケてる。もう、とにかくボケる。こんなことならやまぶきベーカリーのパンを最初から持参すればよかつた。そうすれば、少しは真面目になつてくれてたかもしれない。

美竹先輩は……僕の好きにしろつて感じだつた。初対面のときの態度と比べれば雲泥の差だけど、やっぱりまだちょっとそつけなかつた。

とにかく、必要な情報は集まつた……とまでは断言できないけど、できる限りのことはしたと思う。

それから当日までの間、集めた情報を基にデートの準備を進めるのであつた。

*

いよいよ、デート当日だ。天気は見事に晴れ。夏の到来が近いことを告げるかのよう

にギラギラと照りつける日差しが眩しく、少々暑い。

僕は今日の為にわざわざ購入した服を着て、例のショッピングモールへと向かう。服装のチョイスは、宇田川先輩と上原先輩の意見を取り入れたものだ。男子ではなく女子に意見を求めている時点では僕の交友関係の限界を感じるけど、センスがない男子より、ある女子の意見の方が正しい……と思う。実際、上原先輩は男子のファッショニにも驚くくらい詳しかつたし。

ただ……不安はある。このデートに対する羽沢先輩との熱量の差がどの程度あるかということに。結局の所、このデートは先週のお礼の延長なわけで。先輩側からすれば、もつと気楽なつもりでの誘いだつたかも知れないのだ。

ここまで気合を入れておいて、羽沢先輩がそこまでじやなかつたら、その温度差に結構なショックを受けるかもしれない。

……本当に、この服で大丈夫かな。というか、似合つてるのかな。でも、今更戻つて着替える時間なんてないし……。うう、大丈夫でありますように。

そんな無意味なことに思考を割いている間にもショッピングモールには近づいていく。もう、建物が見えてきた。確かに、結構大きなショッピングモールだ。

……とりあえず、入る前に先輩方からの助言を基に作成したミツショニリストを思い返す。羽沢先輩に好印象を与えることを目的とした、己に課した課題の一覧のことだ。

課題1：服装を褒めること。

課題2：昼食はハンバーグがあるところにする。次点でイタリアン。

課題3：昼食後はミニライブを見るか、女物の服を見て回る。

課題4：家まで送る。

課題5：待ち合わせは先に着くようにする。

etc…

せつかくのチャンスだ。ここで少しでもポイント稼ぐようにしたい。

今は約束の20分前。羽沢先輩は家から近いわけだし、まだ来てはいないだろう。ひとまず“課題5”は達成だ。そう思いつつ、入り口の自動ドアを通つて店内へと入った。

「——あ、木下くん！　ここにちは。今日も早いね」

「え、あ、え？　は、はい、おはようございます！」

「あはは、バイトじゃないんだから普通の挨拶でいいんだよ？」

……僕より先に来てました、羽沢先輩。どこか待機する場所を探そうとした矢先に声をかけられたものだから、気が動転してしまつた。

変な受け答えをしてしまい、耳が燃えるように熱くなつた。きっと今なら、この熱だけで湯を沸かせそうだ。

「そ、その……ここにちは。えっと……早い、ですね。てつきり、僕が先かと……」

「私の方からお誘いしたんだもん。木下くんより遅くなつたら失礼だよ」

なんとも羽沢先輩らしい理由だつた。……ん？　ということは、確実に先になるよう

に、かなり早い時間に来たということだろうか。……ありえる。羽沢先輩だし。いずれ

にせよ、いきなり失敗してしまつた。先が思いやられる。

ただ、それだけ今日の待ち合わせを大事に思つていてくれたということでいいのかな

……。もしそうなら、申し訳ない気持ちもあるけど……純粹に嬉しいとも思つた。

気持ちが落ち着いてきたところで、羽沢先輩の服装に目が行く。そうだ、まだ課題は

他にもある。気を取り直して、『課題1』に挑戦だ。今日の服装は……初めて見る服

だ。

白い長袖のブラウスの上に、薄い青の花柄のワンピース。清涼感溢れる色合いで、暑

くなりつつある今の時期にぴつたりだ。控えめなデザインのネットクレスが全体の雰囲

気を引き締め、高級感を出している。しかも、キャスケットまで被つている。これは、ア

レだ。ヤバイ。全く奇をてらうことなく、本人の素朴なイメージを際立たせている。清

楚という言葉ですら物足りず、僕は己の語彙力の低さを嘆く。花の女子高生という言葉

があるけど、今の羽沢先輩の前ではどんなに美しい花でも己の不足を悟り、種子からや

り直すことだろう。だつて、目の前に唯一無二にして至高の花が咲き誇つているのだか

ら。花の女子高生というか、花の羽沢先輩だ。可愛いという言葉を重ねれば重ねるほど陳腐に感じてしまう程の可愛らしさ。課題のことなど頭から消し飛び、しばらくの間、言葉が出なかつた。

「えっと……木下くん？」

「え……は、はい！ なんですか？」

「遅めの待ち合わせだつたから、お腹空いちやつたよね？ 早速だけど、お昼ご飯に行こつか。こつちだよ」

羽沢先輩がエスカレーターに向かつて歩きだす。どうやらレストラン街は上の階にあるらしい。僕はそれを慌てて追い、先輩の横……のほんの少し後ろからついていく。どうにも、真横に並ぶのは恥ずかしかつた。

……そして気づく。なんだか、服を褒めるタイミングを逃してしまつた気がすることに。

自分の作戦では、羽沢先輩の到着を待ち、なるべく元気よく挨拶して、その際の勢いを利用して一呼吸の内に服のことも褒めてしまおうと思っていたのだ。だけど、待ち合わせの時点での試みは破綻していた。

“課題1”も失敗である。

でもまだだ、ミツショーンリストはまだまだ残つている。この際、最低でも過半数が達

成できればよしとしよう。

羽沢先輩の位置から1段空けてエスカレーターに乗りながら、密かに決意を改めるのであつた。

*

エスカレーターで上の階に移動し、しばらく歩くとレストラン街と書かれた看板が見えた。そしてそれが正しいことを示すかのように、ちらほらと食品サンプルと思しきものが並んだショーケースのあるお店が見えてきた。

「たしか…………こっちに……あ、あつた。木下くん、ここに載つてる中から食べたいお店を選んでね。どこでも好きなところでいいからね！」

羽沢先輩に促された僕は、レストラン街の店の一覧が表示された看板の前に立つ。看板は、店の名前に写真が添えられているタイプの奴だ。一覧の中から、目的の店を探す。

実は、僕は事前にこのショッピングモールのHPを調べて、指定する店を最初から決めてあつたのだ。なので今やっているのは、ちゃんとその店が入つてゐるかの確認と、選んでいるフリだ。

……よし、あつた。石窯ハンバーグの店だ。店の存在を確認した僕は羽沢先輩にその旨を告げ…………ようとしたのだが、視界の隅に引っかかつたある店の名前に、言葉を引っ込めてしまつた。

その店は、有名な唐揚げの店だつた。色んな賞を受賞していて、テレビとかでも取り上げられることがあるようなどこの。僕もずっと食べてみたかったのだが、近くになかつたので、断念していた店だ。

でもおかしい、事前のリサーチではこの店は入つてなかつた筈。
……あ、"new
" つて書いてある。最近入つたから、まだHPに反映されてなかつたのか。

ど、どうしよう。すごく、食べたい。だけど、ハンバーグは当然ないし、揚げ物だし、どちらかというと定食屋に近い店だし。女子には到底合わないような店だ。ここを選んじやつたら、ラーメンを勧めた宇田川先輩と同レベルだ。

……うん、ここは我慢だ。今日はデートに来てるんだ。また後日、改めて自分1人で食べに来ればいいし。

「すいません。お待たせしました。ここのは、ハンバーグの店が……」

「えつ、そうなの？ 私はてっきり、そこの唐揚げのお店がいいのかなって思つてたんだ
けど……」

「なつ……!?」

「え、嘘、なんで分かつたの……!? 未練を見抜かれた僕は、あからさまに動搖する。
「ど、どうして……!」

「だつて木下くん、ずっとそのお店の写真見てたから。……あの、間違つてたらごめんね

? もしかしてだけど、蘭ちゃんたちから私がハンバーグが好きだつてこと、聞いてたりしない?」

「う……」

図星だつた。な、なんでそんな鋭い……いや、でも、仮に逆の立場だつたら、自分でも気づくかも……。

「あのね、木下くん。さつきも言つたけど、遠慮しなくていいんだよ? 今日はお礼なんだから、木下くんが食べたいものを選んでほしいな」

……奇しくも、美竹先輩が言つた通りになつた。結局、僕は羽沢先輩に押し切られてしまい、素直に唐揚げを選ぶこととなつた。“課題2”、失敗である。

ちなみに、唐揚げはめちゃくちゃ美味しかつた。それに、羽沢先輩も美味しそうに食べてたし、会話も弾んだ。結果オーライつて奴だろうか。

ああ、それと、僕が普通の量の唐揚げ定食を頼んだ際、羽沢先輩はまたもや僕が遠慮しているのかと勘違いしてムツと頬を膨らませていたのだが、誤解が解けると「ご、ごめんなさい。男の子つて、もつとたくさん食べるんだと思つてて……」と顔を赤面させたとき、ものすごく可愛いと思いました。

*

……もう言わなくとも分かるかも知れないけど、“課題3”も失敗に終わりました。

ええ。

まず、ミニライブは残念ながらやつてなかつた。まあ、これは最初から可能性の1つとして考えていていたので問題ない。

なので、羽沢先輩が好きなブランドの服のお店を回るのはどうだろうかと、勇気をして言つてみた。多分、ずっと失敗続きだつたから今度こそ、とムキになつていたのだと思う。

ところが、羽沢先輩には「2人で楽しめるようなお店じゃないと駄目だよ！」と注意されてしまつた。これまた、美竹先輩のお言葉が正解だつた。今度からは美竹先輩を頼ろうと思いました。

それで、今は急遽プランを練り直しているわけだけど……

「2人で楽しめる場所、ですか……」

羽沢先輩の言い分は分かつたのだけど、2人で楽しめそうな場所というのに心当たりはなかつた。再度、映画の案が浮上したりもしたのだが、上映時間を確認したらほとんどの作品が夕方まで次の上映なかつたし。

どうしよう……せつかくのデートなのに、全然いい案が浮かばない。

「うーんと、木下くんは普段どういうことをしてるの？　その、好きなお店とか」

「好きなお店……あの、えつと……そのですね……大した場所じや、ないんですけど

……

ゲーセンという単語がすぐに思い浮かんだけど、これを口に出してしまつていいのか迷う。バンドや生徒会などの活動をしている先輩に対して、ゲームという存在はあまり馴染みがないのでは、と不安に思つてしまつたのだ。一応、言つてみる。

「その……僕、よく地元のゲームセンターに行つたりしてます……」

「あ、そうなんだ！ 私も巴ちゃんとかモ力ちゃんと一緒に時々行くよ。下の階にゲームコーナーが入つてるから、そこに行つてみるのはどうかな？」

……よかつた。杞憂だつたみたいだ。ちよつとくらいはゲームもやるらしい。それに、ゲーセンのことなら僕も詳しいから、2人で楽しめそうなものも紹介しやすい。といふわけで、僕たちはゲームコーナーへと一緒に行くのであつた。

*

件のゲームコーナーは、厳密にはモールに入つてゐるゲーセンだつた。その証拠に、地元の店と同じ名前の看板が入り口に設置されていた。入り口から見えるものこそ大衆向けのクレーンゲームばかりだが、奥に行けばコア向けの筐体もたくさん置いてあることだろう。

「えつと、どうしよつか？ 木下くんは、なにかおすすめとかある？」

「うーんと、そうですね……」

いつもよりは自信ありげに答えながら、ざつと店内を回る。そこから、誰でも楽しめそうなゲームを探し出しては紹介し、一緒に遊んでいくのであつた。

例えば、クイズのゲーム。4択の問題を答えて、成績を競う奴だ。それを、羽沢先輩との対戦形式で遊んでみた。

偶にやつてるので勝つ自信はそれなりにあつたのだけど、結果は僅かに及ばず。交互に出題されるジャンルを選択できるのだが、羽沢先輩に僕の苦手な『芸能』を選択されたのと、僕が得意な『アニメ・ゲーム』を恥ずかしくて選択できなかつたからだ。

少し悔しかつたが、勝利を無邪気に喜んでいる羽沢先輩を見てたらどうでもよくなつた。

次に、宇田川先輩が偶にやつているとかいう太鼓のゲームもやつた。これも対戦形式で遊んだ。

このゲームもそれなりにやり込んでるけど、流石に難易度を上げることはせずに相手に合わせた。それでも結果として僕が勝つたけど、叩いてるだけで楽しかつたようで、「あーあ、負けちやつた。木下くん、上手だね」と言うだけで、笑顔だつた。

他にもクレーンゲームとか、いわゆる定番のゲームをいくつか遊んだ。ちなみに、クレーンゲームはなにも取れなかつた。僕はクレーンは一切やらないので。何回かやってみて、駄目だつたね、という感じで適当に切り上げた。

それでも、アームが景品を掴んで持ち上げることに成功したとき、羽沢先輩が「あ……！」と期待するように声をあげ、あえなく落ちてしまつたときに「あ……」と残念そうに呟く様子は賑やかで、いつまでも見ていてみたい可愛さだった。

そして、最後に遊んだのが……僕が最も熱中してる、あのキーボード風の音ゲーだ。1回店内を回つたとき、置いてあるのを確認しておいた。

本物のキーボードをやつてる羽沢先輩なら興味を持つてくれるのではないかという期待は、見事に的中してくれた。「こういうゲームもあるんだね。面白そう！」と遊ぶ前から喜んでくれた。

最初は僕がプレイし、遊び方を説明した。説明を兼ねてたので、1曲目の難易度は控えめにした。2曲目は難易度がそこそこ高く、それでいてノーミスクリアの経験のある曲を選択。かつこよく決めようとしたりけど、気負い過ぎたのか、何度かミスをしてしまつた。

それでも羽沢先輩は「わあ、すごいね！」と小さく手を叩いてくれたので、なんだか嬉しいような、こそばゆいような気持ちになつた。

次に、羽沢先輩がプレイした。バンドのキーボードをやつてるくらいだし、初見でも相当上手いだろうと思っていた。ただ、意外にも僕の完全な予想通りとはならなかつた。

「あ！……あはは、失敗しちゃつた」

曲の途中で画面が切り替わり、淡淡と失敗したことをプレイヤーに告げていた。羽沢先輩は苦笑いを浮かべていた。

僕の予想は、ある程度までは正しかった。初級や中・上級の難易度のものは、難なくクリアしていた。ところが、最後にもつと上の難易度を試したら、ついていけずに失敗してしまったのだ。ちなみに、僕はクリア済みの奴だつた。

「……なんか、キーボードと比べて違う所ありました？」

「うーん、楽譜が違うから反応がちょっと遅れちゃつたかな。あと、あんな長いグリッサンドも初めてだつたから戸惑つちやつた……」

「グリッサンド？」

「あ、ごめんね、それじや分からぬよね。えっと、長押しでスライドさせる所のことだよ」

……ああ、そういえば。確かに、僕が長押しでやるやり方とは違う方法でやつてた気がする。キーボードでの癖が逆に弊害になることもあるのかもしれない。

「でも、面白かつたなあ。あの、木下くん。もう1回だけやってみてもいい？」

「え？ は、はい、どうぞ……」

「えへへ、ありがとう。よーし、次はちゃんとクリアできるように頑張らないと！」

思つていた以上に、好評ではあつたようだ。“課題3”とはかけ離れた結果になつたものの、これはこれでいいか、と思うのであつた。

* *

楽しい時間はあつという間に過ぎる。18時を回り、夕飯が目前となる。そろそろ、解散の時間だつた。2人で横に並びながら、モールの出口を目指す。

「——それでね、今度ライブをやることになつてるんだ。よかつたら、見に来てね」「はい、もちろんです」

雑談に花を咲かせる。今まではバイトの先輩という意識が強かつたけど、今日一日だけ随分と羽沢先輩と仲良くなれた気がする。課題の達成に失敗してばかりで色々と空回りが多かつたのが心残りだけど、とつても幸せな時間だつた。

……つと。いけない、いけない、忘れてた。まだ、達成できる可能性のある課題が1つだけ残つてゐるのだ。それは、家まで送ること。この点に関しては、4人の先輩方の間でも意見が一致していた。

自分から言い出すのは結構な勇気が必要なことであつたが、デートを通して幾ばくか口が回りやすくなつた僕は、自分でもびっくりする程すんなりと口にできた。

「あの、羽沢先輩。よかつたらですけど、家まで送ります」

「え？ あはは、大丈夫だよ。ここから家までそんなに離れてないし、木下くんの家から

逆方向だよ?」

痛い所を突かれる。実はこのショッピングモール、普段より1つ手前の駅から歩いた方が近いのだ。現に、今日はそうしている。だから、商店街の方まで歩いていくと遠回りになる。つまりは、逆に羽沢先輩に気遣われてしまっている。

「でも、そろそろ暗くなつてきますし……」

「もう7月も近いから平気だよ。ふふつ、ありがとう。気持ちだけ受け取つておくね」なおも粘つてみるが、するりと躲されてしまう。ま、まずい……流石に無理にくついて送つていくわけにはいかないし。

もう自動ドアをくぐつてしまつたし、時間がない。どうにかして納得してもらわないと。そう思い、次の言葉を絞り出そうとする。

——直後、視界が一瞬だけ真っ白に染まつた。

「え……」

「つ……！」

なんだ、と疑問に思う暇すらほとんどなかつた。数秒後、空が碎けるような轟音が鳴り、鼓膜が八つ裂きにされたかのような衝撃が走る。同時に、腹の底まで響くような空氣の震えが体中を突き抜けた。その凄まじさに、微かに恐怖心が湧き起こつたくらいだ。

天の怒り、と形容するに相応しい雷だった。雷光から雷鳴までの間隔的に、かなり近いみたいだ。空は黒雲で埋め尽くされ、この時期のこの時間にしては既にかなり暗くなっている。今はまだ平気だが、その内雨も降り出すかもしれない。そして残念なことに、今日は傘を持つてない。

「すごくかつたですね、今の。予報では、特になにも言われてなかつたのに」

「…………あれ？ 羽沢先輩から返事がない。モールを出たばかりだし、さつきまで隣に居た筈だ。おかしいなと思い、横を見る。…………居ない。え、嘘、もしかして帰っちゃつた？」

……と、思つたが、そうではなかつた。店内と入り口を繋ぐ、合間の空間。そこに、僕から背を向ける形で立つっていた。僕も引き返し、羽沢先輩の後ろに立つ。それでも僕の存在に気づく様子はなく、微動だにしなかつた。

「あの、羽沢先輩？」 どうしました？」

声をかけてみると、羽沢先輩の両肩がビクツ、と跳ねた。

「——ッ！！ ……き、木下くん……！」

「え、あ、えつ……!?」

突然のことだつた。羽沢先輩が急に距離を詰めてきたかと思つたら、僕の片腕にしがみ付いてきたのだ。かなり強い力で締め付けられていて、その場から動けなくなる。

ちよ、これ、ヤバイ……なんか、髪からいい匂いがするし、服が薄めだから体温がしつかり伝わってくる。それに、なにがとは言わないけど、腕に柔らかい感触が押し付けられているのが分かる。女子と密着すること自体初めての経験なのに……羽沢先輩にこんなことされたら理性が……ガリガリ、削れる。心臓はバクバク。体温は急上昇。顔は頭がクラクラしてくるくらい熱い。どうにかなつてしまいそうだ。

……だが、次の一言で僕は少しばかりの平静を取り戻すことになる。煙に混じって消えてしまいそうな程に小さな声が、そつと耳に入つたのだ。

「お、お願ひ木下くん…………い、家まで…………送つて、ください……」

「え……？」

そこでようやく、僕は羽沢先輩の体が小刻みに震えているのに気づいた。両方の瞳に、大粒の涙を浮かべていることにも。しかも、見るからに顔は真っ青だ。その表情は、狼に怯える子羊のようだつた。

それらの要素から導き出される答えは一つだけ。羽沢先輩は……雷が苦手に違いない。それも、非常に深刻なレベルで。

最後の課題は達成した。でも、そんなのはどうでもよかつた。もう、それどころではないのだということを悟つたのだから。

第6話 雨の中の決意

雷鳴轟く暗雲の中、僕たちはショッピングモールを出て『羽沢珈琲店』を目指して歩き始めた。降り出す気配は今の所ない。

徒歩での距離としては決して遠いわけではないのだが、近いと言い切れるほどではない。大体、20分程度の距離だ。ただ、おそらくは通常より時間はかかるだろう。なぜなら、雷が鳴る度に羽沢先輩が足を止めてしまうからだ。

「ツ……！」

山が崩れたかのような天の怒号に羽沢先輩が肩を震わせる。さつきよりも光つてから鳴るまでの間隔が短くなっている。おそらく、もうすぐ真上に来る。僕でも少し怖いのだ。羽沢先輩が足を止めてしまうのも無理はない。

他の人も屋内に退避したのか、人の気配が感じられなくなりつつある道を僕たちは進む。風切り音が止め処なく吹き荒れる。電柱で結ばれたケーブルがブランコが如く揺れ、標識などの看板がガタガタとたわむ。これが映画だつたら、間違いなく世界が滅ぶ前兆を仄めかすシーンだ。

羽沢先輩は一言も発さず、僕の腕にしがみ付いたまま決して離れようとしない。見え

ない鎖で繋がれたみたいに、ちょっと揺すつたくらいじやびくともしない。

……服越しに伝わる体温、心臓の鼓動、呼吸に合わせて上下する胸、歩く度に形が微妙に変化する柔らかな感触。それら全ての感覚が同時に僕の腕に襲いかかってくる。チリチリと頭の中で散る火花が思考を鈍らせ、定期的に湧き上がる衝動が僕を苛む。なんというか……その……やっぱりこの密着状態は色々と危険だ。思わず、生睡を飲んでしまう。

……つて、こんなときに、なに考えてるんだ……僕！　ここはもつと羽沢先輩のことを見配すべき場面だろう。先輩が本気で怯えていることくらい、分かつているだろ？　きっと、羞恥心なんてものを感じる余裕がないほどに、追い詰められている筈だ。そうでなければ、前言を撤回までして僕に家まで送つてほしいなんて言わないし、こんな密着してこないに違いない。

いつも助けてもらつてばかりなんだから、せめて今日くらい頑張らないと……！
表面上は平静を装いつつ、羽沢先輩の様子を気にかける。うーん、このペースだと、いつまでも先輩を雷雲の下に晒してしまう。ちょっと、急いだ方がいいだろう。

「……羽沢先輩。もう少しペースを上げられますか？」速く歩けば、それだけ早く着きます」

言葉が返つてくることはなかつた。その代わり、羽沢先輩は肯定を示すかのようにコ

クリと小さく頷いた。すると、ほんの気持ちは程度歩く速度が上がった。カタツムリから、カメくらいにはなつたと思う。

いつも笑顔でにこやかに接してくれる羽沢先輩が、こんなにも弱つた表情を見せるなんて……。怖いものくらいあつて当然なのに、こんな一面があるなんてこと、想像もしなかつた。

「ひう……ッ!!」

うわ…………ますます密着……つて違う！ そうじやなくて！ 落ち着くんだ、僕。とにかく、なるべく羽沢先輩の方を見ないようにしないと……！

先輩の潤んだ瞳が視界に入るだけで、麻薬が如き甘い痺れが脳を侵食するのだ。あの状態が続いたら、なにをしでかすか分からぬ。あれは、危険過ぎる。

遠くの景色を見ることで気を紛らわしながら、羽沢先輩を先導していくのであつた。

* * *

怖い。理性ではどうしようもないくらい怖くて、怖くて、怖くてしようがない。視界が白で明滅する度に全身が硬直する。畳みかけてくる雷鳴に心が押し潰され、悲鳴すらも出せなくなってしまう。

昔からずつとこうだつた。雷が大の苦手で、高2になつた今でも全く克服できない。普段だつたら幼馴染の誰かが一緒に帰つてくれた。特に、私より身長の高い巴ちゃんはとつても頼りになつた。だつて、雷はより高い所に落ちるから。

送つてほしいという私のお願いを、木下くんはほとんど間を置かずして引き受けてくれた。雷に気づく前、私はあんなに木下くんの申し出を断つていたのに。文句一つ言わずに、腕を貸し、歩調を私に合わせてくれる。

歩きづらく、ないかな……こんなに引っ付いちやつて暑く、ないかな……現状が申し訳なくて、そんな心配ばかりしてしまう。

ダメダメだなあ、私。前に助けてもらつたお礼の為にお誘いしたのに、また助けてもらつちやつている。私の方が先輩で、本当なら私の方がしつかりしてないといけないのに。

この前だつてそう。迷惑かけないようつて無理して、その結果火傷に気づかれて心配されて、助けてもらつて。空回りしてばっかりだ。

……でも、木下くんは迷惑だと思つてるかも知れないけど、この腕にしがみ付いている体勢はちょっと安心する。

木下くんは細身な方だと思つてたけど、こうして腕を掴んでいると、意外としつかりしているのだ。それに私よりはずつと背が高いし、お店で働いているときも私じや持て

ない量の荷物を軽々と持つていた。

細身でも、年下でも、やつぱり男の子なんだなあ、ということを今まさに実感している。雷は怖いけど、完全には取り乱さずにいられるのは木下くんのおかげだ。男の子の側がこんなにも安心できる場所だなんて、知らなかつた。

また、お礼しないと。そう思いつつ、私は木下くんを頼りに歩き続けるのであつた。

非常に遅いペースながらも、僕たちは順調に商店街の方へと近づいていた。徒歩で10分くらいの距離までは近づいたと思う。商店街近くの、大きめの公園の端が見えてきた。

風が強いおかげか、雷も真上は通り過ぎたようで、光ってから数秒後の間隔に戻つている。羽沢先輩は相変わらず無言だが、腕に込められている力が気持ち緩んだ気がする。ああそれと、腕にしがみ付かれているというこの状況にも、だいぶ慣れてきた。そのおかげで、羽沢先輩のことを気遣う余裕が出てきた。

「……羽沢先輩。公園が見えてきました。もうすぐ商店街です、頑張りましょう」

少しでも羽沢先輩を落ち着かせる目的で現在地を告げる。先輩も認識しているかもしないけど、念の為だ。

「……うん」

思わず羽沢先輩の方を向いてしまった。今までずっと言葉を発さなかつた羽沢先輩がようやくしゃべつてくれたのだ。雷が遠ざかり始め、幾ばくかの平静を取り戻したのだろう。内心、ほっとする。

「……ありがとう、木下くん。また、助けられちやつた」

「いえ、羽沢先輩が大丈夫そうでよかつた——」

“です”……まで言い切ろうとしたそのときだつた。はつきりと目に映るくらい、上から下へと大粒のなにかが視界をよぎつた。

……あ、これ、まずいかも。上を見る。直後、冷たいものが頬に当たつた。水滴……つまりは、雨粒だ。

どうしよう、と考える暇すらなかつた。1粒、2粒と立て続けに落ちてきて……ほんの数秒後、雨に溜め込まれていた雨粒が一齊に落ちてきたかのような大雨となつた。機関銃のように雨粒が地面を叩き、一瞬で僕らの服をびしょ濡れに変えた。

——目を合わせる。お互い、なにか驚きの声を漏らした筈だが、雨音にかき消されてしまつた。

や、やつぱりケチらずにモールで傘買つておけばよかつた……！　そう思つても後の祭り。とにかく臨時で雨風を凌げる場所はないかと、周囲を見渡す。

……あつた。公園の入り口のすぐ近くに東屋がある。造りもしつかりしてそうで、この豪雨にも耐えられるだろう。

「羽沢先輩、一旦あそこに入りましよう！」

返事は聞かない。聞く暇がない。走り出したことで結果的に腕の拘束を解いてしまつた僕は、代わりに羽沢先輩の手首を掴んで先導する。先輩もこの雨の中にいつまでも居たくなかったのか、遅れながらも付いて来てくれたのが手の感触で分かつた。

顔に打ち付けられる雨粒が地味に痛い。早く屋根の下に入りたい。その一心で走り続け、公園に入った僕たちはようやく東屋へと到達した。

……うげ、気持ち悪い。靴下がぐちゅぐちゅ言つてる。全身も、大波に飲み込まれたあとみたいに濡れてしまつた。

「羽沢先輩、だいじょう——ツ!?」

「……？ 木下くん？」

羽沢先輩の様子を確認しようと顔を向けて……次の瞬間には逸らしてしまう。雨で濡れたブラウスが張り付き、色々といけないものを浮かび上がらせていたのだ。例えば、本来は見えてはいけない淡い青の肩紐とか。背中に広がる肌色とか。

せつからく落ち着いてきていたのに、どぎまきが復活する。チラ見したい衝動を必死に抑える。

「…………っ!? ジ、ごめんね、変なもの見せちゃって……！」

しかし、努力の甲斐なく羽沢先輩に一連の行動の意味を悟られてしまつたらしい。きっと、今は腕でなるべく透けている部分を隠しているのだろう。そしてなぜか、謝られてしまう。変なものではなく素晴らしいものなのだが、口には出さない。出したら引かれるのは分かりきつている。

互いに顔を合わせぬまま、きまずい沈黙が続く。こういうときはえつと……あ、そうだ！ 僕は着ていた上着を脱ぎ、軽く絞つて水気を切る。幸い、今日着てきた上着は透けるような色ではない。その上着を、羽沢先輩の方に差し出す。もちろん、見ないようにしながら。

「あ、あの…………もし嫌でなければんですけど、これで……」

「え……？ だ、駄目だよ！ 木下くんだけ濡れてるのに……冷えちゃうよ？」

「僕は別に、大丈夫です。むしろ、お互いを見れない今の方がきまずくて嫌です。あー、えつと……あれです、僕を助けると思つて、みたいな」

なるべく、羽沢先輩が断りにくそうな言葉を自分なりに選ぶ。これでもこの1ヶ月半、バイトを通して羽沢先輩のことを観察してきた身だ。少しずつだけど、羽沢先輩がどういう考え方をするのかは分かつてきている。

しばらくは逡巡していた様子の羽沢先輩だったが、やがて僕が上着を引っ込める気が

ないことを悟ったのか、「ごめんね。それじゃあ、お借りするね」と受け取つてくれた。これでようやく、羽沢先輩の方を向いて話ができる。

ちなみに、羽沢先輩は上から羽織るような形で僕の上着を身に着けていた。

「雷も遠ざかってきましたし、しばらく様子を見ましよう。降り止まないようでしたら、僕が近くのコンビニで傘を買つてきます」

雷鳴も、だいぶ控えめになつてきた。鼓膜に圧力がかかることもないし、明確に遠くで鳴つてると分かる程度の音量だ。ひとまず、雷はやり過ごしたと言つていいだろう。

商店街までもうそんな遠くないのだし、雨の勢いが収まつたら歩いてしまつた方がいいと思う。

「うん、ありがとう。でも、傘を買いに行くときは私も一緒に行つていい? その、1人になつちゃうのは、まだ、ちょっと……」

「あ……そ、そうですよね。すいません、そこまで気が回らなくて……」

そうだった、遠ざかったとはいえ、まだ雷は健在なんだつた。それに、こんな濡れた格好で女子を1人きりにするというのも、よくよく考えれば危険な行為だ。なぜ気づかなかつたのだろう。迂闊にも程がある。

「ううん、気にしないで。……私の方こそごめんね。いつもいつも助けてもらつちゃつて」

「……え？ いつもって……それこそ、そんなことないと思ひますけど……」

思いもよらぬ言葉に、僕は首を傾げる。助けたと言つても、前回の火傷のときと今日の雷くらいじやないだろうか。羽沢先輩に助けてもらつた回数と比べれば、大したことではない。

「でも、木下くんつて備品の補充とかこまめにやつてくれるでしょ？ あと、時間があるときにキツチンの汚れがちな所の掃除をしてくれたり。あ、この前私がパフェを用意しようとしてたとき、必要なものをあらかじめ側に置いておいてくれたよね？」

「まあ、そうですけど。でも、それは仕事だから……」

「うん、それはそうなんだけどね。でも、それ以外にも色々と細かいことにも気づいて動いてくれるから、木下くんと一緒にときは動きやすいなつて思つてたの。木下くんは当たり前つて思つてのかもしけないけど、それつて本当はすごいことなんだよ？」

なぜか、かなり褒められている。なんだかこそばゆい。羽沢先輩はやたらと相手のことを肯定、もしくは褒める傾向がある。ちゃんと見ていてくれていたことは嬉しいのが、自分としては本当に大したことないと思つてているのだ。

「……それに、仮にその通りだつたとしても、羽沢先輩と比べれば大したことはない。

「……でも、そんなこと言つたら羽沢先輩の方がすごいですよ」

「えっ？」

「羽丘に行つてゐる姉から聞きました。羽沢先輩、生徒会の副会長なんですよね？ しかも進学校の羽丘の。それに、バンドだつてやつてますし、家の手伝いまでして……僕なんかより全然すごいですよ……」

……なんか言つて悲しくなつてきた。最後の方は自嘲氣味になつちやつたし。口にすればするほど、自分との差を痛感してしまふ。羽沢先輩と釣り合うだけのものを、持つていないと分かつてしまう。

「どうか、なにを言つちやつてるんだろ、僕。羽沢先輩に愚痴を漏らす場面じやないのに。雨のせいで気持ちまで落ち込んでるのだろうか。」

我に返つた僕は急いで前言を撤回しようとする。だが、もう遅かつた。僕が口を開く頃には

羽沢先輩の声が聞こえていた。

「ふふつ、ありがとう。でも、私だつて別に大したことはないんだよ？」
「いや、そんなこと言つたつて実際色々やつてるじゃないですか」

僕の反論に、羽沢先輩は困つたように愛想笑いのようなものを浮かべる。しばらく返事に悩んでいたようだが、やがて考えが纏まつたのか、ゆつくりと話を再開する。

「……うーんとね、確かに副会長をやらさせてもらつてるけど、まだ先輩たちみたいに作業は速くなくて、練習の日なのに蘭ちゃんたちを待たせちやうことがあるんだ。キー

ボードだつて私より上手な人はいっぱいいるよ？ それに、『Afterglow』のみんなも演奏がとつても上手だから焦っちゃうこともあるし』

なんでも、昔やつたライブの後に、SNS上で自分のことだけ話題に上つてないことに焦つてしまい、口では言えないような迷走を繰り返したことがあつたらしい。一応詳細を伺つてみたが、頑なに語ろうとしなかつた。

それからも、ポツリポツリと自分がいかにすごくなのかを語り続ける羽沢先輩。ただ、僕のときと違うのは、それらの言葉からネガティブな感情はあまり感じられないことだ。ただ淡々と事実を述べている、そんな感じだ。

「だからね、前にもちよつとだけ言つたけど……頑張らなくちゃつて思うんだ」明るい調子の声。それは、まるで自分を鼓舞するかのようにも聞こえた。

「私自身は全然大したことなくて、だからせめてみんなに迷惑をかけないように精一杯頑張ろうって思うの。頑張つて頑張つて少しでも前に進んで、置いていかれないようにつて。頑張り過ぎてこの前みたいに迷惑かけちゃうこともあるし、頑張り方が間違つてたときもあつたけど、それでも私には頑張ることしかできないから。……ね？ 私も全然すごくないでしょ？」

雨音が屋根を叩く中、羽沢先輩は苦笑いを浮かべてそう言つた。羽沢先輩の言葉に、僕はすぐには返事をすることができなかつた。羽沢先輩が秘める強さと弱さ。それを

同時に見せてもらった気がする。

前向きで思い切りがありながら、自信はない。自信がないから、努力する。自己評価が低いから、なんでもかんでもやろうとする。普通だと自覚しながらも、普通であるまいと足搔いている。……そして、雷のように頑張った所でどうにもならなかつたものもあるのだろう。

今まで、一目惚れというファイルターと多くの肩書によつて塗り固められた、完璧超人なのではという僕の勝手なイメージがあつた。高嶺の花なのではないかという想い込みが。

一目惚れなわけだから、第一印象が悪い筈がない。そして、バンドという、いかにもかつこよさげな活動をしていて、進学校の副会長で、実家の手伝いまでしている。しかも、明るくて面倒見がよい。一見すると、完璧な人間に見えた。そういう部分ばかりが見えていたせいか、どこか萎縮していた所もあつた。

だからこそ、今日見せてもらった雷を怖がつている羽沢先輩の姿は割と衝撃だつた。誰でも怯えうるものに羽沢先輩も怯えるという事実に、等身大の羽沢先輩というものを見た。そして、たつた今聞かされた話が更なるダメ押しとなつた。これまで抱いていたイメージは、泡のようになってしまった。

……羽沢先輩は、積極的に動くという部分を除けば、割と僕と近い性質の人なんだ

思う。主に自信がないという所が。ただ、それに対する解答が違つただけで。僕は自信がないあまり行動を起こすことを恐れるけど、先輩は自信のなさを行動によつて克服しようとする。

僕には無縁なライブという世界で、キーボードを演奏していた羽沢先輩の姿を思い出す。他の先輩方に聞いたことだが、元々バンドを始めようと言い出したのも羽沢先輩らしい。

僕と似ている部分がありながらも真逆の道を進んだ羽沢先輩。それが、真の先輩の姿なのだと悟った。自身が普通であることを認めつつ、なにごとにも積極的に立ち向かっていくことを選んだ先輩を……僕は、この瞬間、心の底から……かつこいいなと思った。「やっぱ、羽沢先輩はすごいです……」

「……？ 今、なにか言つた？」

「いえ、なにも」

本当の意味で、羽沢先輩が魅力的な人に思えてきた。一目惚れがどうとか、容姿がどうとかではない。どこまでも普通な所が。それを努力でカバーしようとする所が。その内面に、僕は改めて惹かれている。今までより、ずっと強く。

……一目惚れした遠い存在の人に少しでも近づけたらいいな、とか奇跡が起こつて恋になれたらしいな、みたいな妄想に近いことばかり考えていた。だから、ショッピン

グモールでのミッショングダグダに終わつたんだと思う。まあ、デート 자체は楽し
かつたけど。

でも、今はそうじやなくて……単純に、もつと羽沢先輩の力になりたいと思つた。今
日のように助けるのもいいし、先輩の負担を少しでも減らす方向でもいい。火傷のと
きみたいなことを再度起こさないように、できる限り支えられる存在になりたい。そ
う思つた。

……なんというか、不思議な感じだ。ドキドキするのではなくて、ポカポカと温かい
気持ちだ。少し前までは、側に居られるだけで少なからず緊張したのに、今はそんなこ
とはない。いや、ちょっとはあるけど。

頑張つてみたい。羽沢先輩みたいになれるよう。羽沢先輩をもつと助けられる存
在になれるよう。まずは、バイトをもつと頑張つてみよう。コーヒーのことも少し勉
強してみよう。接客は苦手だけど、もつと頑張ろう。そう、思つた。

「あ……」

雨が、弱まつてきた。これなら、そう遠くない内に小雨になるだろう。

「もう少ししたら、行きます？」

「うん、そうだね。あ、家に着いたら服が乾くまでは休憩していって。お礼にコーヒーく
らいはお出しするから」

「ありがとうございます。今度は気をつけてくださいね」

「あはは……うん、火傷しないように頑張るね」

その後、雨が完全に上がった所を見計らつて再び出発した僕らは無事に『羽沢珈琲店』まで辿り着いた。それから羽沢先輩の淹れたコーヒーを一息そうになつた僕は、しばらく休憩してから帰路に就くのであつた。

雨の中で得た、新たな決意を胸に抱いて。

第7話 似たもの同士

あの雨の日の決意以降、僕は羽沢先輩の支えになるべく、もつと頑張ってみることにした。まず、今すぐでもできうことから取り組み始めた。

第1に、バイトに入る日数を増やした。そうすれば必然的に羽沢先輩は休みやすくなるし、一緒に働いていたとしてもサポートができる。マスターの指導を受ける機会が増えるのも大きなメリットだ。

次に、バイト以外の時間にもコーヒーの勉強をするようになつた。『羽沢珈琲店』は紅茶も出しているが、やっぱり主力はコーヒーだ。僕が少しでも早くコーヒーを担当できるようになれば、作業を羽沢先輩と分担しやすくなる。

勉強をするにあたつて、有名なバリスタによるコーヒーの教本を何冊か購入した。すぐには必要じゃないけど、焙煎に関する知識も取り入れ始めた。元々勉強は得意な方だ。特に問題なく学習は進んだ。

さらに、コーヒーを淹れる為の道具を一式揃えた。手の届く範囲のものを購入した為、業務用の設備には及ばないけど、練習には十分のものを揃えたつもりだ。練習は基本的には、焙煎済みの豆を挽いて、ドリップするの繰り返しだ。焙煎はまだ

試してない。

試飲は姉さんにやつてもらつた。最初の方の感想は「インスタントよりは美味しいんじゃない？」と散々だつた。だけど、試飲を繰り返してもらう度に評価は上がり、今は「コンビニの奴よりは美味しいんじゃない？」までにはなつた。ついでに、バイト代も消し飛んだ。

そんなこんなで、非常に充実した2週間を送つてきた。暑くなつてきたので学校の制服も夏服に切り替え、気分も入れ替わつた。着実に進歩しているというのを久々に実感しながら、日々を過ごしていくのであつた。

……だけど、このときは、実はとんでもないことを忘れているということに、僕はまだ気づいていなかつた。

*

日曜日。いつも通りにバイトをこなし、閉店となつた後のこと。一通りの清掃を済ませた僕は、キツチンに立つてコーヒーを淹れていた。

お湯の温度を調節し、しつかりと蒸らしを挟んでからお湯を注ぎ、ドリップさせていく。ブレンドされたコーヒードリップの香ばしい匂いがふんわりと広がり、鼻腔をくすぐる。よし、いい感じだと思う。これまでの練習の経験からすれば、今回の出来は結構期待できそうだ。

抽出が終わったコーヒーを温めてあつたカップに注ぐ。それも2人分。均等に注いだそれをトレーに乗せると、カウンターで待つていてくれた2人……マスターと羽沢先輩のもとへと運んだ。

「お待たせしました、マスター、羽沢先輩」

「お、ありがとう。さて、今日はどんな感じかな?」

「ありがとうございます木下くん。 いただくな」

それぞれの席の前にカップを置くと、2人から礼を言われた。2人がカップを眺めているのを、後ろから見守り結果を待つ。

実はこれ、マスターと羽沢先輩にコーヒーの試飲というか、テストをやつてもらつているのだ。頻度としてはシフト4回に1回くらい。マスターは毎回参加だが、スケジュールの関係で羽沢先輩はまだこれで2回目だ。

この試飲会は僕の方からマスターにお願いしたことだ。なるべく早く早くコーヒーが淹れられるようになりたくて個人で練習もしてるから、テストしてほしい、と。とはいってこの頻度はちょっと予想外だった。自分としては月2くらいをイメージしてたから。

マスターはブラックのままカップに口を付ける一方で、羽沢先輩はミルクと砂糖を入れてから飲んでいた。前回羽沢先輩が参加したときに知ったのだが、先輩はブラックが苦手らしい。

前回はブラックのままコーヒーを口にして、苦そうに顔をしかめていた。喫茶店の娘なのにブラックが駄目なのだと知られたくないかららしい。そんな所まで頑張らなくてもいいんじやないかと、あのときは思つた。

「……ふむ」

息を呑み、マスターの感想を待つ。はつきし言つて、マスターの評価は姉さんより厳しめだ。言葉そのものは優しめなんだけど、付ける点数は低めというか。その辺りはやつぱりプロなんだなと思う。

「……うん、店でお出しするにはまだもう少しかかると思うけど、この2週間で随分よくなつたと思うよ」

その言葉に、口元が緩むのを感じた。合格点ではないものの、間違いなく今まで最も高い評価をいただけた。練習は無駄ではなかつたようだ。

「私もそう思うな。前より雑味が減つて、すつきりしてて飲みやすいよ。木下くん、すごい頑張つてるね」

「あー、まあ……だいぶお世話になつてるんで、これくらいはやらないとかな、と思いまして……」

花が咲くような羽沢先輩の笑顔に、半ば照れ隠しのような返事をしてしまう。頑張つている本当の理由を羽沢先輩にだけは言えない、というのもあるけど。

「ごちそうさま。それじゃあ、奥で経理回りのことをやつてるから、残つてた分の片付けをお願いね」

「はい。お疲れ様でした」

コーヒーを飲み終わったマスターが奥へと姿を消す。僕は、少し遅れて飲み終えた羽沢先輩のカップも回収し、シンクに持っていく。残つた洗い物を済ませ、コンロを閉じればおしまいだ。

「あ、コンロは私がやるね。洗い物だけお願ひ」

……と、思つたらコンロは羽沢先輩に取られてしまった。まあ、お湯沸かすのに使つただけで、既に簡単に掃除はしてあるので、大した負担ではない。お願いしても問題ないだろう。ここで変に仕事を取り合つても時間の無駄だろうし。

「そういうえば木下くん、最近すごいたくさんシフト入つてくれてるよね？　イヴちゃんが忙しくてあまり入れなくなっちゃつたからとても助かってるんだけど、大丈夫？」

「…………ええ、特に無理してるとかではないんですけど…………」

忙しいのは事実だけど、ちゃんと自分で決めてやつてることだ。むしろ充実してると思つていたりする。

「そつか。ならいいんだ。変なこと聞いちやつてごめんね？」

僕の表情か、返事の仕方か。なにが要因かは分からぬけど、僕の言葉を信じてくれたようだ。あつさりと質問を切り上げて、羽沢先輩は作業に戻った。
それからは作業も滞りなく完了し、僕は上がつて帰宅するのであつた。

*
＊

家に帰り、リビングに入ると先に帰つていたらしい姉さんの姿があつた。テレビのオーデマンドで映画を見ているようだ。

「ただいま」

「おかえり。夕飯できてるから食べちゃいな」

「あれ、姉さんが作つたの？ 母さんは？」

「なんか用事あるつて2人で出かけたよ。深夜までかかるつて」

「ああ、だからテレビを独占してるので」

まあ、こういうことは時々があるので驚きはない。僕は席につき、テーブルに置かれた料理を見る。チャーハンだ。僕の帰りが遅いので冷めてはいるだろうけど、十分美味しいそうだ。

「ありがとう。お礼にコーヒーでも淹れる？」

「お礼つて……あんたが練習したいだけでしょ」

「まあ、そうなんだけど。でも、今日はマスターにも結構褒められたよ」

「ふーん。あんだけ練習してたしね。当然ちや当然か。一応、期待しておいてあげま
しょう」

試飲の約束を取り付ける。今日はどういうブレンドにしようか。せつかくマスター
に褒められたばかりだし、ここは『羽沢珈琲店』のオリジナルブレンドがいいかな。

「どころでさ、あんた最近コーヒーの勉強とかバイトばっかりしてるけど、試験の方は平
気なの?」

「ん、試験つて?」

「いや、期末のことには決まってんでしょうが」

「ああ、期末。期末試験のことね……………ん? え、あれ、期末?」

「え、ちょっと待つて。今日つて何日だっけ……」

「7月1日。私は再来週の月曜からだけど、あんたは?」

「……5日から」

つまり、4日後。そして、今日は既に夜。しかも3日から8日までシフトを入れ
ちゃっている。トドメに、ここ最近はコーヒーやバイトに夢中で最低限の勉強すら口ク
にやつてなかつた。試験勉強なんて論外のレベルだ。

肝が冷える、という表現は今このときの為に存在するのだということを知る。進学校
で、初めての定期テストで、試験勉強してなくて、あと4日しかない。……やば。

「……あんた、忘れてたでしょ」

姉さんの呆れた目線。その通りだ。完全に忘れていた。今までにない充実感を味わっていたせいか、意識に全く上がらなかつた。

しかし、これはまずい。本当にまずい。まずい通り越して絶体絶命だ。僕がバイトやらゲーセンやら自由にできているのは、親の求める成績の水準を保つてゐるからというのが大きい。もし大きく順位を落とすようなことがあれば、きっとバイトを辞めさせられてしまう。

しかも、中学のときは違つて今通つてゐる高校は進学校なのだ。必然的に、上位にはかなり勉強ができる人たちが集まつてゐる。高校になつてから難易度そのものも上がつたので、相当頑張らないと上位は厳しい。

……もしかして、羽沢先輩が今日、僕のシフトを心配してたのつてこれが理由？　だとしたら、僕は嘘ついた。すいません、羽沢先輩。全然、全くもつて大丈夫じやないです。

「あー、えっと、ごめん。コーヒーはまた今度でいい？」

「いいから、さつさと食べて勉強しなつて。成績落ちたら、お父さんうるさいよ？」

「うん、分かつてる……」

こうなつてくると、バイトに時間を取られるというのは非常に苦しい。だけど、一度

シフトを入れた手前、直前で取り消すのはなしだ。

……普通に勉強してたら、絶対間に合わない。特に、日曜である今日をほぼ潰してしまつたのは痛い。日程的に早くに始まる科目を優先しつつ、睡眠時間を極限まで削る……というかほぼ寝ずに勉強するしかない。

徹夜なんてゲームでもやつたことないけど……もう覚悟を決めよう。今まで通り、バイトを続けられるように。

流し込むようにしてチャーハンを平らげた僕は、家に蓄えられていた栄養食をいくつか拌借し、部屋に籠もつて勉強を始めるのであつた。

*

……眠い。立っているにも関わらず、瞼が重くて閉じそうになる。平衡感覚も若干怪しい。あくびを噛み殺し、涙を瞬きで誤魔化す。

7月3日。今はバイト中でキツチンに入っている。つまり、猛勉強を開始してから2日が経過した。そして、徹夜に慣れてない僕は早くも疲労を感じ始めていた。

一応、少しは寝ている。1日1時間ちょっとくらい。でもなんというか、少し目を閉じてたら起きる時間になつてたつて感じで、全然休めている気がしない。

時間を重ねれば重ねるほど睡魔が強くなり、集中力が加速度的に奪われていく。バイトの継続という目標があるから頑張ってるけど、そうじやなかつたらとっくに寝落ちし

て いる。

「羽沢先輩。4番卓のホットサンドです」

皿に盛り付けた料理を台に置く。近くにいた羽沢先輩が料理を取りに来る。

「ありがとう。……あれ？ 木下くん、2番卓のフライドポテトが先に入つてたと思うけど、そつちはどう？」

「え……？」

少し前に羽沢先輩から受け取つた伝票を確認する。……本当だ。少し先に、フライドポテトの注文が入つていた。フライヤーには……なにも入つていない。

「す、すいません！ すぐにやります……！」

「うん、お願 いね」

やつてしまつた。仕事である以上、疲労なんて言い訳にもならない。僕は急いで冷凍のポテトをカゴの中に入れて、油の中に沈めた。あまり時間のかかる注文じやなかつたのは不幸中の幸いだ。器とソースを用意して、揚がるのを待つ。

「……ねえ、木下くん。ちよつといいかな？」

そんな最中、ホットサンドを届け終わつた羽沢先輩が戻つてきた。その表情は、少しばかり曇つているように見えた。多分、今の注文ミスに関してだと思う。

「……はい。さつきはすいません。もつと気をつけます」

「あ、えっと、そうじやなくてね……あ、ううん、もちろん気をつけてはほしいんだけど、それとは別に気になることがあって」

「気になることですか？」

「なんだろう？ 店内の様子を見る限り、特に普段と大きく変わった部分はないよう見えます。見えてるけど、大丈夫？ ちゃんと寝てる？」

「うん。……木下くん、目の隈がすごいことになってるけど、大丈夫？」

「？」

「……あー、これは……ですね」

僕のことだつた。まあ、そりや気づくに決まっているか。朝、鏡の前に立つたとき、自分でも驚いたくらいなんだから。

「ほら、試験前じやないですか。高校で初めての期末なもんですから、できるだけいい成績を取ろうと勉強してまして。そしたら昨夜、ちょっと張り切り過ぎたと言いますか……」

適当に、今思いついた理由で誤魔化す。試験があることを忘れてて、親が納得する成績取る為に今慌てて勉強してます、なんて恥ずかしくて絶対に言えない。

「そうなんだ。でも、あまり無理しないでね？ もし駄目そうなら、バイトお休みにしても大丈夫だから」

「はい、ありがとうございます」

もちろん、そんな無責任なことをするつもりはない。試験最終日の7日まで頑張れば、ちゃんと休める。そこまでは、なんとか粘らないと。

羽沢先輩に疑われないよう、今度こそミスが出ないようにしないと。注文に抜けがないことを厳重に確認しつつ、眠気と戦いながら仕事を続けるのであつた。

危ない場面もあつたが、今日はひとまずそれ以上のミスを出すことはなかつた。

*

翌日。つまりは試験前日。1つ、うつかりしていたことがあつた。人々、困ったことになつた。

実はうちの学校、試験前日は半日授業だつたのだ。現在は13時の少し前。掃除を終えた僕は、予期せぬ自由時間を得た。まあ、それ自体はよかつた。ただでさえ足りないと思つていた時間を得られたのだから。

問題は2つ。1つはカンニング対策で校内に残つての自習が禁止されていること。そしてもう1つは、今日もバイトがあることだ。

校内で勉強できない以上、外で勉強するしかないのだが、どこかの店で勉強するのは好きじゃない。他の人が居るのが気になつてしまふのだ。

普段なら家に帰ればいいだけなのだが、そこでバイトが問題になる。今日も通常授業

だと思つていたので、シフトの時間が夕方からなのだ。つまり、一旦家に戻った場合、再度家を出る必要があるのだ。移動時間を考えると、それは完全な無駄だ。

どうしたものか。そんな風に頭を悩ませていると……『羽沢珈琲店』の待機所を使わせてもらうことを思いつく。あそこなら他の人はいないし、移動時間のロスも発生しない。ついでに商店街なので昼食の調達も簡単だ。

まあ、もし駄目だつたら、妥協して客として店内で勉強しよう。そう思い、店に向けて出発するのであつた。

*

店に着いた僕は、早めの到着に驚いていたマスターに事情を説明する。ちなみに、羽沢先輩の姿は当然ない。姉さんの情報が正しいのなら、羽丘はまだ通常授業だろう。

マスターは待機所を使うことを快諾してくれた。それどころか、まかないのホットサンドまでいただきてしまつた。本当に、マスターには頭が上がらない。

手早く昼食を終えた僕は、早速勉強に取りかかつた。今日はもう初日の科目に全力投球だ。問題集を解いては、分からなかつた部分を確認していく。初日は得意の理系科目が集中していることもあり、比較的順調だ。

……ただ、1時間半くらいが経過したところで、3日で蓄積された睡魔がついに本気で牙を向いてきた。食後ということも大いに影響しているのだろう。前日の比ではな

いレベルの眠気が僕を苛む。

頭上に岩でも乗せられているのかと思うくらい頭は重いし、ほんの少し気を抜いたらけで意識が飛んでしまう。目なんて、開いているのか、そうでないのかが曖昧だ。かろうじて数文字が読める程度の視界。多分、1秒以上目を閉じたら寝てしまう。手のひらに爪やシャーペンを刺すことによる痛みで、かろうじて意識を繋ぎ止める。だけど、それは言うならば電池の少なくなつたスマホの節電モードと同じだ。持ちこたえる時間を幾らかは伸ばせるが、いずれは必ず電池が尽きる。

フラフラと、船を漕ぐ。意識の暗転と覚醒の間隔が短くなる。問題の内容が頭に入らない。文字を書くことすらできない。睡魔に抵抗することに全ての力を注ぐ。それでも、一度ヒビの入つたガラスが元通りにならないように、どんどん割れ広がっていく。……駄目だ。寝ちゃ…………駄目だ。今、寝ちゃつたら…………試験、が…………バイト、が…………

放課後となり、私は寄り道することなく帰宅した。もう試験1週間前だから、勉強に集中しないといけない。あと数日もしたら、お手伝いも一旦お休みかな。

店の裏口から家に入り、お父さんに帰宅を伝えてから自室に向かおうとする。裏口は待機所と繋がっているため、まずはそこを通ろうとする。

その待機所のテーブルの方を見たときだつた。そこに、背中を向けながら伏せている、白いワイシャツを着た人がいることに気づいた。

「……木下くん？」

今日のバイトのシフトからして、木下くんくらいしか考えられない。試験前は生徒会の仕事もないのに、学校から家までの距離が近い私の方が先に着くと思つてたけど、そうじやなかつたみたい。

側まで近づいて様子を窺つてみる。気持ちよさそうに寝ている。起こすのが忍びないくらいぐつしりだ。男の子の寝顔をこんな間近で見るのって、初めて。気の緩んだ木下くんの寝顔は、なんだか可愛かつた。

本当はこのままずつと寝かせてあげたいけど……うーん、もうすぐシフトの時間だよね。かわいそうだけど、もう起こしてあげないとかな。

「木下くん、起きて。あと少しでシフトの時間だよ」

指先でトントン、と軽く肩を叩く。起きる気配はない。次に、もう少し強めに叩いてみる。これでも起きる気配はない。

仕方がないので、今度は肩を揺すつてみる。うう……これも駄目みたい。心を鬼にし

て、かなり強く揺すつてみたけど……全然駄目。一向に目を開いてくれない。

そういうえば昔、モ力ちゃんに寝たフリをされて、延々と肩を揺らしては声をかけることを繰り返したことを思い出す。もしかして、木下くんもそれをしてるんじや……と思つた所で首を横に振る。あの真面目な木下くんがそんな悪戯をする筈がないもん。

……そんなとき、あるものが目に入る。私は「あれ？」と首を傾げる。木下くんの頭の下にあるのって……参考書とノート？　しかも開きっぱなし。試験勉強をしてたんだとは思うけど、休憩するなら普通は一旦閉じて除けておくよね？

なんか……おかしいな。そう思つたとき、私はあることに気づいた。木下くんの右手だ。芯が出たままのシャーペンを握つたままだつた。その軸先の下には、開いたままのノートのページが広がつていて、紙には赤ん坊の落書きのようなグルグルの黒い線が錯綜していた。

それともう1つ……これが、最も重要なことなんだけど……目元の隈が消えていいな。ううん、昨日よりもずっと酷くなつてる。昨日もあまり寝ていないのであろうことは、明らかだつた。

……そつか。休憩して寝てたんじやなくて、勉強している途中で寝落ちしちやつたんだ。それも状況からして、すごい頑張つて抵抗してたんだと思う。

一旦、キッチンの方に行つてお父さんに聞いてみたら、試験前日で半日授業だつたの

を忘れていたようで、待機所でシフトまでの間勉強しているらしい。

なんでかは分からぬけど、木下くんはこの数日、ほとんど寝ないで猛勉強してみたい。それも、こんな体勢で寝てるのに体を強く揺すつても起きないくらいの寝不足になつてまで。

「……大丈夫だつて、言つてたのに」

思わず、言葉が溢れてしまつた。木下くんのこと、信じてたのに……やつぱり無理してたんだ。昨日、無茶はしちゃ駄目だよつて言つた筈なのに。相談すら、一言もなかつた。

なんで、言つてくれなかつたんだろう。なんで、無茶してたんだろう。頑張りすぎがよくないつて最初に言つたのは、木下くんの方なのに。

色々と言いたいことが浮かんできた……それはもう、止め処なく。今すぐ木下くんを起こして、言い聞かせたいくらいだ。

……けど、それは後にしよう。今は、寝かせておいてあげよう。今、無理に起こしたら、きっと慌ててシフトに入っちゃうから。

私は自室に行つて、余つているタオルケットを引っ張り出す。柄がちよつと男の子に合つてないけど、そこはしようがない。寝てる木下くんが悪いんだから。

そのタオルケットを持つて待機所まで戻り、木下くんにかけてあげた。夏ではあるけ

ど空調が効いてるし、じつとしてたら冷えちゃうかもしれない。せめて、これくらいはしてあげないと。

……うん、ぐつすり寝てる。これなら、もうしばらくは休んでてもらえるかな。本当はソファやベッドに移動してほしいけど、起こさずにそれは無理なので、諦めるしかない。

「ねえ、お父さん。木下くんなんだけど……」

タオルケットが落ちないのを確認した私は、お店の制服に着替えた後、お父さんにあることを頼みにキッチンへと向かうのであつた。

……痛い。主に首の辺りが痛い。それと左手が痺れているのか、感覚がない。体がだるい。でも、頭はちょっとだけすつきりした気がする。

えーっと、なにしてたんだっけ…………たしか、半日授業で……早めに店行つて……それで、勉強してて…………って、やっぱ!? もしかして寝てた!?! うわ、なにこれ、涎がノートに……!?

慌てて体を起こす。慌てすぎたせいでガタン、と椅子が派手な音を響かせてしまった

がそれどころじゃない。

スマホは……あつた。時間、時間は…………え…………17時半？ 今日はシフトが16時半からだから……もう1時間も過ぎてる。勉強が進まなかつたのもやばいけど、バイトに遅れる方が何倍もやばい。

血の気が引くのを感じる。心臓がバクバクと鼓動を速め、胸が苦しくなる。背中に虫を入れられたかのような悪寒が走り、嫌な汗が吹き出す。

なんて様だ。まかないを作つてくれたマスターに合わせる顔がない。

とにかく、早く着替えて今からでもシフトに入らないと………… そう思つて立ち上がりうとしたとき、肩になにかがかかるつているのに気づいた。

「……タオルケット？」

非常に可愛らしい柄のタオルケットだ。僕のものではない。ありえるとしたら……もしかして、羽沢先輩？

「あ、起きたんだ。おはよう、木下くん。よく眠れた？」

「は、羽沢先輩！ あ、いや、あの…………すいません！ すぐシフト入りますから！」

突然現れた羽沢先輩に、僕はなんと返事をすればいいのか分からず、しどろもどろになつた末……とにかく謝罪することを優先した。

そして、タオルケットを椅子にかけてから更衣室に飛び込もうとしたとき、「あ、待つて」と羽沢先輩に呼び止められた。

「シフトは大丈夫。お父さんに言つて、今日は外してもらつたから。……ううん、今日だけじやなくて、今週分は全部」

「……え？ 外したつてどういう……？」

シフトを外した？ どうして……と混乱する僕を他所に、羽沢先輩は微笑を浮かべつつ、淡々と次の言葉を紡いだ。

「その説明の前に、少しお話しよつか。そこに座つてもらつてもいいかな？」

「つ……」

一見すると、いつも通りの優しい声音。だけど、その声には有無を言わせぬ迫力があり、到底逆らえるようなものではなかつた。その背中から、尋常じやない圧力のオーラが見えた氣すらした。

……僕は大人しく、席に戻つた。その対面に羽沢先輩が座ると、早速先輩の方から話を切り出してきた。

「木下くん、どうしてそんなに無理して勉強してたの？」

羽沢先輩の真剣な眼差しに、僕は言葉を詰まらせてしまうのであつた。

私の質問に、木下くんは顔を俯かせていた。無茶をしていたという自覚はあつたみたい。これはますます、どうということなのかと問い合わせなくては、と決意を新たにする。「本当は昨日よりも前から全然寝てなかつたんだよね？」

「それは……」

連日の睡眠不足の辛さは、私もよく知っている。意識が不明瞭になつちやつて、信じられないくらい集中力が落ちちゃうのだ。それはとっても、危険な状態だ。

「どうして寝なかつたの？」昨日だって、結果的には調理の順番のミスで済んだけど、もしかしたら私みたいな火傷してたかも……ううん、もつと酷いことになつてたかもそれないんだよ？」

「つ……」

私は語気を強める。昨日、私は睡眠不足なのではないかと指摘したし、木下くんもそれは認めていた。なのに、きっと昨日も徹夜に近いことをしていたのだろう。

睡眠不足がどれだけ危ないのかは昨日の失敗で自覚していた筈なのに、結局それを無視したということになる。

……自己管理が全くなつてない。思わず、眉間にシワを寄せてしまった。

多分、私は怒つてゐるんだと思う。無茶をしていたことに。嘘をついていたことに。こうなるまでなにも相談してくれなかつたことに。先輩と後輩ではあるけど、今では木下くんのことは大事なお友達だと思つてゐるのに。

だから、今日は容赦はしてあげない。ちゃんと問題が解決するまで、ここを動くつもりはない。お店の方は、しばらくお母さんにお願いした。

「……木下くんが理由もなくそういうことする人じやないのは分かつてゐるよ。そう思つてるからこそ、なにがあつたか教えてほしいの」

今度は一転して、なるべく優しく、諭すような調子で語りかける。沈痛な面持ちの木下くんを見て、後悔しているのは分かつたから。

答えを急かすようなことはせずに、じつと返事を待ち続ける。

時計の針の音が今日はとてもよく聞こえる。普段だつたら気にならないくらいの大きさなのに。思わず、回数を數えちやうくらい。

……秒針が40回くらい動いたとき、ついに木下くんの声が部屋に響いた。

「……すいません。こんなことになるつもりは、なかつたんですね」

「うん、分かつてゐるよ」

「……実は」

——木下くんはポツリポツリと呟くような調子で、なにがあつたのかを教えてくれ

た。映画とかで見る、懺悔室での一面のようだ。

お店の力になりたくてコーヒーの勉強を頑張つてくれたこと。バイトができるだけ増やしてくれたこと。そしたら試験前なのを忘れていたこと。もし上位の成績が取れなかつたらバイトを辞めさせられるかもしれないこと。でも、バイトを直前で休むなんて無責任なことができなかつたので、ほぼ徹夜で勉強していたこと。纏めると、そんな感じだと思う。

「だからって……！」

思わず、立ち上がりそうになつてしまつた。感情に任せたまま、身を乗り出す。

勉強が大事なのは分かる。お店のことを大事に思つてくれるようになつたのは嬉しい。でも、本当にそんなんに無理をしないといけなかつたのだろうか。そもそも、体を壊したら元も子もないではないか。

そんな感じのことを衝動的に言つてしまいそうになつて…………寸前で思い留まつた。なぜそんなんに頑張つてしまつたのかを……察してしまつたからだ。

「…………めんなさい。私が言えたことじゃないよね」

水を被つたかのように、急速に心が落ち着いてくるのを感じた。木下くんに謝つてから、姿勢を正す。

…………気づいてしまつたのだ。今の木下くんは、1年前の私と全く同じだということ

に。不安に押し潰されそうになつて、あれもこれもやらなくちゃと無理しすぎて、本当に倒れてしまつたときの私ど。

同じ過ちを犯した私に、木下くんを責めたり叱つたりする資格はなかつた。
今の木下くんの風貌は……あんまりよくない。目元の隈は今もすごいし、顔色は明らかに悪い。誰がどう見ても、体調を崩しているようにしか見えない。そんな姿の木下くんの目を通して、1年前の自分の姿が見えた気がしたのだ。その私の姿も……酷いものだつた。

——そつか。みんなには、頑張りすぎているときの私はこんな風に見えてるんだ。ようやく、その深刻さに気づいた。

あのときとは逆の立場に立つたことで、かつての自分を客観的に見ることができた。
なるほど、確かにこれは心配になるし、無茶をするなど叱りたくもあるよね。
……もっと自分を大事にしないといけない。本気で、そう思つた。今まで起きつと、分かつてているようで分かつていなかつた。だから、火傷のときみたいなことも起きてしまつた。でも、これからは大丈夫……だと思う。

「あの、本当にすいませんでした。変に意地を張らないで、相談すべきでした……」
「……ううん。お店のことを大事に思つてくれたつてことだもんね。私も、きつと同じことをしちやつてたと思う。……ありがとう、話してくれて。バイトを辞めない為に頑

張つてるつて言つてくれたの、とつても嬉しかったよ」

今にも罪悪感で押し潰されそうな表情をしていた木下くんに、僅かばかりの笑顔が戻つた。よかつた、少しは安心させられたかな。

とにかく、木下くんにはなるべく早く休んでもらわないと。ほんのちょっと前まで寝てたとはいって、テーブルの上じやあんまり疲れはとれない。ちゃんとベッドで横にならないと。

「えつと、それじゃあ今日はもう帰つて休もつか。勉強はしてもいいけど、今夜は早めに寝てね。それとさつきも言つたけど、今週はシフトは全部なしにしたから、勉強に集中して大丈夫だよ」

「了解です。でも、その……いいんですか？　さつきはああ言いましたけど、大丈夫だつて言つちやつたのは僕の方なのに……」

木下くんが申し訳なさそうにこちらを見る。そんな彼の心配を吹き飛ばすかのように、私は精一杯の笑顔を浮かべた。

「うん、平気だよ。私は試験は来週だし、試験前とかは元々お母さんにお願いして代わつてもらつてたりしてたから。心配しないで」

だから無理をしない程度に一緒に頑張ろう。最後に、私はそう告げた。

*

結果だけ言つてしまふと、木下くんは私との約束をきつちりと守つてくれたようで、来週会つたときには目の隈はすっかり消えていた。

さらにそれからしばらくして、木下くんはチャットを通して、無事にバイトを続けるのに十分な成績を出せたと教えてくれた。まだ私が学校にいたときに届いたメッセージだつたから、結果が分かつてからすぐに送つてくれたんだと思う。

よかつた。これからも木下くんと一緒に頑張れる。そう思うと、安堵で自然と頬が緩むのであつた。

第8話 仲良きことは美しかな

無事期末試験が終わり、夏休みとなつた。特にやることもなかつた僕は、バイト中心の生活をしていた。だけど、そのバイト生活自体には大きな変化があつた。

あの日……羽沢先輩に睡眠不足を咎められた日。先輩に諭されたことで初めて、僕は先輩と全く同じ失敗をしかけていたことに気付かされた。先輩の背中を追おうと張り切つっていた内に、悪い面まで吸収してしまつていたらしい。

羽沢先輩を支える為に頑張り始めたというのに、蓋を開けてみれば先輩に支えられてしまふという結果になつてしまつた。

ミイラ取りがミイラになるというが、それが自分に適用される日が来るとは思わなかつた。

そのとき言われた、互いに無理しないように頑張ろうという言葉は僕の心に深く響いた。羽沢先輩が頑張りすぎているときは僕が止め、僕が頑張りすぎているときは羽沢先輩が止める。似たもの同士になりつつあつたからこそ、互いの些細な変化に気づけるようになつた。

どちらかが一方的に支えるのではなく、支え、支えられる関係。気づけばあの日から

凡そ1ヶ月半。僕と先輩の関係はそういう風に変化していた。

例えば、シフトだ。夏休みに入った直後のシフトの休憩時間のときのこと。休憩中、僕が待機所で読書をしていると、同じく休憩になつたらしい羽沢先輩が声をかけてきたのだ。

*

「ねえ、木下くん。シフトだけど、この週だけ6日全部希望に入つてのはどうして？ シフトは週に4回までつて決めたよね」

「いえ、別に……希望日を書いてただけなので、そこから羽沢先輩が4つ選んでくれれば大丈夫です。その週は、バンドの活動もないんですよね？」

「むう、そうなんだけど……でも、この日は絶対に休みます、みたいに言つてほしいの」「でもそしたら、今度は羽沢先輩のスケジュールが自由に組めなくなるじゃないですか」「この週は家でキーボードの練習と残つてる宿題をやろうと思つてるから大丈夫。木下くんの好きなように組んで？」

そうは言われても……自分だって、そんな厳密に組まないといけないような予定なんてない。宿題やつて、コーヒーの勉強して、ゲームでもやつて……そんな感じだつた。

「まあ、だつたら……木金だけ抜けます。その代わり、羽沢先輩も週4を守つてくださいよ」

「ふふつ、了解。心配してくれてありがとうございます」
ぐつ……その笑顔は反則だ。

*

……こんな感じで、僕は羽沢先輩に1週間辺りのシフトの回数に制限をかけられた。
この前みたいに、不意のトラブルに対応できない程のシフトを入れないようにと。

他にも、なぜか定期的に一緒に勉強会をすることになった。都合が合えば、他の先輩方も一緒に。曰く、試験勉強のことを忘れない為らしい。効果があるのかは微妙なところだけど、先輩方との交流の機会が増えるということもあり、反対せずに受け入れている。と言つても、まだ1回しか開催してないけど。

一方で、僕は僕で羽沢先輩のスケジュールを助けることが多くなった。具体的には、上原先輩と連携してバンドが忙しくなりそうなタイミングに合わせてシフトに入るようになり、ライブの直前や直後で疲れてそうなときはなるべくバイト中の仕事を奪うようになつたり。

以前、非常に混雑していて忙しかつた日があつたのだが、飛んでくる料理の注文を必ず捌き続けることで、羽沢先輩のヘルプによる介入を防いだことがある。羽沢先輩に

なにも悟らせなかつた、完全なる勝利だつた。

ああ、それと、そろそろコーヒーを担当してもいいかもしないと言われたので、今後はもつと奪うことができるだろう。

まあ、なんというか、支え合うというか……いかに相手を暇にさせるかの勝負になつてゐる気がしないでもないが、結果的に互いの為になつてゐるという実感はある。

それに、相手に無理をさせないという大義名分のもと、結構お互いに本音で話すようになつた氣もする。次第に、からかい合うことも増えた。ちなみに、羽沢先輩は論破されると口を噤み、悔しそうにしながら少しだけ拗ねる。見てて飽きない。

決意を固めた当初の想定とは違う形になつてしまつたものの、羽沢先輩に無理をさせないという目的そのものは達成できたのでよしとするのであつた。

*

夏休み中のとある月曜日。その日は『羽沢珈琲店』の定休日だ。本来ならばシフトはないのだが、マスターからあることのミーティングをしたいということで任意での招集があつたのだ。特に用事のない僕は、喜んで招集に応じるのであつた。

朝の9時頃に店に到着した僕は表から羽沢先輩に迎えられ、黒板の出された店内スペースでミーティングが始まつた。

参加はマスター、羽沢先輩、僕の3人だ。先輩の母親と若宮先輩は用事で来れなかつ

たようだ。

黒板を見る。そこには、『新作のスイーツ案』と書かれていた。

「定期的にこうやつてみんなで話し合つてね、期間限定とか新作のスイーツを出してるんだ。私の案が採用されたこともあるんだよ」

今日のミーティングの趣旨を、羽沢先輩が説明してくれた。その表情から察するに、かつて採用されたのがよっぽど嬉しかったようだ。もし先輩に犬の尻尾が付いてたら、勢いよく振つていたに違いない。

「新作つてことは、しばらくメニューに入れておく感じですか？」

「うん。定番のものは残して、それ以外は流行りとかに合わせて少しづつ変えてるんだ」
なるほど。うーん、でも、甘い物は好きではあるけど、スイーツとかはあんまり詳しくない。役に立てるかな……一生懸命、頑張つてはみるけど。

「じゃあ、早速だけど始めよっか。今回はね、日本ではマイナーなスイーツをテーマにしようと思つて……」

マスターが黒板の前に立ち、いよいよ話し合いが始まる。なんだかいきなり戦力外になりそうなテーマが飛び出してきたのは気にしてはいけない。気にならなにも発言できなくなる。

「イギリスのショートケーキとかのこと？」

「そうそう、そんな感じで」

「え、ショートケーキって国ごとに違つたりするの？」

「えっと、ショートケーキのショートって、『サクサクする』って意味の英語から来てるつて言われててね、イギリスではビスケットとかの固めの生地でクリームと果物が挟んであるの」

羽沢先輩に尋ねると、そう教えてくれた。流石、喫茶店の娘ということなのだろうか。それとも、女子だからなのだろうか。

他にも、アメリカ式やフランス式などがあるらしい。なんかカレーミたいだ。

……やばい。本当に分からんぞ。普通に店で売つてたり、この店に置いてある以外のスイーツはさっぱりだ。名前だけ聞いたことがあっても、食べたことがない奴だつて多い。

「あ！　この前テレビでやつてたけど、ズコットとかは？　すごい美味しそうだつたよ！」

「なるほどね、確かにセミフレッド系はいいかもね」

ズコット？　セミフレッド？　いや、待て。セミフレッドはなんかの漫画で出てたような……あ、そうだ、なんか半分凍つてる感じの奴だ。もちろん、食べたことはない。……やつぱり僕、知らないかも。

その後もミーティングが続くが、羽沢先輩が意見を述べるのみで、僕は沈黙を保つしかなかつた。時折羽沢先輩に質問したりはしたけど、それだけだつた。なにも生産的な発言はしていない。

なんだか虚しいような、置いてけぼりで寂しいような、そんな感じのミーティングだつた。

*

大体ミーティングが開始してから1時間が経つただろうか。黒板が意見の一覧でびっしりと埋まり、選定の段階となつた。ちなみに、99%羽沢先輩だ。

途中から僕は、アイデア方面では役に立てそうになかつたので、全員分のコーヒーとかを用意したりした。暑さが厳しいので、アイスにしてみた。

会話を聞きながら自分で淹れたコーヒーの出来を確認していると、マスターは突然とある提案をするのであつた。

「それじゃあ、2人にはこのリストにあるスイーツの調査をしてもらおうかな」「え、調査……ですか？」

「うん。ほら、実際に食べてみないとどんな感じか分からぬからね。都内ならどこかしらで食べれる店がある筈だから、その調査」

マスターは「これが軍資金ね」と言って万札を何枚かテーブルに置いた。かなりの額

だ。

「こんなにたくさん……お父さん、いいの？」

「流石に多いとは思うけどね。足りなかつたら大変だし、念の為だよ」

「でも、マスターはいいんですか？」

「まあ、平行して試作とかもやりたいからね。役割分担というわけさ」

そういうことらしい。リストを眺めていてもなんのことやらつて感じだつたので、試食に行けるのは非常にありがたい。僕を喜んで引き受けることにした。同様に、羽沢先輩も一緒に行くこととなつた。

「ちよつと待つててね、すぐに準備してくるから。実は、ちよつと気になつてたお店がいくつかあるんだ」

羽沢先輩は店の奥へと姿を消した。おそらくは自室に戻つたのだろう。マスターと2人で、帰りを待つ。

……こういう、険悪な雰囲気ではないけど、話題がなくて無言になつちゃうときつて、どうすればいいのか分からなくなる。どういう話題を出せばいいんだろう？

とりあえず、アイスコーヒーを飲んで誤魔化そう。コップに口を付ける。

「ところで木下くん。君はつぐみのことはどう思つてるんだい？」

「ツ!? ごほつ、げほつ……!!」

不意打ちのボディブローが如き一言に、僕は気管にコーヒーを混じらせてしまって咳込む。しゃべれるくらいまでに回復するのに、それなりの時間をしてしまった。

「ごめん、ごめん、驚かせちゃって。でも、図星みたいだね」

「な、なんで……」

「そりや、あの子の父親だからね。しばらく見てれば分かるさ」

完全にバレていたようだ。バイトを初める前からそうだつたとは気づかれていないようだが、それを抜きにしても好きな人の親にバレているこの状況。公開処刑に等しい。

顔や耳が熱い通り越して灼熱の溶岩になつてしまつたかのようだ。今のこの顔を羽沢先輩に見られたら間違ひなく死ぬ自信がある。

「え、えっと……あの……すいません」

「はは、別に謝ることじゃないさ。木下くんは眞面目だし、仕事の覚えも早いしで、ずっとここで働いてほしいって思つてるよ。だから、仮にそういうことになつても反対はないよ」

「そういうことって……その、僕は、羽沢先輩の力になれてれば、今はそれで……」

当初は色々と焦つて妙なアプローチをしてしまつたが、今はもう違う。もちろん、マスターの言うそういう関係になれたら嬉しいとは思うだろうけど、それ以上に羽沢先輩

の力になりたいという気持ちの方が強い。

告白とか、そういう行動を起こすつもりは、今のところはない。

「その辺も含めて、つぐみに君は合つてると思つてるけどね」

「……？ それは、どういう……？」

「木下くんは、つぐみにとつていいストッパーになつてるみたいだからね。逆も然りみたいだし。好きだから、みたいな感じでお互いに頼り切りになるより、そういう関係の方が健全だとは思うよ」

うーん？ なんか、分かるような、分からぬような。とりあえず、曖昧な感じながらも頷いておく。

「なにはともあれ、今日はつぐみのことをよろしく頼むよ。あちこち回ることになるだろうからね」

「は、はい。了解です」

年下とはいえ、自分は男子なんだからその辺りしつかりしてないとだろう。今度は、力強く頷く。

「まあ、それはそれとして、つぐみは自分への好意には鈍いところがあるからね。伝えるならストレートにはつきりと告げた方がいいと思うよ」

「つ、いや、まあ、そうかもですけど……」

ぐつ、駄目だ。この話題だと防戦一方だ。この場から逃げ出したくなるような羞恥に、言葉を返せなくなってしまう。

「お待たせ！ 行こつか、木下くん」

「は、はい……！」

しばらくマスターにいじられていたところ、準備を終えたらしい羽沢先輩が戻ってきた。帽子と、小さめの革のショルダーバッグが追加されていた。

……返事のとき、なぜかどもつてしまつた。マスターに変なこと言われたせいで。ともあれ、僕たちは駅へ向けて出発するのであつた。僅かな緊張を、携えながら。

* *

せつかくだから、思い切つて丸の内方面を回つてみようという羽沢先輩の提案に乗り、僕たちは電車で移動中だ。東京駅まで、あと5分ほどだろうか。

「すごい混んでるね」

「……まあ、夏休みですかね。明るい時間でも、こんなものじゃないですか」

なるべく、平静を装つて答える。実を言うと、今はあまり会話に集中できていない。

その理由は、電車の混雑にある。

電車内は満員とまではいかないものの、余分なスペースがほとんどない程度には混雑していた。羽沢先輩はドア付近の座席の壁を背にしていて、僕が先輩に向き合う形で

立っている。

互いの距離は、かなり近い。ほんの半歩前に進むだけで、密着してしまうくらいの距離。電車の揺れの影響で、偶に服が触れ合ってしまう。

一つ間違えば先輩の胸に体を押し付けてしまうことになるので、そうならないように吊り革をしつかりと握り、足を動かさないようにしている。

マスターに弄られたせいだろうか。なんだか、さつきから羽沢先輩のことを意識しつばなしだ。マスターに、今は先輩の力になりたいだけだと言つておきながら、この有様だ。秘めていた異性としての想いが表に這い出し、僕を悩ませる。

こんなにも顔が近い。髪の毛の1本1本がはつきりと見える。リップをしているようには見えないのに、妙に唇が艶かしく見え、目を離せない。

仕事中や雑談のときには全く気にならなくなつてたのに、魔法にでもかかつてしまつたかのように、羽沢先輩の全てに魅了されている。

「……？ 木下く……あつ！」

「え？ う、うわ……！」

車線変更でもしたのか、車内が大きく揺れた。吊り革なしだつたら確実にバランスを崩すほどの揺れ。席の壁に体重を軽く預けているだけだつた羽沢先輩もその例に漏れず、前のめりに動かされる。その結果がどうなるかは……明らかだ。

僕が代わりの壁となつたおかげで羽沢先輩が倒れることはなかつた。その代わり、両手を僕の胸板辺りに押し付けつつ、ぴつたりと僕の懷に収まつた。もし僕がここで先輩の背中に腕を回せば、完全に抱き止める構図となつていただろう。

いつぞやの雷の日を思い出す。互いに向き合つてゐる分、あのときより更に近く感じられる。シャンプーと思しき髪の匂い、喉元にかかる微かな吐息、じんわりと伝わる体温、吸い込まれそうな瞳。僕の脳は、ショート寸前だつた。

「う、ごめんね……！ 痛くなかった？」

「い、いえ……特には……」

接触は、数秒ほどの短い間だつた。揺れが収まると同時に、羽沢先輩がすぐさま離れたからだ。ほつとしたような、残念なような、複雑な気持ちだ。

……今の接触、羽沢先輩はどう思つてゐるのだろう。動搖していたのは分かる。でも、そこに少しばかりでも異性との密着による羞恥心が混じつてたりはしないのだろうか。もしなにも感じてなかつたとしたら、ショックだ。

……あ、でも、髪の間から覗く耳が、少し赤くなつてゐる。光の加減による錯覚……じゃない。何度見ても、赤い。それどころか、徐々に赤みが増してゐる。

少なくとも、恥ずかしいとは思つてくれてるみたいだつた。……やつた、ということでいいのだろうか。僅かに心拍数が上昇する。

互いに、無言になる。電車の走行音だけが響き渡り、柱の影が一定間隔で僕たちの間を駆け抜ける。相手の出方を窺っているような、妙な空気。

『間もなく、東京……』

「あつ、もう着くみたい……！」

なんて言葉をかけようかと苦心していたところに、到着を告げる車内アナウンスがかつた。邪魔されたような、この奇妙な緊張感を断ち切ってくれたような、そんなタイミングだった。

先程までの空気は霧散し、いつも通りに戻った。僕たちは電車を降り、羽沢先輩が前々から目星を付けていたという店へ向かうのであつた。

*

1店目は、ミーティングの最初の方でリストに上がった、ズコットというスイーツを出している店だった。非常に有名な店なようで、夏休みということも手伝つて満席だった。

そこで、しばらく待つていてることになつたのだが、僕たちを呼んだウエイターから衝撃的なことを告げられる。

「が、カツプルシート……？」

果たして、今の呟きはどちらから漏れたものだつたか。その言葉の響きに、僕は呆然

とするしかなかつた。

要は、普通の席から少し隔離された2人用の横並びの席のことだ。別に、それ自体は大した問題じやない。2人きりになるのは休憩時間とかで慣れてる。ただ、その席の呼称が問題だ。

別に、悲しいことに、誠に残念なことにカツプルじやないし、なによりその名前が恥ずかしい。そんな名前のついた席に羽沢先輩と一緒に座るというシチュエーション……狂おしくらいにやばい。ちょっとぴり、座つてみたいと思つちやう自分がいる。調査に来ているのに、邪な感情全開である。

僕の考えはさておき、問題は羽沢先輩側の気持ちだ。別にカツプルじやなくても座れるらしいが、一応今の僕たちの間柄は先輩と後輩兼友人のような感じだ。なので、そういう風に思われても大丈夫なのだろうか。

「あの、どうします?」

羽沢先輩に聞いてみる。それが聞こえてたのかどうか分からぬけど、先輩は仄かに頬を赤く染めつつ、熟考している様子だつた。

「…………大丈夫です!」

「え……」

「かしこまりました。それではご案内します」

虚を突かれた僕の呟きは、ウエイターの声にかき消された。多少は期待していた部分もあるが、てっきり断ると思っていた。

ウエイターの背中を羽沢先輩が追い、僕がそれに続く。店の奥の窓際の方まで案内される。そこには、紛うことなきカッフルシートが設置されていた。

……お、思ったより狭い。普通に座つても、密着しちゃうんじやないか、これ。

「……木下くん？」

「あ、は、はい、すいません」

なんの躊躇もなく奥へと詰めた羽沢先輩に促され、僕も座る。うわ……肩越しに……体温が……。あ、やっぱ、今ちよつと足動かしたら当たつてしまつた。

「ご注文がお決まりになりましたら、お呼びください」

ウエイターが去つたところで、完全に2人きりになる。もちろん他の客とかもいるのだろうけど、しきりのせいで個室のようにさえ感じられる。

「ごめんね、木下くん。こんな狭い席になっちゃつて……嫌じやない？」

嫌じやない。全然嫌じやない。むしろ歓迎してさえいる。でも、こうなつていることに驚いていることも確かだつた。

「あー、いや、それは、大丈夫です。でも、なんで……？」

「あはは、その……前からずつと来たいお店だったから。普通の席が空くまではまだま

だ時間がかかりそうだつたから、つい……勢いで」

そういうことらしい。羽沢先輩は肩を丸め、体を縮こませるようにし、顔を俯かせながらそう呟いた。……ああ、うん。まあ、そんなところだろうとは思つたけど。

「あ！ 蘭ちゃんたちには内緒だよ!? やっぱり、ちょっと……恥ずかしいし」

「まあ、言わないですよ。知られたら、僕まで巻き添えですし」

仮にこのことを知られれば、主に上原先輩や青葉先輩がうるさそうだ。

「そ、そうだよね！ それより、早く選ぼつか。ほら、こんなにいっぱいあるよ！ ふふっ、ひまりちゃんじゃないけど、どれにするか迷っちゃう」

羽沢先輩がメニューを広げると、写真付きの色とりどりのケーキがページいっぱいに紹介されている。

もちろん、僕たちの目的であるズコットもある。なるほど、こんな形をしてて、中にセミフレッドが入つてゐる感じなのか。フルーツもいっぱい詰まつていて、フルーツの種類ごとにメニューが分かれているようだ。

「この、いちごのズコットが美味しそうだなあ……あ、でもこつちのオレンジのもよさそう……うーん、悩んじやうなあ……でも、他にも回るからたくさん食べるのは駄目だよね」

満天の星空のように目を輝かせてメニューを眺める先輩。なんだかいつもより、は

しゃいでいるように見える。普段はしつかりものの先輩が、今だけは自分より年下に見えてくるから不思議だ。これが、お菓子の魔力という奴なのだろうか。

「2種類頼んで、半分ずつにするのとかはどうですか。そうすれば、一応1個分で2種類までは食べられますよ」

「あ、そうだね。うん、そうしようか。えっと、じゃあ……私はいちごのズコットにするね。木下くんは？」

「僕は別にどれでもいいんで、もう1つも羽沢先輩が選んでください」

どうせどれも初めて食べるわけだし、これだけの人気店なら美味しいに決まってるだろうし。僕より、楽しみにしてた羽沢先輩に任せよう。

「え、ほんと？ ありがとう！ この、マロンとナツツのズコットでいいかな？」

数回は遠慮されることを予想してたけど、意外にも羽沢先輩は1回で僕の提案を受け入れた。しかも、瞬時に頼みたいものを決めていた。これは、相当食べたかつたのだろう。

「ええ、いいですよ」

「えへへ、本当にありがとうございます！ それじゃあ、注文しちゃうね」

サンタのプレゼントを待つ子供のように上機嫌な様子で、呼び出しボタンを押す羽沢先輩。ウェイターを待つ間も、注文を待つ間も、先輩は顔を綻ばせながら頼んだズコツ

トの写真をずっと眺めていた。しかも、鼻歌まで歌っていた。

それを横から見ていた僕の視線に気づいたとき、顔をトマトのようにしながらメニューで顔を隠していたのは、また別の話。

*

ズコットを楽しんだ後も、僕たちの調査は続いた。次から次へと店へ渡り歩き、その店の人気スイーツなどを試していく。

どれも美味しかったのだが……正直、僕は3店目を終えた辺りから軽く胸焼けしていった。だというのに、羽沢先輩は平然としていた。女子は甘いものならいくらでも食べられるらしいが、どうやら先輩もその1人だつたようだ。

もちろん、ただ楽しむだけじゃなくて、しつかりと調査も行つていった。どのスイーツをベースにするか、果物を使うならどれを使うか、甘さをどうするか、名前をどうするか。食べたスイーツを参考にしつつ、羽沢先輩と案を出し合つた。実際に食べることができたおかげで、僕も真っ当な意見を言えるようになったのだ。

積極的に意見を交わしあつた甲斐があつて、夕方になる頃には実現が可能と思しき案がいくつも纏まつたのであつた。

*
帰りの電車の中。僕たちは並んで座席に座っている。そんなに長い時間乗るわけ

じやないけど、行きと違つてかなり空いていたのだ。

「……あ、お父さんから返事が来たよ。うん、今日はそのまま帰つても大丈夫だつて。それと、もしよければ夕飯を用意してもいいつてあるけど、どうする？」

「すいません……申し出はありがたいんですけど、今日は流石にもう……お腹いっぱいです」

「あはは、そうだよね。私も夕飯、あんまり食べなさそう。うん、分かった。そう返事しておくね」

羽沢先輩は再度スマホを操作し始める。なんか今日だけで、1年分のスイーツを食べたかのような気分だ。先輩と一緒にあちこちの店を回れたのはよかつたけど、少なくとも数日はスイーツを食べたくない。

「木下くん、今日はありがとう。木下くんのおかげで、色んな味のお菓子が食べれちゃつた。写真もこんなにたくさん撮れたよ」

先輩は自身のスマホを操作すると、今日撮つていた写真を見せてくれる。おお、綺麗な角度で撮れてる。こんなにたくさん食べたんだな、と思いつながら写真を眺める。

「羽沢先輩は、今日食べた中ではどれが好きでした？」

「全部美味しかつたけど、ズコットとか、クグロフが好きだつたかな。木下くんは？」

「僕は、あのイギリス式ショートケーキが好きでした。固めの食感の方が好みみたいで

す

雑談に花を咲かせる。といつても、羽沢先輩の乗車時間はそれほど長くはない。話題が1、2個移り変わったところで、商店街の最寄り駅への到着のアナウンスが流れる。

「あ、もう降りないと。木下くんはもうちょっと先なんだよね？」

「はい。通学とは違うルートですけど」

電車が緩やかに減速する。ああ……今日のお別れが近い。ドアが開いてしまえば、それで終わりだ。もつと、電車に乗る時間が長ければよかつたのに。そう、思ってしまう。羽沢先輩が立ち上がり、僕の正面に立つ。僕の方が身長が高いとはいえ、流石に今の構図では僕が見上げる形となる。

「今日はお仕事としてのお出かけだつたけど……えへへ、とても楽しかったよ。また、一緒にどつかに食べに行こうね！」

「つ！…………は、はい。僕で、よければ……」

羽沢先輩の誘いに、ドキリと胸を彈ませてしまつた。『一緒に』とか、果たして羽沢先輩は分かつてそういう言い方をしているのだろうか。

……いや、ここは前向きに考えよう。そうやつて自然に誘つてもらえるようになつたくらい、この3ヶ月半で仲良くなれたのだと。信頼されるようになつたのだと。告白……するには足りないものがいっぱいあるとは思う。でも、それができる日は確

実に近づいているのではないか。そう、信じたくなるくらいには、距離が縮んだのではないか。少なくとも、僕は羽沢先輩のことをただ学年が1つ上なだけの普通の女子だと見れるようになつた。

電車がホームに停車する。続けて、ドアが開いた。

「木下くん、さようなら。また明日！」

向日葵のような元気な笑顔と共に手を振りながら降車する羽沢先輩を、僕もまた手を振りながら見送るのであつた。

夕焼けで道路が茜色に染まる中、私は心が浮ついているのを自覚しながら、道を歩いている。でも、しようがないよね。それだけ、今日は楽しかつたんだから。

……電車でぶつかつちやつたり、年下の木下くんの前ではしやぎすぎちゃつたり、勢いでカツプルシートに座つちやつたときは恥ずかしかつたけど。

そういうえば、木下くん、私なんかとカツプルシートに座ることになつちやつて、嫌じやなかつたかな。平気だとは言つてくれたけど、ああいう席は本当は好きな人と一緒に座りたいよね。お友達の私とで、本当によかつたのかな。

……好きな人、かあ……ひまりちゃんはよくそういうお話をされるけど、実際に誰々が好きみたいな話をしてたことはなかつたかな。女子校だから、校内でそういう男女の噂が流れることもないし。

木下くんは、どうなんだろう。好きな人、いるのかな？ 共学だつて言つてたし、クラスの女の子の誰かとか、かな？ 女子の私に言うことじやないのかもしれないけど、本人の口からそういうこと、聞いたことないなあ。

もし、そういうことを相談されちゃつたら、どうしよう？ 先輩として気の利いたアドバイスは……うう、できないかも。だって、私もそういう経験ないんだもん。

男の子とのお出かけの経験なんて、それこそ木下くんくらいしか…………あれ？ ……なにか、心に引っかかるものを感じた。とくん、となにかが奥底で揺れるような、切ない心のざわめき。初めての感覚に違和感を覚え、その正体に戸惑う。

だけど、私がその正体をこの場で掴むことはなかつた。

「あ、あの！」

商店街の入り口に差し掛かつた頃、不意に横から声をかけられた。思考に埋没していた意識が現実に引き戻され、声がした方を向いてみる。

自分と同じくらいの年齢の男の子だつた。ううん、それだけじやない。どこかで、会つたことがあるような気がする。

「えっと……あ、そつか。もしかして、よくお店に来てくれる……」

「は、はい！ 北高の1年の加藤です！」

そうだ、思い出した。半年くらい前から、週1から隔週くらいの間隔でいらっしゃる男の子の常連さんだ。髪が丸刈りで日焼けもしてるから、野球部なんだと思う。お店ではよく、コーヒーを飲みながら勉強をしていたと思う。

でも、北高かあ……商店街から見ると、羽丘の反対側の、川の向こう側にある高校だ。そつちの方からもこのお店のことを知つてて通つてもらえるなんて、嬉しいな。

「羽丘の2年の羽沢です。でも、ごめんね。実は今日は定休日で、お店はやつてないの」「そ、それは知つてます……！ そうじやなくて……今日は、言いたいことがあるんです……！」

言いたいこと？ なんだろう……全然思いつかない。口調からしてだいぶ緊張しているみたいだし、大事な話なんだとは思うけど。私は大人しく、加藤くんの話の続きを待つた。

——しかし、次の瞬間、私の頭は真っ白になることになる。それくらい、予想もしなかつた衝撃的な発言だった。

「初めて店で会ったときから好きでした！ そ、その……俺と付き合ってください！」

第9話 仲良きことは残酷かな

今日、初めて男の子から告白された。場所は商店街の入り口。多分、周囲に他に人はいなかつたと思う。相手はお店の常連の男の子。木下くんと同じ、高校1年生の加藤くん。

まさか、私なんかを好きだと言つてくれる男の子がいるなんて思わなかつた。それも、あんな正面から突然言われるなんて。まるで、漫画の1場面みたいだつた。

最初は、加藤くんの言つた言葉の意味が分からなかつた。次に、言葉の意味を理解した途端、頭が真っ白になつてしまつた。現実なのか夢なのかが分からなくなつて、無重力の空間をふわふわと浮いているような感覚に襲われた。

それから更にしばらくして、ようやくこれが紛れもない現実で、男の子に告白されたのだと認めたとき、私の顔は熱湯のように沸騰した。

……どんな受け答えをしたのかは、全然覚えてない。でも、まともに言葉を紡げなかつたのだけは覚えている。恥ずかしくて恥ずかしくて、羞恥心だけで倒れてしまいそううだつた。相手の顔を見ることができず、ずっと俯いていたと思う。

結論だけ言つてしまふと、私はその場で返事をすることができなかつた。私がなにか

言葉らしきものを発する前に、加藤くんが私に電話番号らしき数字が書かれた紙を渡して、こう言つたのだ。返事はいつでもいいから、そのときは連絡してほしい、と。

それだけ言い残すと、加藤くんは走つてその場から消えてしまった。あの様子だと、きっと私がお返事をするまではお店に来るつもりはないのかもしない。

……付き合う、つてどういうことだろう。もちろん、言葉の意味は知つてゐる。恋人になるということだ。でも、どうすれば恋人になつてもいいのかな。その資格は、私にはあるのかな。恋人に、なりたいのかな。

そもそも、恋人になつたとして、なにをすればいいんだろう？ 遊びに行く？ ご飯を食べる？ 腕を組む？ でも、そういうことはお友達の木下くんとだつてしたことがある。

他には…………そ、その…………き、キス…………する、とか？ む、無理…………！ そんなの、知らない人といきなりはできないよ…………！ それに、恥ずかしくて死んじやう…………！

うう、分からぬ。なにもかもが分からなかつた。お受けすべきか、そうでないか。こう言つては失礼だけど、私は加藤くんのことはほとんど知らない。どういう性格なのか、なにが好きなのか、普段どういうことをしてゐのか。そういうことを、なにも知らない。

でも、相手のことを知らないからつて、それだけを理由にお断りしてもいいのかな。

なし崩し的に恋人になつてから、お互のことによく知つていつて……みたいなパターンも、漫画で読んだことがある。

一晩中、考えて、考えて、考え続けた。それこそ、頭が痛くなつてくるくらい考えてみた。だけど、やっぱり答えは出てこなくて。袋小路に入つてしまつたように、なにも思いつかなかつた。

きっと、今の私が1人で悩んでも答えは出てこない。そんな気がした。だから、カーテン越しに空が白み始めたのに気づいたとき、一旦考えるのを止めた。代わりに、後で相談してみることにした。

誰に相談しようか。……そう考えたとき、なぜかは分からぬけど、真つ先に思い浮かんだのは……男の子の木下くんの顔だつた。

羽沢先輩と2人でスイーツの調査を行つた翌日。僕が裏口から店に入ると、羽沢先輩にシフトの後に予定はあるかと聞かれた。特ないと答えると、相談に乗つてほしいと言われた。夕飯を奢るから、ファミレスで話を聞いてほしいと。もちろん、僕は快諾した。単純に羽沢先輩と一緒に食事に行きたいというのもあつた

し、なにより先輩の方から僕を頼つてくれたというのが、たまらなく嬉しかった。

わざわざ場所を店からファミレスに移すということは、結構大事な相談の筈だ。羽沢先輩の力になると決めている僕には、光栄すぎる話だった。

いつものようにしつかりとバイトをこなしつつ、夕方を待つ。気持ちが上向きだつたせいか、いつも以上に調子がよかつた。要求されているであろう水準を遥かに超えるレベルで、順調に仕事を捌いていった。

ああ、それと、今日はいよいよ試しにコーヒーモ担当してみることとなつた。今日の僕に障害などある筈もなく、結果は当然成功。マスターにも、コーヒーモ担当合格の判定をいただいたのであつた。

そして、いよいよ約束の時間となつた。羽沢先輩と同時にバイトを上がり、僕たちはファミレスへと移動した。

大事な相談の前だつたからか、単純に疲れているからなのか、移動中の口数は少なかつた。羽沢先輩にしては珍しいことではあつたけど、このときは特に気にも留めてなかつた。

席に着いた後、僕は早速相談はなにかと切り出してみる。ところが、羽沢先輩は「そ、その前に、ご飯食べようよ……！」お腹、空いてるよね？」と後回しにされてしまった。そんなに話しにくい内容なのか、一旦落ち着いてから話したいのか……どちらかは分

からなかつたけど、促された通りにご飯を優先することにした。

ちなみに、今日はオムライスにした。デザートはいらないのかと聞かれたけど、もちろん断つた。羽沢先輩は頼んでた。昨日の今日ですごいなと純粋に思った。

ご飯を食べ終えるまでは、他愛もない雑談を楽しんだ。食事を終え、羽沢先輩がデザートをいただき、テーブルに残つたのはドリンクだけとなつたころ、いよいよ本題に入るのであつた。

「えつと、突然ごめんね？　相談を聞いてほしいなんて言っちゃつて」

「いえ、全然大丈夫ですよ。それで、どうしたんですか？」

「……そ、その……なんて、言えばいいのかな……」

なんだか、歯切れが悪い。話し出すそぶりを見せたものの、途中で言葉を切つてホットコーヒーのカップに口を付けてしまい、黙りこくつてしまう。

これまでの流れで、深刻な内容であることは明白だ。決して急かさず、僕も注いできたばかりのアイスのカフェラテを飲む。……最近のファミレスのコーヒーも、案外侮れないな。

「あ、あのね……！」

僕がカフェラテを楽しんでいると、沈黙を保っていた羽沢先輩が勢いよく面を上げた。僕はコップをテーブルに置き、視線を先輩へと戻す。

「実は……昨日、木下くんと別れた後のことなんだけどね……」

ポツリ、ポツリと呟いていく。いつもはつくりとしゃべる羽沢先輩らしからぬ小声だ。それに、なんだか顔を赤らめているように見えるのは気のせいだろうか。

……なんか、引つかかる。そんな顔をしてしまうくらい、話すのが恥ずかしいような相談というのは分かる。だけど、その正体までは分からなかつた。

……ただ、後になつて思えば、この瞬間に内容を予測できたとしてもまるで意味はなかつただろう。

だつて、どうせ僕が示す反応は同じだつただろうから。

「あの……偶にいらつしやる髪の毛が丸刈りの男の子の常連さんがいるでしょ？ 加藤くんつて言うんだけど……そ、そのね…………つ……昨日、商店街で……告白、されたの……」

…………え？ 今……なんて？

「こぐ、はく……？」

「う、うん……そう、なの」

確認の為というよりは、その言葉の意味を理解したくないあまり、壊れたラジオのような声でオウム返しをしてしまう。聞き間違えであつてほしい。そう、思つて。しかし……そんな都合のいいことは、起きなかつた。羽沢先輩はますます顔を紅潮さ

せながらも、確かに肯定の意を示した。

……飲み物を飲んだばかりなのに、喉がカラカラになる。知らぬ間に、手のひらは汗ばんでいた。それでいて……心臓の辺りが、すごく苦しい。吐き気まで込み上げてくる。

「私……男の子に告白されたの、初めてで……昨日、一晩中考えてたんだけど……もう、どうすればいいのか分からなくなつちやつて……」

羽沢先輩の声が、遠く感じる。まるで、テレビ越しで声を聞いているかのようだ。言葉は聞こえる。でも、内容は半ばくらいしか頭に入つてこない。

羽沢先輩が別の男子に告白されたのがショックなのではない。焦るような話なのは事実だけど、先輩の姿勢や言動を考えればいくらでも起こりうることだった。

相手のことをどう思っているにせよ、心優しい先輩が返事に苦心するのも無理はないと思う。悩んだ末に他の誰かに相談するのも……まあ、分かる。

…………でも、なんでその相手がよりもよつて僕なんだ。羽沢先輩に想いを寄せている僕には、その選択はあまりにも残酷すぎる。

だつて、そうだろう？ 男の僕になんの躊躇もなく、真っ先に相談できるということは……それはつまり……僕のことを、そういう対象として見てない、つて言つてるようなものなのだから。

「だから、男の子側の意見が知りたくて……ねえ、どうしたら……いいのかな……？
ごめんね、こんな曖昧な質問で」

少しくらいは前進してたと思つてた。僕も、少しくらいは変わり始めていると思つた。昨日のこともあつたので、そういうことを全く期待していなかつたと言われてしまえば、嘘になる。

でも、実際は……なにもなかつたみたいだ。羽沢先輩は僕のことを意識してなかつた。僕は僕で、先輩の力になればそれでいいとか言つておきながら、こんなにも動搖し、思考が停止してしまつてゐる。先輩が真剣に悩んでいるということは分かつてゐるのに。

……やつぱり、今も昔も不純な気持ちでバイトを続けていたのかもしれない、僕は。

「…………さあ。そういう経験ないんで、僕だつてそんなの分からぬですよ」

つい、棘のある言い方をしてしまう。本当は、今すぐにでも話を止めてほしい。心の奥底で、沸々となにかが湧き上がる気配を感じる。先輩が言葉を発する度に、神経がザラリとざわつく。

早くこの場を離れたい。離れたいのに……相談を引き受けてしまつたという最低限の責任感が、尚も僕をこの場に留まらせる。止めてくれ……こんなの、ただの生き地獄だ……。

「好きなら付き合えばいいし、そうじやないなら付き合わなきやいいんじやないんですか」

「でも……付き合っている内に好きになるときもあるつて聞いたことがあつて……お受けすべき基準つて、なんのかなあ、つて……」

付き合っている内に好きになるかもしれない。その発言は、僕の心を著しく狂わせる。熱した鉄棒を心のど真ん中に突き刺され、乱暴に搔き回されているかのような痛み。

「……そもそも、羽沢先輩はその相手のことを知ってるんですか？」

「ううん、あまり知らないの。注文を取るときとか、注文のものを持って行つたときに少し話したくらいで」

「ほんと他人じやないですか。なんで受けるかどうかで悩んでるんですか」

「だからだよ。加藤くんがどういう人か知らないからって、そんな簡単にお断りしちゃうのは……せつかく告白してくれたのに……失礼だよ……」

「じゃあ、好きつて言つてくれるんなら誰でもいいんですか？」

「そ、そんなことないよ……！　ない、けど……」

語気が、どんどん荒くなつてゐるのを自覚する。……僕は今、なにに苛ついているんだろう。

加藤とやらをすぐに振ろうとしないことに？ こんな相談をしてくる羽沢先輩に？ あるいは先輩の煮え切らない態度？ それとも……僕の気持ちに気づいてくれないことに？

……いや、なにを考えてるんだ僕。言わなきや、気づかないに決まっている。そんなのは、ただの八つ当たりだ。単に、僕がその加藤という奴より勇気がないだけだ。

それに、先輩が加藤を振ろうが振らなかろうが関係ないじやないか。だつて、今この瞬間にも、先輩の気持ちが一切僕に向いていないと宣言され続けているのだから。

「……すいません。僕じやあんまり役に立てそうにありません。『Afterglow』のみんなにでも聞いてください」

しばらく言葉の応酬が続いたが、いよいよ责任感だけで話を聞いてるのも限界になつた。僕は席を立つ。このまま話を続けていたら、本当にどうにかなつてしまいそうだつた。

「え……？」と戸惑う様子の羽沢先輩を他所に、「『ちそうさまでした』とだけ告げて、僕は逃げるようにして店を去つた。いや……』ように』じやなくて、完全に逃げたのであつた。

……やつてしまつた。間違いなく、先輩に向けるような態度じやなかつた。

一旦、頭を冷やそう。それで、次以降は表面上だけでも普通に振る舞えるようにしな

いと。そう、思うのであつた。

木下くんが退店する後ろ姿を、私は座つたまま見送ることしかできなかつた。本当に、突然の退席だつた。それでも、自分で注いだアイスカフエラテが空になつていたのは、木下くんらしかつた。

……怒つてた、よね。多分……だけど。でも、どうしてだろう……。私がなにか悪いことをしちやつたんだと思うけど、それがなんのかが全然分からない。

私がいつまで経つても結論を出さなかつたからかな？　でも、いい加減な答えを出していい話じやないよね。私にとつても、加藤くんにとつても。

昨日、すぐに相談しなかつたから？　結果的に私は徹夜で寝不足になつちやつたし、ありえるけど、そもそも寝不足のことは木下くんには言つてないし……。気づかれてる可能性も、ちよつとはあるけど……。

偶々機嫌が悪かつた？　そういう日つてないわけじやないけど、少なくとも仕事や食事の間は普通だつたと思う。

……聞きたいことが、曖昧すぎたからかもしれない。やっぱり、もつとちゃんと聞き

たいことを整理した方がよかつたのかも。

……あれ？ だけど、どんな答えを聞きたくて、木下くんに相談したんだろう？ な
んで、最初の相談相手に木下くんを選んだんだろう？ ……そう、男の子の側の意見が
知りたいんだつた。でも、なんで？ 私の方から男の子に告白するとかなら分かるけ
ど、男の子から告白された私が男の子の側の視点を得ることに、どんな意味があるの？
……なんだか頭がこんがらがつて、自分でもなにが分からぬのかが分からなくなつ
てきた。もしかしたら寝不足のせいで、今朝から頭が回らなくなつてたのかも。

……だから、木下くんは怒つてたのかな。木下くんからしてみれば、なんでそんなこ
とを聞くんだろうって感じだつたのかも。だとしたら、申し訳ないことをしちやつたな
……。

「……明日、みんなにも聞いてみようかな」

よくよく考えれば、同じ女の子のみんなに相談してみるのが先だつた気がする。な
に、最初に木下くんを頼つてしまつたのは……相当混乱してたのかな、私。

今度、ちゃんと木下くんに謝らないと。そう思いつつ、私はカツプに残つていたコー
ヒーを飲み干すのであつた。

*

翌日の午前10時。バンドの練習の為に『C i R C L E』に集まつた私たちは、各々

の楽器の調整を進めていた。この練習の後、相談をするつもりだ。それまでは、ちゃんと集中しないと。

そう思っていたところ、リーダーのひまりちゃんが突然「みんな、ちょっと聞いてー！」と集合をかけた。どうしたんだろう？

「なに、ひまり？」

「んつふつふーん。実は今日、重大な発表がありまーす！」

お日様のような笑顔で両手でガツツポーズを取るひまりちゃん。とつてもいい知らせであることが、聞かなくとも分かつちやうくらいの笑顔だった。

「あく、もしかして、20キロ痩せた～？」

「違うよ!? というか、いくらなんでも20キロも痩せたら大変だよ!? モカの中で私の体重はどうなってるの!?」

「あー、こらこら、モカ。話が進まなくなるから、まだ余計なことを言うなって」「まだ!? もっと強く止めてよ!!」

「まあ、まあ……落ち着いて、ひまりちゃん。練習時間なくなつちやうよ?」

間に入つて、話が脱線しそうになつていたのを引き留める。蘭ちゃんが「それで、話つて?」と改めて問うと、ひまりちゃんがいよいよ話を切り出した。

「なんと! 私たち『Afterglow』は、9月に開催の『ガールズ☆スーパーフェ

ス』に招待されることになりましたー！」

「え、待つて……それって、渋谷ら辺の大きな公園でやる、ガールズバンド専門の野外フェスのことじや……？」

「そう、それ！　それに招待されちゃったんだよー！」

半信半疑の様子で聞いた蘭ちゃんに、ひまりちゃんは嘘じやないと力強く頷いた。巴ちゃんとモ力ちゃんも目を丸くしている。それだけ、『ガールズ☆スーパーフェス』はすごいイベントなのだ。流石に武道館とかには敵わないけど、ガールズバンドが憧れとするイベントの1つなのは間違いない。

そんな大きなイベントに、私たちが招待された。それはもう、この場で飛び上がつてもおかしくないくらい、とびきりに嬉しいお知らせだった。

「私たちが、『ガルスパ』に……！」

「いよっしゃあー、あの『ガルスパ』でライブできるなんて……！　くう、燃えてきたー

！」

「やつた。やつたね、みんな……！」

もちろん、私だつてすごく、ものすごく嬉しい……！　一時的に告白のことや相談のことが頭から抜け落ちてしまうくらい、嬉しくて嬉しくて仕方がなかつた。

中学のときに結成してからずっと続けてきたバンド活動。去年は多くの困難に見舞

われたけど、それを乗り越えたことで大きく成長できた私たち。その芽が、ついに出てきた瞬間だつた。

「せつかくだし、らーん、新曲行っちゃう〜？」

「…………そうだね。それも、いいかも」

新曲……！ 時間が潤沢にあるとは言えないけど、調子がいいときの蘭ちゃんは驚くくらい早く仕上げてくる。きっと練習は大変だけど、絶対に間に合わせよう。よーし！ 頑張らないと！

「じゃあみんなーー！ エイ、エイ、おーー！」

“いつも通り”ひまりちゃんの掛け声に無言で応えた私たちは、今までで最高潮のモチベーションで練習に臨むのあつた。その出来は、言うまでもないと思う。

*

練習後、ファミレスにて遅めのお昼を食べる私たち。昨日、木下くんに相談をしたのとは違う、イタリアンがメインのお店だ。

そこで改めて、私は相談をみんなに持ちかけてみた。加藤くんという男の子に、告白されたと。

「え、ほんとほんと!? やつたじyan、つぐ〜！ ……ん？ 加藤君？」

「う、うん。ひまりちゃんも、見かけたことはあると思うよ」

ひまりちゃんの問いかけに、私は今も熱い顔を俯かせながら答える。何回かは、ひまりちゃんがお店にいるときに加藤くんもお店にいたことはあつたのだ。流石に、ひまりちゃんは覚えてないと思うけど。

「そうじやなくて！ その告白された男子つて、本当に加藤君なの!?」

「そうだけど……ひまりちゃんつて、加藤くんとお友達なの？」

「違う！ そういうことでもなくて！」

ひまりちゃんが頭を抱えてる。要領を得ず、最初はひまりちゃんの勢いに押されていた私も首を傾げてしまう。

「あー、まあ、ひまりのことは置いておいてだな……つぐ、結局なんて答えようつて思つてるんだ？ 付き合うつもりなのか？」

「えつと……それが分からなくて……」

「そもそも、つぐみはその加藤のことが好きなの？」

「そもそも、分からなくて……」

「巴ちゃんと蘭ちゃんの質問に、私は言葉を詰まらせる。それこそが、みんなに相談したいことなのだ。

「実は昨日ね、木下くんにも相談してみたんだ。でも、ちゃんと答えは出なくて……」「……え？ つぐ……ゆー君に相談したのー？」

ずっと沈黙を保っていたモ力ちゃんが、急に真剣な面持ちで聞いてきた。心なしか、言葉の間延びもいつもより少ない。

「ううん、モ力ちゃんだけじゃなかつた。なぜだか分からぬけど、他のみんなも一様に驚いているように見えた。

「うん、相談したよ？ でも、私の聞き方がよくなかつたみたいで、少し怒らせちゃつたの……今度謝らなくちゃ、つて思つてるんだけど……」

「……少しじやないと思うけどどなー？」

消え入るような小声で呟かれたモ力ちゃんの返事は、残念ながら聞き取れなかつた。「ま、待つて待つて……！」つぐは加藤君に告白されて、それを木下君に相談して……え

？ えつ!?

「ひまり、落ち着いて。そのことだけは言つちやダメだから」

「ああ。それはアソツの問題だ」

「……なんだろう？ 木下くんに相談した、と言つた辺りから、みんなの雰囲気が変わつた気がする。なんていうか……こう、困惑？ してるように見える。

「……つぐはー、なんでゆー君に最初に相談したのー？」

「……実は、それも分からぬんだ。ただ、相談しようつて決めたときに真つ先に思い浮かんだのが木下くんだつたの」

「うーん？ ……これは、どっちだろー？」

モ力ちゃんが、むむむーって感じの難しい顔をしてる。モ力ちゃん、国語が得意だし、私には見えてない部分が見えてるのかも。できれば、それを教えてほしいけど、悩んでるつてことは、まだ聞かない方がいいのかな。

そう思つていたら、今度は蘭ちゃんが腕を組みながら答えてくれた。

「……つぐみ。私はつぐみじやないから、つぐみの気持ちは分からないけど……ちゃんと、本心から出せた答えだつて言えるまで、考え抜いた方がいいと思う。じやないと……後悔すると思う。まだつぐみ自身が気づいてないかも知れないことも含めて……つぐみが1人で考えないといけないことだと思う。どれだけ、大変でも」

「……うん」

蘭ちゃんもまた、私が知らない間にかを見抜いてるみたい。でも、自分で気づかないと意味がないと言われてしまつた。長い時間をかけて華道と向き合つた、蘭ちゃんらしいアドバイスだと思つた。ちゃんと、心に留めておかないと。

……だけど、なにを見落としてるのかな、私。みんなと一緒にいる間、ずっと頭の片隅で考えてみたけど、なにも思い浮かばなかつた。

モヤモヤとした思いを抱えたまま、解散となつてしまつたのであつた。

*

みんなと別れた後、私は真っ直ぐに帰宅した。今日は、15時からシフトの時間だ。今は14時半くらいだから、少し休んだら着替えない。

そう思い、待機所を通りうとしたときだつた。テーブルに、あるものが置いてあるのに気づいた。

「……あれ？ これって……スマホ？」

黒色のスマホだつた。見覚えがある。多分、木下くんのスマホだ。一応手に持つて背面とかを確認してみるけど、間違いないと思う。一昨日、近くで操作しているのを何回か見てたから背面のデザインはよく覚えてる。

たしか……今日の木下君のシフトは14時までだつた筈。ということは、もう上がつてることだよね。つまり……忘れて行つちゃつたのかもしれない。

どうしよう……気づいて、戻つてくるかな？ それとも、届けた方がいい？ まだそんなには離れてないと思うけど、流石に届けに行けるほどの時間はないと思うし、もし既に電車に乗つてたら、どうしようもない。

うーん……こつちで預かつておいて、しばらく待つても取りに戻つてこなさそつたら、木下くんの自宅に電話してみようかな。

そう思い、そのスマホを貴重品用の金庫に仕舞つておこうとした。
——まさに、そのときだつた。チャットツールによる通知が起動し、木下くんのスマ

木の画面が点灯したのは。

……もし、この通知に気づかなければ。そうでなくともせめて、画面に目をやらなかつたら。後に、そう後悔することになるも……それこそ、後の祭りだつた。

光つた画面に自然と視線が釣られてしまつ。そして……ひまりちゃんのアカウント名が送信主の、チャットの通知によるメッセージの一部が目に入つてしまつた。

『ねえ、つぐが別の男子に告白されちゃつたんじよ!? こうなつたら、木下君もつぐに好きつて言うしかないよ！ 早くしないと、OKされちゃう…………』

「…………え」

息を呑む。後頭部を鈍器で殴られたかのような衝撃が走つた。

…………え？ これ…………どういう…………？ え、えつと…………つまり…………その…………え？ ま、待つて、落ち着いて考えないと…………でも、落ち着かないとつて思えば思うほど頭がこんがらがつちやう…………。

…………好き？ 木下くんが…………私を？ で、でも、今までそんな素振り…………昨日だつて、そんな風には…………。で、でも…………いつから？ 1ヶ月前？ 2ヶ月前？ それとも…………まさか、最初から…………とか？ ううん、だけど、そんなことつて…………。

…………つ！ も、もしかして、蘭ちゃんたちが困つてたのつて…………？ そ、そつか…………

知つてたんだ……じゃないと、こんなメツセージなんて送らないよね。

それじやあ……それじやあ……このメツセージが本当なら……私が昨日、木下くんにしたことって……！

「つ…………う…………！」

急に気持ち悪くなり、口を空いた手のひらで覆う。スマホを持つ手が、これ以上ないくらいに震えている。呼吸をするのが苦しくて、自然と息が荒くなる。

自分がなにをしでかしてしまったのか……ようやく気づいた。なんで、木下くんが怒っていたのかも。

……なんて酷いことをしてしまったのだろう。私の言葉が、どれだけ木下くんを傷つけてしまったのか想像もつかない。きっと、謝罪なんかでは全くもつて足りないくらいとても深い。

月のように大きく、途方もない罪悪感に押し潰されそうになる……そんなときだつた。

「——羽沢先輩？」

「つ!？」

背後からの何気ない呼び声。普段であれば、ただの挨拶のような調子の声。だけど、今私のにはそれが死神の声にすら聞こえた。

壊れた機械のようなぎこちない動きで、後ろを向く。

「き、木下くん……」

「すいません、スマホを忘れてしまいました。どこかで見ませんでした？」

「あ……その……」

「あ、それです。羽沢先輩が今持つてた奴です。先輩が見つけてくれたんですか？」
シラを切る暇すらなく、木下くんはそれを見つけてしまった。爆弾が表示されたままの、それを。咄嗟に電源ボタンを押して画面を消そうと思つたけど、私のと機種が違つて、すぐにはボタンの位置を探れなかつた。

「あ……！」

その一瞬の隙に、木下くんは私の手からスマホを取つてしまつた。木下くんの持ち物である以上、強引に保持することなんてできない。そんな思いがあつて、あつさりと受け渡しを許してしまつた。

木下くんの視線が、画面へと落ちる。もう間もなく、通知の存在に気づくだろう。
駄目……今、それを読んじや駄目……そう祈つても、止まつてくれない。止まつてくれる筈がない。だつて、この状況で読まない方がむしろ不自然なんだから。
そして、そのときが来てしまつた。

「つ……!?

……木下くんの目が、大きく見開いた。それをどうすることもできず、私は呆然と立ち尽くすだけだった。

……1秒……2秒……と沈黙が続く。その沈黙が、怖かつた。雷なんかよりも、ずっとずっと怖かつた。胃が痛い。まるで、ドラマの裁判の判決の場面かのよう。永遠に続くのではと錯覚するほどの苦しみの中、私は服の裾を握りながら判決を待つた。

……しばらくして、木下くんが井戸の底のように暗く、冷たい瞳をこちらに向けたとき、私は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなってしまった。

第10話 壊れかけの関係

スマホの画面に表示された上原先輩のメツセージの通知。羽沢先輩から受け取つたときには、もう画面は点灯していた。それはつまり、このメツセージを先輩も読んだということを意味する。

「……僕が羽沢先輩のことが好きであることが明示されている、この一文を。

「……見たんですか？」

自分でも驚くくらい、声が低かつた。もしその声が自分自身に向けられたら、怖いと思うくらいには。なのに、その声を……女子で、先輩で、想い人である羽沢先輩に対して発してしまつた。

「つ……」

返事が言葉として返つてくることはなかつた。代わりに、羽沢先輩は顔を俯かせたまま……微かに頷いた。

……表情は見えない。だけど、両手を前で重ね、両肩を痛ましくらいに縮こまらせていた。

今まで、そんな姿を見たくなくて頑張つていた筈なのに……そんなことは忘れたとで

も言うかのように、腹の底で煮えたぎったものが渦を巻き、胃が酸で灼けるかのように熱かつた。

「う、ごめんなさい……私、その……」

「なにに対する謝ってるんですか」

「つ……それは……」

どうしても、險のある言い方になつてしまふ。それでも完全な大声までは出さないのは、店の裏にいるからという最低限度のストッパーがかかつていてるからだ。本当であれば、今すぐにでも叫んでしまいたい。

さつきの、スマホを受け取るまでのやり取り。あれですらも、僕はかなりの無理をして平静を装っていた。紛れもなく、限界ギリギリだつた。

そこに、羽沢先輩への想いが知られるという事故が起きた。その瞬間、僕の中で留めていた色々なものが爆発してしまつた。もう自分でも、抑えようがない。

「なんで……僕に、相談なんかしたんですか……！　なんで、こんな…………！」

正当な怒りじやない。完全に八つ当たりだし、言つてることも支離滅裂だ。ただ、僕の心はもういっぱいいっぱいだつた。一度に受け止められる感情の許容量を越えてしまつた。とにかく、どのような形でもいいから発散したかった。

「羽沢先輩の答えはもう分かつてゐるのに……どうして、知つちやつたんですか……！」
知らなければ、知らないままだつたのに……！」

羽沢先輩はなにも悪くない。間が悪かつただけだ。スマホを忘れるのが悪いんだと、片隅に残つた理性が語りかけてくる。でも、そんなの知つたことではない。激情という名の拳で理性を握りつぶし、子供のように喚き散らす。

「……つ！　なんで、黙つてるんですか……！」

謝られても苛つく。静かにされても苛つく。もう、なにをされてても苛ついてしまう。今の僕はどうしようもなく子供で、錯乱してて……みつともなかつた。

怒りに任せて、沈黙したままの羽沢先輩に詰め寄る。なんて言つてほしいのかも分からなかつたが、とにかく黙つた状態なのが不快だつた。

……だつたのだけど、近づいたことである異変に気づいてしまつた。それは、僕の心を急速に冷やすのに十分すぎるほどの異変だつた。

「つ……ぐすつ……うう……つ、ひつ……く……う」

「……つ！」

嗚咽。あの羽沢先輩が嗚咽を漏らしていた。最初はすすり声だけだつたのが、やがて声が大きくなり、ポロポロと顔から零が落ちては床を濡らし始めた。

それを見た僕は、あまりの衝撃にその場で固まつてしまつた。

「う、うめ……つ……ごめん、なさい……！ う……つ……ごめ……なさい……つ……！」

羽沢先輩は両手で口を押さえ、肩を痙攣させる。声が震えており、大粒の涙が次々と落ちる。何度も何度も、謝罪の言葉だけを繰り返す。見てるこっちが苦しくなつてくるほど、痛ましい光景だった。

……怒りは、完全に霧散してしまった。そして残つたのは、羽沢先輩を泣かせてしまつたという、死刑でも足りないほどの罪悪感だけだった。

「す、すいません、羽沢先輩……！ ほ、僕、そんなつもりじゃ……！」

「違うの……ぐすつ……木下くんはなにも悪くないの……！ ごめ……なさい……私が……私が全部、悪いのに……つ……卑怯だよね、私……！」

とにかく泣き止んでもらおうと、ハンカチを持つていらない僕は代わりにテーブルの上のティッシュを何枚か取り、小さく畳んで差し出す。しかし、一向に受け取つてくれる気配はない。ティッシュを持つた僕の手が、所在なさげに宙に浮く。

こちらから無理に拭うことも考えたものの……今の弱々しい気配の羽沢先輩はガラス細工かのようで……少しでも触れたら、壊れてしまいそうで……手を動かすことが、できなかつた。

……泣かせたかつたわけじゃない。謝つてほしかつたわけでもない。ただただ、僕が

やり場のない感情をぶつけてしまつただけ。僕の心が弱かつただけ。その結果が……これだ。

羽沢先輩にだつて心の許容量があることを考慮もせずに当たり散らして、追い詰めて……最低だ、僕。こんなのは、羽沢先輩の気持ちに関係なく、付き合う資格なんてないじやないか。

羽沢先輩が涙を零している間、僕はなにもできなかつた。ただ側で、自己嫌悪に苛まれながら、意味があるのかも不明な慰めの言葉をかけることしかできなかつた。

結局、なにやら様子がおかしいことに気づいたらしいマスターが待機所にやつてきて、場を取めてくれるまで、その状態が続いた。

羽沢先輩が一旦自室に引つ込んだ後、マスターの娘を泣かせた僕は激しい非難を受けることを覚悟してたけど、そんなことはなかつた。マスターはコーヒーを一杯出してく れただけで、なにも聞こうとしなかつた。そしてその顔は、穏やかだつた。

その意図は掴みかねたけど……相変わらずコーヒーは温かく、美味しかつた。それが今僕の心の醜さを浮き彫りにしているようで、却つて辛かつた。

その後、僕は再び羽沢先輩と話す勇気が持てず……マスターに挨拶だけして店を去るのであつた。

……なんで、涙なんか流しちゃったんだろう。お父さんに促されて自室に戻つてしまつた私は、ベッドの上で膝を抱えて座りながら、自分を責め続けていた。

全面的に、私が悪いのに……あそこで泣いちゃうなんて……私はズルいよ。まるで、木下くんが悪者みたいにしちやつて……。あのとき、泣きたいのは木下くんの方だつた筈なのに、あんな風に困らせちゃつて。涙こそ止まつたけど、流した量に比例して、罪悪感は増すばかりだ。

木下くんの怒りは、正当な権利だつた。木下くんの想いに気づかなかつたのもそうだし、気づかずに恋愛相談をしてしまつたのもそうだ。

それが、どれほど辛い立場だつたのか……想像するだけでも、胸が張り裂けそうだつた。さつき、大声を出さなかつた木下くんはすごいと思う。私だったら……自信、ないかも。少なくとも、泣き出していたとは思う。事実、加害者側なのに泣いてしまつたのだから。

どうやつて、償えればいいんだろう。どうすれば、許してもらえるんだろう。

許してもらおうなんて考え方自体、おこがましいのかもしれない。でも、やだよ……こんなに仲良くなれたのに、おしまいだなんて。嫌われたくない……ないよ。

側に置いてあつた自分のスマホを取つて、写真のアルバムを開く。何度かの操作を経て、目的の写真を表示する。それは、一昨日撮つた内の1枚。調査用に撮つたスイーツの写真とは別の、自分用の1枚。そこには、木下くんが写つている。

3店目で撮つたものだ。木下くんがコーヒーのカップに口を付けてる瞬間を狙つて横から撮つたもの。写真の中の木下くんは、撮られる寸前にカメラに気づいたのか、目を点にしていた。スイーツの調査に來てたのに、コーヒーの味まで調べようと少しづつ飲んでは無言になつてたのがおかしくて、思わず撮つてしまつたのだ。

この写真を見てるだけで、不謹慎だと分かつていても頬が緩み、顔に熱が籠まる。心に、僅かばかりの余裕が戻る。どうしても……目が離せなくなる。

……私は、なんて鈍いんだろう。馬鹿なんだろう。どうして、加藤くんに告白されたときに気づけなかつたんだろう。どうして、木下くんに相談したくなつたときに気づけなかつたんだろう。そうすれば、こんなことにはなつていなかつたのに。

後輩であることを忘れちゃうくらい、頼りになる男の子。とても真面目で、頑張り屋さんの男の子。心配で放つておけなくて、ついつい支えちゃう男の子。側に居てくれるだけで、安心する男の子。

「つ……そつか、私……」

お友達だと……ずっと思つていた。でも、そうじやなかつた。そうじやなくなつてい

た。そのことに、今になつてようやく気づいた。

「……好き」

ストン、と胸に落ちる心地だつた。ずっと足りなかつたパズルのピースを埋めるように、その言葉はじんわりと私の胸の内に溶け込んだ。

考えてみれば、簡単な話だつた。例えば、カツプルシート。あのときは恥ずかしさはあつたものの、あれだけ密着してしまふ座席にも関わらず、すんなりと木下くんを受け入れていた。

もし、あれが加藤くんだったとしたら……彼には申し訳ないけど、きっと一般の席が空くまで待つていたと思う。

その違いが、明確に答えを指し示していた。相談のときには木下くんの顔が思い浮かんだのはきつと……本心を知つていた無意識からの警告だつたのかもしれない。本当にそれでいいのか、と。

最初は、普通のお友達と思っていた。それは、間違いない。でも、いつの間にか……お友達として好きという感情の中に……僅かに、一欠片だけ……異性として好き、という感情が混じり始めていたのだ。そして、それは日に日に大きくなつていつた。ところが、私はその変化に気づけなかつた。

クイズ番組で、写真の一部が少しずつ変化するタイプの問題がある。あれと一緒にだ。

変化前と変化後を見れば違いは一目瞭然なのに、変化している間、その場所に意識が向いてないと、なにが変わっているかが全く分からぬ。そんな感じで、ずっと焦点がズレていた。

……その焦点が、先程の件でぴったりと合つてしまつた。あまりにも遅く、残酷なタイミングで。

「…………つ、でも…………私なんか…………駄目、だよ…………資格、ないよ…………」

心に温かいものが灯りそうになつたその瞬間、私はそれを消し去るようになぶりを振つた。喜んじや駄目だと、己を強く戒める。その好きな人になにをしたのか、忘れたのかと。

膝をより強く抱え、組んだ腕の中に顔を埋める。視界が真っ暗になつた。

自分の想いを自覚もせぬまま、考えうる最悪の方法で木下くんの心を抉つてしまつた。そんな私が、木下くんの隣に立つていい筈がない。彼を支えられる筈がない。

きっと、私なんかよりも木下くんに相応しい人が居るに決まつている。少なくとも、私は相応しくない。大人しく、身を引くべきだ。……それが、最善だ。

「つ…………う…………ひつく…………ぐす」

だから…………だから…………お願ひだから…………『嫌だ』…………なんて我儘、言わないで。

「ああ…………つ…………！…………う…………あ…………つく、う…………ツ！」

なんで……つ……また、涙が……そんな資格、ないって言つてゐるのに……！
止まらない。堰が切られたようにならぬが止まらない。洪水のように溢れては、服を濡らす。理屈で抑え込もうとした感情が止め処なく噴き出す。

自業自得だとか、それが木下くんの為だと言い聞かせても、感情が納得してくれない。自覺するまでに恐ろしいくらいの時間がかかつた癖に、往生際が悪い。

嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ……！　なんで、私、こんな……鈍感なの……つ！　もつと、早く気づきたかった……！　そしたら、今頃……！

……結局、私は泣き疲れて眠つてしまふまでの間、ずっと自己嫌悪で蹲つたままだつた。シフトに入ることも忘れ、夕飯も食べず、その日はずつと部屋に閉じこもつてしまつた。

部屋から出て、ちゃんとご飯が食べられるようになるまでに……次の日の夕方までかかつてしまふのであつた。

*

あの日……私が木下くんの気持ちを事故で知つてしまつて以降……私たちの関係は、大きく変わつてしまつた。

残りの夏休みの期間中、何度かシフトの時間が重なつた。一緒に働いている間、表面上はこれといった問題は起きなかつた。でも、それだけだつた。普段の私たちを知る人

から見たら、問題だらけだつたと思う。

お互い、顔をまともに見れなくなつた。正確には、木下くんが顔を合わせてくれなかつた。羞恥心によるものではない。戸惑いと、拒絶と、後悔。そんな感情が複雑に入り混じつているのがすぐに分かつた。だつて、私も同じようなものを抱えているから。口数が減つた。というより、最低限の会話しかできなくなつてしまつた。シフトに入るときの挨拶とか、注文の伝達や料理が完成したときの連絡とか。仕事に支障が出ない程度の事務的なやり取りしかしなくなつてしまつた。

なにか声をかけようと思つても、ごちや混ぜになつた負の感情が言葉を封じてしまふ。また、傷つけてしまうかもしれない。今度こそ、完全に拒絶されるかもしれない。木下くんの本心を知るのが怖くて、声が出なくなつてしまつた。

話せないならばと、チャットツールを利用しようとしたこともある。でも、媒体が変わつただけで、結果は同じだつた。どんなに慎重に言葉を選び、丁寧な文章を打ち込んでも、恐怖が消えることはなかつた。送信ボタンを押すことができず、今も文章は残つたままだ。

言うなれば、膠着状態。お互い、本心では曝け出したいことがたくさんある筈なのに、口を噤んだまま。ちゃんと話し合うべきなのに、心を閉ざしたまま。

それは、息が詰まるような時間ではあつたけど……同時に、私は安堵もしていた。木

下くんに非難されていないことに。一緒に、仕事ができていることに。

そうしている間にも時間は過ぎていく。1日、2日と経つて、夏休みが終わろうとする。しかも、最後の方は宿題やら『ガルスパ』に向けた練習やらで大忙しで、木下くんとの一緒のシフトがほとんどなくなってしまった。

そして、私たちのすれ違いによる弊害は、確実に大きくなっているのであつた。

*

8月31日。始業式前日。私たちは『C i R C L E』で、夏休み最後の練習に臨んでいた。『ガルスパ』に向けて、音合わせの練習を繰り返す。

そんなとき、不意に音が止んだ。止めたのは、蘭ちゃんだった。

「——つぐみ！ また音が遅れてる！」

「び、びめん、蘭ちゃん……」

身を縮こまらせてしまう。始めたばかりなのに、注意されるのはこれで3回目だ。明らかに多すぎる。あの日以降、日を重ねるにつれて、ミスの頻度は上がり続けていた。『ガルスパ』まで、そんなに時間は残されていない。本番に向けて、少しでも完成度を高めないといけない時期だ。なのに……私の演奏は精彩を欠く一方だった。

もちろん、個人での練習はしている。夏休みだったのと、普段よりもずっとたくさん練習していた。なのに……木下くんとのことが頭の片隅に残って、集中しきれない。ふ

とした拍子に木下くんとのことを考えてしまって、気づいたら演奏が遅れているのだ。

「さつき、キーも少し間違えてたし……どこか悪いの？」

「ううん、そうじやないの……本当に、ごめんね」

一転して心配そうにこちらを窺う蘭ちゃん。その姿を見ていると、申し訳なくて仕方がなかつた。具合が悪いわけじゃない。でも、問題を抱えているのも事実だつた。

「つぐ、ほんとに大丈夫？ もしかしたら知らない内に疲れてるのかもしれないよ？ なにか、あつたんじやない？」

次に声をかけてくれたのはひまりちやんだつた。彼女の声音はとても優しく、本気で私を気遣つているのが分かる。その気持ちは、とても嬉しかつた。思わず事情を漏らしてしまいそうになるくらい、嬉しかつた。

「だ、大丈夫……！ 今度こそ、ちゃんとできるよう頑張るから！」

でも、言えない。『Afterglow』のみんなにだけは言えない。特に、ひまりちゃんには。もし事情を知つたら、ひまりちゃんはきっと自分を責めちやう。ひまりちゃんだけ内緒にしたとしても、どこかで漏れてしまふかもしれない。だから心苦しかつたけど……話せなかつた。

「うーん、そつか。でも一応、次で早めの休憩にしようか」

またもや氣を遣わせてしまつた。後ろめたさを感じつつも、再度キーボードに指を添

える。今はとにかく、目の前の練習に集中しないと。

その後、私はなんとかみんなの演奏に喰らいつけるようにはなったものの、出来がよくないことに変わりはなかつた。

……このままではいけない。そう思うも、依然として解決策は見えてこなかつた。

*

練習後、各々の用事があつた為、『C i R C L E』で解散となつた。みんなの姿が見えなくなつたのを確認した後、1人になつた私は肩を落とし、溜め息をつく。

——と思つたら、突然後ろから誰かが抱きついてきて、肩を跳ね上げてしまつた。

「ひやつ！」

「つぐー、一緒に帰ろー」

「も、モカちゃん!? 用事があつたんじゃ……」

「ふつふつふく、トリックでしたー」

身動きできないので、顔だけを後ろに向ける。するとそこには、不敵な笑みを浮かべたモカちゃんが居た。わざわざ嘘についてから私の所に戻つてきたみたいだけど……なんでだろう？

本音を言えば、1人で帰りながら色々考えたいという思いも少なからずあつた。でも、理由は分からぬいけど、そうしてまで一緒に帰ろう行つてくれるモカちゃんを無碍

にできるわけがない。私はすぐに頷いた。

2人横に並んで道を歩く。モ力ちゃんは練習前にやまぶきベーカリーで買つたらし
いパンを歩きながら食べていた。

「はむはむ……いや、練習終わりのパンは最高だね！」

「あはは、モ力ちゃん、本当にやまぶきベーカリーのパンが好きなんだね」
「それはもう、古今東西のパンの中でも、至高の美味しさだからね！」

モ力ちゃんの言い回しに笑みが溢れる。マイペースなモ力ちゃんとの会話で、気持ち
が少しだけ楽になる。やつぱり一緒に帰つてよかつたかも。

……そう、思つてたんだけど、次のモ力ちゃんの一言で私は顔を強ばらせることにな
る。

「それで、つぐはゆー君となにかあつたのー？」

「え……」

ぎくり、と胸が締め付けられた。再度モ力ちゃんの方を見てみると、既にパンは食べ
終わつていて、いつもの緩んだ顔でこつちを見ていた。でも、幼馴染の私にはすぐに分
かった。その瞳が真剣味を帯びていることに。

「ど、どうして……」

本来ならば、ここで知らんぷりをするべきだつた。でも、一足飛びで悩みの核心に触

れられてしまつた私は、動搖のあまり団星であることを認めてしまつた。

「この前つぐのことに行つたときー、なんだか2人の様子がおかしかつたからー。こう……余所余所しい？」

う、と呻き声を漏らしてしまつた私を許してほしい。だつて、あまりにもドンピシャだつたから。意識的に作つていた笑みが崩れて、顔が曇つていくのが分かる。

そういうえば、前に加藤くんのことで相談したとき、モ力ちゃんは意味深なことを言つていた。もしかしたら……私の気持ちに、気づいてたのかも知れない。

「モ力ちゃんは、すごいね……」

「それはもう、名探偵モ力ちゃんですからー。それで、なにがあつたのかなー？ モ力ちゃんが聞いてしんぜようー」

その微笑みに、私は白旗を上げた。ううん……本当は、誰かに聞いてほしかつたのかもしれない。『Afterglow』のみんなには言えないと思つてたけど、モ力ちゃんなら、こういう大事なことは絶対に他人に漏らさないだろうしつと大丈夫。

観念した私は、モ力ちゃんに全てを白状した。事故で木下くんの気持ちを知つちやつたこと、自分の気持ちを自覚してしまつたこと。でも、自分にそんな資格はないと思つていること。なにもかも全部話した。

それを、モ力ちゃんは口を挟まずに、時々相槌を打ちながら、最後まで聞いてくれた。

話し終わつたとき、モ力ちゃんは目を細めて、うんうんと頷いていた。

「……そつかー。ゆー君が好きなルートかー。青春だねー」

「やつぱり、モ力ちゃんはあるとき気づいてたんだね……」

「好きだからーが8で、意識してないーが2くらいだつたかなー。もちろん、8の方に賭けてたよー。大当たりー」

「……あはは、8の方なのに大当たりなんだ?」

苦笑いになつてしまふ。ものすごく真面目で深刻な話をしているのに、モ力ちゃんと話してると不思議と空気が弛緩してしまふ。だからか、なんでも淀みなく話せちゃう。「うーんと、つぐは、ゆー君のガールフレンドになりたくないの一?」

「ガール……っ!? お、お付き合いつことだよね……その、分からないの」

聞き慣れない単語に一瞬鼓動が跳ねるも、思つたままの言葉を口にする。

「やつぱり……嬉しいよ? そういう風に思われてるのは。でも、私なんて……」「さつき言つてたー、資格がないつことー?」

「……うん」

結局のところ、そこに行き着く。木下くんを知らない内に追い詰めてしまつた。あんな怒気を孕んだ表情を見せてしまうくらいに。今でもあの顔は、鮮明に思い出せる。また、あれをやつてしまふかも知れないと思うと……。

「でもさー、資格があるかどうかなんて……付き合いたいかどうかとは関係ないようなー?」

「え? そんなこと、ないような……」

「だつて、あたしはお金がピンチなときでも、やまぶきベーカリーのパンが食べたくなるときはいっぱいあるよー?」

「あ……」

モ力ちゃんの例えに、ずつと混乱していた心の一部が一気に整理された。水と油のように、綺麗に切り分けられた。

……切り分けられた、けど。

「……うん、そうだね。好き……だとは思うよ。その、そういうことになれたら、とつても嬉しいとも思う。だけど、資格がないことには変わりはないよ……」

どれだけ欲しくても、お金がなければパンは買えない。それと同じだ。

「じゃあーさ、資格をゲットしちゃうのはどうかなー?」

「えつと……ゲット?」

「お金がないなら、バイトで稼ごーう。資格がないなら合格目指して勉強しよーう。

……漫画とかもあるでしょー? 何回負けても、不合格になつても諦めないでー、つぐつてつぐつてつぐりまくつてー、最後には勝利くつて感じでー」

ええつと……つまり、今からでも遅くない……って言いたいのかな？ そう、なのかな……まだ、やり直せるなんて都合のいいこと、あるのかな……。疑念は晴れなかつた。

「……ほんとに、そう思う？」

「もちろんですともー。つぐは今まで『Afterglow』でなにがあつたかー、もう忘れちゃつたのかなー？」

「…………あ！」

そういうえば……1年前……みんなが蘭ちゃんの成長に置いていかれちゃつて、焦つてたことがある。いつも通りがいつも通りじやなくなつたような気がして、蘭ちゃんと一緒に居てもいいのか、不安になつたことが。

でも、糺余曲折はあつたけど、最後には乗り越えて……私たちの新しい、いつも通りが生まれた。今となつては、懐かしい思い出。

「……そつか。 そうなの、かも……」

意外と、なんとかなつちゃうのかもしれない。実は、今抱えている問題も、後になつて振り返つてみれば、ただの思い出になつているのかもしれない。

一見どんなに解決不可能に見える問題も……そんなこと、全然ないのかもしれない。まだ……手遅れじやないかもしれない。

「……よし」

疑念が完全には晴れたわけじゃない。けど……なんだか、モ力ちゃんの話を聞いている内に元気が出てきた。うん……そうだよね。いつまでも悩んでても、しようがないよね。

「……ありがとう、モ力ちゃん。資格のことは……まだ迷ってるけど……とにかく、1回木下くんとちゃんとお話ししてみるね！」

「……うん。ファイト、つぐ」

話の終わり際……モ力ちゃんが見せてくれた柔軟な笑みは、慈愛に満ちていて……ちゃんと見守ってるから、つて言われているようだつた。とても心強くて、勇気が出てきた。

明日……時間は少しズレてるけど、木下くんとシフトが重なつていて。そのどこかでいいから、絶対に直接話し合う約束をしよう。

そんな決意を秘めつつ、残りの帰り道をモ力ちゃんと一緒に歩くのであつた。

* * *

始業式となつてしまつた。僕と羽沢先輩の問題に解決の兆しがないまま、新学期を迎えた。

始業式と言つても、なにか特別なことがあるわけじやない。全校集会、宿題の提出、模試の日程などの細々とした連絡。その程度のものだ。

だからH.R.の間も、僕の意識は羽沢先輩のことへと向けられたままだつた。

あの日以来、先輩との関係はぎくしゃくしたままだつた。先輩を泣かせてしまつた後ろめたさ、そして再発を恐れるが故に、僕は先輩に話しかけることができなくなつてしまつた。なにか会話のきつかけが生まれそうなときでも、事務的な会話に留めて逃げてしまつた。

羽沢先輩と一緒にシフトが、酷く憂鬱だつた。それではずつと、少しでも長く一緒に居たいと思っていたのに、今となつては少しでも早く終わつてほしいと願うようになつてしまつた。

今、羽沢先輩からは僕はどういう風に見えてるんだろうか。そう、つまり……僕のことをどう思つているんだろう？ 過程はどうあれ、僕の気持ちを知つた羽沢先輩は、それをどう受け止めているのだろう？

羽沢先輩と過ごした時間……間違いなく、楽しかつた。それは今でも確信を持つて言える。先輩も、少なくとも友人として信頼を寄せてくれていたのは確実だ。その一方で、異性として意識されていなかつたのは、知つての通りだ。

僕の気持ちを知つて……その認識に、なにか変化のようなものはあつたのだろうか。

ほんの少しでも、そういう想いが混ざつてはくれなかつただろうか。

……いや、止めよ。こんなこと未練がましいこと。あんなことをしておいて、未だになにかを期待するなんて、最低だ。これ以上、羽沢先輩になにかを求めるなんて間違っている。

こんな子供の癪癩を起こしてしまうような人間より、もっと相応しい人が居る筈だ。それが加藤とやらなのかは分からぬけど、他に誰かきっと居る。

……いつそのこと、バイトを辞めてしまおうか。このままだと、羽沢先輩を苦しめるだけだ。

いや、でも、羽沢先輩との関係が悪化したから辞めるなんて、あまりにも無責任だ。代わりの人が居ない段階で抜けたら、シフトが崩壊する恐れがある。それに、元々人手不足の解消の為に雇われたのだ。羽沢先輩の負担を考えると……うん、駄目だ。

よっぽどの理由がない限り、突然辞めるなんてことはしてはいけない。そう、どうしても辞めなければいけないなにかが起こらない限り。

「それじゃあ、最後の連絡です。一部の校則が変更となつたので、該当する部分の生徒手帳の新しいページを今から配ります。ちゃんと、入れ替えて確認しておいてください」担任の声が耳に入る。どうやら、校則が変わつたらしい。前から回されてきた数枚の新しいページを受け取る。

変わつたと言つても、自分になにかが影響することはないだろう。そう思いながらも、一応は内容に目を通しておく。

……結果的に、それがよかつたのか、悪かつたのか……答えはない。

「あ……」

その咳きにどのような感情が籠もつていたのか、自分でも分からなかつた。ただ1つだけ確かなことがある。

それは……”よっぽどの理由”が、そこに書かれていたことだつた。

HRを終え、掃除を終え、生徒会の仕事を終わらせた私は、ショッピングモールに寄つてから、自宅に向かつていた。

私の手には紙袋の紐が握られていて、その中には先程ショッピングモールで購入した商品の包みが入つていた。中身は、焙煎されたコーヒー豆とクッキーの詰め合わせ。せめてものお詫びにと、用意したものだ。

最初はケーキにしようと思つたのだけど、以前の調査のときにはスイーツはしばらくはいらないと言つてたのを思い出し、甘さが控えめで、日持ちするクッキーに切り替えた。

緊張する。喉が渴くのは、暑さだけのせいじゃないと思う。道中、頭の中で木下くんに話しかけるときのイメージトレーニングを繰り返す。

本当のことを言つてしまふと……なにを話したいのかはちゃんと纏まつてない。謝罪、励まし、償い……断片的には思い浮かぶけど、どこか違和感を覚えるのも事実だつた。もつと、大事なことが抜け落ちていてるような、そんな気もする。

でも、そんなの関係ない。きっと、話している内に纏まつてくると思っておく。とにかく、今は木下くんとちゃんと向き合つた形で話したい。

お店が見えてきた。シフトの時間はまだだけど、木下くんはもうすぐ開始だつたと思う。今なら、おそらくは待機所に居る。

裏口に辿り着く。裏口の扉……いつもなら簡単に入れるのに、今だけは重い鉄の扉のように見えてくる。ドア全体が拒絶の意思を放つているかのようだ。

ただ、ドアノブを回すだけなのに……それがどうしようもなく、緊張する。

「すー……はー……」

胸元に手を当てて、深呼吸。大きく吸つては止めて、ゆっくりと吐いていく。それを何度も繰り返す。どれほど効果があつたかは分からなければ、多分、きっと、ちょつとくらいはよくなつたような気がしなくもない。

「よ、よーし……！」

私だつてシフトはあるのだし、いつかは開けなくちゃいけないんだ。そうやつて自分を奮い立たせて、いよいよドアノブに手をかける。

そして、臆病風に吹かれてしまふ前に一気にドアを開けた。

「お、おはよう、木下くん…………あれ？」

居なかつた。待機所のどこを見渡しても、木下くんの姿はなかつた。更衣室のカーテンも開いたままだ。視界を妨げるようなものはなにもない。つまり、本当に木下くんはここには居ないということになる。

……遅刻？ でも、そういう事務連絡なら今でもちゃんとしてくれる。スマホを確認してみても、そんな連絡はなかつた。

ならば早めにシフトに入つてゐるのかとキッチンを覗いて見るも、お父さんしか居なかつた。

「ああ、つぐみ。お帰りなさい」

「ただいま。えつと、木下くんつてもうすぐシフトの時間だよね？ お父さんは、なにか聞いてる？」

「……それなんだけどね、ちよつと言つておかないとけないことがあるんだ。こつちで話そつか」

お父さんはオーダーがないことを確認してから、私を待機所に連れて行く。えつと、

なんだろう？ 風邪かなにかでお休み、つて雰囲気ではなさそうだけど。

「木下君ね、実は30分くらい前まで来てたんだ。そしたら、話があるつて言われてね」相槌を打つと、お父さんは一旦そこで言葉を切る。なんだか、すごく話しづらそうだ。その場でじつと続きを待つけど、一抹の不安を覚えつつあつた。無意識の内に、紙袋の紐を握る力が強くなる。

「……木下君の通っている学校、校則が変わつてね。バイトが禁止になつたそうなんだ」「…………え」

今……なんて……？

「——だから、バイトを辞めることになつた。事情が事情だからね。今日からもう、木下君をシフトから外すことにしたよ」

……当たり前だと思っていたものが、当たり前じゃなくなつた瞬間だつた。それだけは起きないだろう、と高を括つていたことが、現実になつてしまつた。

バサリ、と紙袋が床に落ちた。衝撃で紙袋が倒れ、丸い形をしたクッキーの缶がコロコロと不規則な軌道を描いて転がつていつた。

第11話 想いを伝えるのに必要なこと

耳に当てているスマホからコール音が繰り返し流れる。電話をかけている相手はもちろん木下くん。これで、3回目の発信となる。お父さんから木下くんが辞めることを聞いた直後、自室に直行し、前みたいにベッドに座りながら電話をかけ続けていた。胸の内に宿るのは、焦燥と後悔。木下くんに出てほしいという焦りと、こうなるならもっと早く決心すべきだつたという後悔。膠着状態という、これまでの現状に甘えすぎていた。

まだ、手遅れではないと思う。でも、そのタイムリミットは確実に迫っているような気もしていた。

早く出て……とコール音から通話に切り替わることを期待するも、変化はなし。そうこうしている内に、またもや留守電サービスに繋がってしまった。溜め息を吐いてから、メッセージを残さずに電話を切る。

無視、されちやつてるのかな……3回も留守電になっちゃうなんて。

……ううん！ ここで弱気になっちゃ駄目……！ もっと前向きに考えないと。もしかしたら、移動中で気づいていないだけかもしれないし、スマホの近くに居ないだけ

かもしだれない。

もう悩むのは止めたんだから、しつかりしないと。

もう1回だけ、電話をかけてみよう。それで出なかつたら、シフトの後にかけ直そう。そう思い、履歴から再発信しようとする。

——そして発信のボタンを押す直前、着信のメロディと同時に画面が切り替わった。あまりの不意打ちに変な声を漏らすも、発信主に『木下くん』と表示されているのを見て、慌てて通話ボタンを押した。

「も、もしもし……！」

『……羽沢先輩』

声が聞こえた。電波が少し悪いのか、やや掠れてるけど……ずっと聞いたかつた声が。電話越しに聞こえる声は心なしか、元気がないように思えた。

『ごめんね、何度もかけちやつて……忙しいのかと思つて、後でにしようと思つてたところだつたんだけど……』

『いえ、僕が気づかなかつただけです、すいません。別に、忙しくなんてないです。……忙しくなる筈の用事も、なくなつてしまひましたから』

『あ……。あ、あの、木下くん……！ バイトが禁止になつたのつて……!?』

『……ええ、本当です。悩んだんですけど……やっぱりバレたときに店に迷惑をかけ

ちやうと思いまして……』

「……そつか」

……疑つてたわけじやないけど、嘘ではないと分かつたことで、声のトーンが落ちてしまふ。流石に、これは引き止めるることはできないし、どうしようもない。

『羽沢先輩……ちゃんと言えてなかつたので、今言います。……すいませんでした。スマホを置いてつた僕が悪いのに、八つ当たりなんてしてしまつて』

「え……？　う、ううん……！　そんなことないよ！　悪いのは私の方で……っ！」

『いや、僕が悪いんです。そもそも、他人の気持ちを察するなんて無理に決まつてるのに、それにショックを受けたのがいけなかつたんです』

「あ……そのことなんだけど……！　あれから考えたんだけど、一回どこかでお話がしたいなつて思つて……」

『……別にいいですよ、そんなに気を遣わなくて。もう、ちゃんと割り切つてますから』言葉の節々から拒絶の意思を感じる。……ううん、ちょっと違う。上手くは言葉にできないくけど、なんていうのかな……こう、まるで……最初から受け答えの内容が決まつているかのような雰囲気。

粘り強く、お話をしたいと訴えかけても即座に断られてしまう。暖簾に腕押しといった感じだ。

どうすれば、お話を応じてくれるんだろう？ 会話をする傍らで、どうしようと頭を悩ませる。

『先輩。実は、もう1つだけ謝らないといけないことがあるんです。これは、この前のこととは関係ないんですけど……』

その途中……木下くんの声が割り込んできて、思考が中断されてしまった。それを頭の片隅に留めつつ、意識を電話の方へと戻す。

『……僕、最初から羽沢先輩が目当てでバイトを始めたんです』

「え……う、あ……わわ……！」

知らない内にスマホを持つ手の力が緩んでいた。手の中から滑り落ちそうだったのを慌てて握り直す。……心臓が、バクバクとうるさく鳴り始めていた。

思いもよらなかつた告白。頭の片隅に留めていたものは、きれいさっぱりと彼方へと消えてしまつた。代わりに、頭の中にはぎつしりと疑問符が詰め込まれていた。

バイトで出会う前……いつ、どこで会つたのか……どうして、お店のことが分かつたのだろうか、と。

「で、でも……面接のとき、初対面だつたよね……？ お店にも、一度も……」

『その前にライブやつてましたよね？ それ、見に行つてたんです。そのことに気づいてたのは、青葉先輩だけでしたけど』

面接の前？　えっと…………あ！　もしかして、あの大きめのどこでやつたライブのこと？　ほ、ほんとに、あそこに……？　全然、知らなかつた……モ力ちゃん、すごい……。

『そのとき、一目惚れして……それで、姉が羽沢先輩の実家が珈琲喫茶だつて教えてくれて、応募したんです。……だから、不純な動機でバイト始めたんです。ストーカーなんですよ、僕』

「不純だなんて、そんなことないよ…………！」

“一目惚れ”という単語に一瞬でも顔を熱くしてしまつた自分を恥じつつ、間髪入れずに言葉を返す。

「木下くん、ずっと真面目だつたし、いつも言つてるけどすごい助けられてて…………！　そんな気持ち、全然知らな…………あ」

自らの失言に気づいて言葉を止めるも、どう考へても遅かつた。咄嗟の返しだつたせいか、大きな誤解を与えるニュアンスになつてしまつていた。

この言い方では結局、意識してないつて言つてるのと同じように聞こえてしまう。

……仮に、始めたときの動機がそうだつたとしても、最近の木下くんがお店のことを好きでいてくれて、その為に頑張つていることは知つている。本当は、そう伝えたかつた。

だけど、それは伝わってくれていなかつたようだ。

『ええ、そうですよね。分かつてます。だから……すいませんでした。もう、羽沢先輩には近づかないようにしますから』

「つ……待つて！ 聞いて！ お願ひ……！」

違う、そうじやないの。私が伝えたかつたことは、そうじやないの……！ お願ひ、まだ切らないで……！ 行かないで……だつて、私は……！

危惧していた誤解を与えてしまつたことを悔いつつも、必死に縋る。話を終わらせようとしている気配を感じ、なんとかして木下くんの気を引こうとする。焦燥と混乱の中、今までにないくらい猛烈に頭が回転する。

「あの、私……私ね……！」

結果、自らの想いを告げるようとした。好きだから、行かないでと。言つた後のことなんて考えていない。木下くんが話を聞いてくれるのであれば、なんでもよかつた。

「つ……私は……」

……でも、言えなかつた。呪いにでもかかつてしまつたかのように、その言葉を口にしようとしたら声が出なくなつてしまつた。

それは、未だ残る罪の意識のせい。それと、今の木下くんに告げたところで、こちらの想いがちゃんととは伝わらないのではないかという、確信に近い予感があつたから。

この場で断られてしまうのが怖かつた……というのも、あつたのかもしれない。

いずれにせよ、衝動的に告げようとした想いは、言葉にはならなかつた。

『……たしか先輩、もうすぐシフトの時間ですよね。そろそろ、切れます。……それで
は』

結局、私は木下くんを引き止めるることはできず……無情にも、通話は切れてしまうの
であつた。しばらくの間、スマホを耳から離すことができなかつたけど……これ以上な
にも聞こえてくることはないんだと悟つて、スマホをベッドの上に置いた。

「……どうしよう」

気持ちが沈む。底なし沼に落ちてしまつたかのように沈む。このままだといけないと分かつてゐるのに、解決の糸口が見つからない。

連絡先が消えたわけではない。電話番号も、チャットのお友達登録も未だ健在。だけ
ど、このままなにもしなかつたら、いずれは疎遠になつてしまふ。そんな気がした。

そんなの……嫌だ。こんな終わり方、したくない。諦めないつて決めたのに……なに
も思いつかない。

電話を通じて、分かつたことはある。木下くんは多分、今でも私が木下くんのことを
異性として意識していないつて思い込んでる。……そう思わせてしまったのは、私のせ
いだけど。

木下くんは、もう諦めちゃつてのかもしない……そう感じるような、会話だつた。だから、せめて……そうじやないんだと伝えたい。ちゃんと、好きだということは伝えたい。一緒に居てほしいって訴えたい。

それでなにが変わるのかは分からぬけど……それでも伝えたい。

……だけど、どうやつて？ 口に出して言えなかつたのは、さつきの電話の通りだ。チャットを使うというのは、今までのことを考えれば不誠実だ。

もつと他の形……本気の想いだと伝えることができて、かつ私が呪いにかからぬような形。それつて……なんだろう？

残り少ないシフトの時間までの間、うんうんと唸つてみたけど、答えは出そうになかつた。

*

木下くんが不在となつた中、シフトに入つた私はテーブルを拭きながら、想いの形について思い悩んでいた。

なにをしたいのかが分かつたので、気持ちこそ上向きになりつつあるものの、相変わらず名案は浮かばなかつた。

そんなとき、カラソカラソと入店を知らせるベルが鳴る。対応の為、一旦テーブル掃除を切り上げた。

「いらっしゃいませ……あ、蘭ちゃん」

「お疲れ、つぐみ。しばらくの間、ここ使わせてもらつていい?」

お客さんは蘭ちやんだつた。一旦帰宅してたみたいで、私服姿でトートバッグを肩から提げていた。そのトートバッグには、いくつかの荷物が入っていた。

「うん、席はまだ空いてるから大丈夫だよ。えっと、自習とか？」

「夏休み明けから自習とか、するわけないじやん。新曲作り、ここでやろうかと思つて」

そうなんだ。
あ、ごめんね。
こんなところで話し込んで、お席に案内するね。

比較的奥の方の作業がしやすそうな2人用の席に案内する。カウンターよりこづち

の方に物を広めやすいし
今はお客様もまばらだから大丈夫だな

作業の準備をしていた。

「はい、蘭ちゃん。新曲の方はどう?」

「ありがとう。新曲は……正直、ちょっと迷つてる。せつかくの『ガルスパ』だし、今までとはちょっと違う感じのテーマがいいとは思つてんんだけど……」

「新しいテーマ……うーん、なんだろう？」季節にちなんだものとか？

「それも悪くはないけど……まあ、色々考えてみるつもり。」
「この、ケーキセツトのズ

コットをお願い。飲み物はホットコーヒーで』

「ふふつ、かしこまりました」

注文を受け、それをお父さんに伝える。お父さんがコーヒーの準備をしている間、私はケーキをいつでも出せるようにしておく。

新曲かあ……そういえば、作詞だけだけど、去年にみんなでやつたつけ。最初、蘭ちゃんが考えた歌詞の意味が私たちに上手く伝わらなくて、戸惑つてたときのことだ。

あのときは、みんなでお泊りしながら話し合って、変わらないもの、変わったものを確認しあつた。

それで、新たないつも通りが生まれて……それを歌詞にした。当時の私たちの気持ちを、精一杯込めた結果……私たちの新しい曲が生まれた。そういえばあのとき、朝日が綺麗だつたなあ。

そんなことを思い返していたとき、ぴたり……と思思考が停止した。まるで、ずっと探していた商品の目の前を通り過ぎてしまつたような感覚。

新曲……作詞……気持ちを込めた……。それらの言葉を頭の中で反芻しながら、こてん、と首を横に傾げる。

出そうで、出てこない。もう答えは出ている気がするのに、それが言葉にならないもどかしさ。

「——あ！」

だけど幸い、今日の私の頭はなんとか答えを捻り出してくれたようだ。2、3回首を傾げたとき、突然閃いたのだ。濃い霧が晴れたように、はつきりとどうすべきかが見えた。燐つていた心が燃え上がり、四肢に力が入った。

「うん、うん……！ そうだよね……！」

このアイデアで間違いないと、何度も何度も自分で同意する。ようやくアイデアが手に入つたからか、狂喜乱舞したとしても物足りないほどの興奮が湧き上がる。仕事中だけど、もう我慢できない。私はまっしぐらに蘭ちゃんへ駆け寄つた。

「蘭ちゃん！ ちよつといい！」

「え、あ、つぐみ……！ なに、急に……」

作詞の為と思しきノートを広げ、手の中で鉛筆を遊ばせていた蘭ちゃん。突然私が大声で隣まで来たからか、目を白黒とさせていた。

私は蘭ちゃんに落ち着く暇も与えずに、己の興奮に促されるままに強く詰め寄る。

「お願ひがあるの！ もう、一生のお願い！」

「ど、どうしたの……？ ひまりみたいなこと言つて……」

「私はこれが1回目だからひまりちゃんとは違うよ！」

「わ、分かつたから落ち着いて。それで、お願ひってなに……？」

熱意が通じたのか、蘭ちゃんはすぐに折れてくれた。未だ困惑しているのか、眉をひ

そめているけど。

承諾を得た私は、光の速さでお願いを口にした。

「あのね、新曲の作詞、私にやらせてほしいの……！」

そう、きっと……私の大好きな音楽を通してならば、伝えられる。だから、木下くんへの想いを込めた曲を作ろうと思つたのだ。これならきっと、上手くいく。

「……は？」

一方で、それを聞いた蘭ちゃんは、呆気にとられた様子で顔をポカーンとさせていた。まるで、鳩が豆鉄砲を食らつたような顔だった。

* *

「ゞ、ゞめんね、蘭ちゃん。いきなりあんなこと言つちやつて」

「まあ、別にいいよ。つぐみが突拍子もないこと言い出すのは、いつものことだし」

蘭ちゃんのもとへ押しかけてから数分後。蘭ちゃんに宥められて我に返つた私は、肩を丸めながら、未だに冷めない顔の火照りを感じていた。

……うう、失敗しちやつた。お店の中で、あんな大声出しちやうなんて。お客様が少なくてよかつた。……本当はよくないけど。

私は今、蘭ちゃんの対面の席に座つている。事情を知つておるお父さんが、さつきの私の様子からなにか察したようで、早めの休憩にしてくれたのだ。テーブルには、2人

分のコーヒーヒーが置かれている。蘭ちゃんの方にはケーキもセツトで。

「……それで？　どうして急に作詞なんて？」

「えっと、それは……」

蘭ちゃんの問いに、私は言葉を詰まらせる。事情を話すのが嫌なのではない。ただ純粋に、作詞の動機を語るのが恥ずかしいのだ。告白の為に、作詞がしたいだなんて……よくよく考えたら、とんでもないことをしようとしている。

「……言わないと、駄目？」

「駄目。大事な『ガルスパ』の新曲なんだから。つぐみの一生のお願いでも、簡単には承諾できない」

「だよね……うう」

……どういう風に説明しよう。ストレートに説明した方がいいのは分かつてること、それは私の精神衛生上よろしくない。きっと、羞恥心で死んでしまう。だから、なるべく直球でありつつも、婉曲的な言い回しで説明したい。

「つまり、ね……歌を通して、ちょっと伝えたいことがあつて……」

「なにを？」

「う……その、よく使われてるテーマだとは思うんだけどね？」

「ほら、あの……」

言葉を捏ねくり回しながら、時間を浪費する。言おうとすればするほど顔の温度が上

昇し、頭がクラクラする。ちゃんと言えるか、不安になつてきだ。

……そのとき、蘭ちゃんの方から口を開いた。

「もしかしてだけ……木下となにかあつた?」

「ええっ!? な、なんで分かつたの……!?

「なんであつて……。つぐみ、鏡で自分の顔見た方がいいよ」

苦笑いを浮かべる蘭ちゃん。相当分かりやすい顔をしていたらしい。顔を俯かせてしまい、しばらくはなにも言えなかつた。

……死にはしなかつたけど、穴があつたら入りたかつた。むしろ、シェルターに閉じ籠もりたかつた。

その後、モ力ちゃんのときと同じように観念した私は、再度事情を語つたのであつた。前回と違うのは、想いを自覚した結果、なにをしたいと思つているのかも話したことだつた。

自分の想いを打ち明けている間、最初は羞恥混じりで話していたものの、しゃべつている内に平常心を取り戻した私は、次第に真剣な口調になつていつた。

絶対に、本気の想いを木下くんにぶつけるんだ、という確固たる意思を口調で示しながら、全てを蘭ちゃんに話したのであつた。

……説明を全て聞いた蘭ちゃんは、得心がいつたと言わんばかりに頷いていた。

「なるほどね。最近調子が悪かったのも、そういうことか」

「うん……黙つててごめんね。それに、ただでさえ練習で迷惑かけちゃつてるのに、新曲の作詞までしたいだなんて言つちやつて」

自分でも、かなり無茶なお願いをしていることは自覚している。だけど、それを自覺した上で、無理を通してでもやりたいと思つていても事実だ。

蘭ちゃんが腕を組んだまま、私の瞳を覗き込むように見つめてくる。その眼光は鋭く、思わず目を逸らしてしまいそうになるほど力強い。でも、私は負けじと見つめ返す。きつと蘭ちゃんは、私がどれだけ本気なのかを確かめてる。だから、ちゃんとそれに応える。内心ちよつと怖いと思いつながらも、一步たりとも譲らなかつた。

「……一つだけ、聞いていい?」

やがてなにかを感じ取つてくれたのか、質問が飛んでくる。私はもちろん、と続きを促す。

「一人で作詞をするのは初めてだと思うけど、つぐみはやるつて言つたらちゃんとやり切るつて知つてるから、そこら辺は信じてるし、心配もしない」

だけど、と蘭ちゃんは前置きする。

「つぐみは、木下の為に曲を作りたいつてことだよね？ それも、つぐみがメインで歌うような曲を」

私はそれに頷く。その通りだ。

『ガルスパ』には、木下以外にもたくさん的人が見に来てくれる。下手したら、木下は来ないかも知れない。木下1人の為の曲を歌うつてことは、その人たち全員を無視するつてことになるけど、それは分かつてる?」

「……うん、分かつてるよ」

そう、これは全部私の我儘。木下くんを振り向かせたいという、邪な気持ち。私たち『Afterglow』を表現するわけでも、お客様になにかを伝えるわけでもない。たつた1人に聞かせる為の曲を、『ガルスパ』という大きなイベントでやらせてほしいと言つてているのだ。

普通なら、有無を言わさず却下されてもおかしくない提案だと思う。

「それでも、やりたいの。『ガルスパ』って大きな舞台で歌わないと、私が本気だつて伝わらないと思うから」

おそらく、『ガルスパ』は直近での最後のチャンスだ。私と木下くんの行く末を決める分水嶺。もしここで木下くんに想いを伝えられなかつたら、いよいよ覚悟しないといけないかも知れない。

そんな想いで、蘭ちゃんの質問に答えるのであつた。

返事は……なかなか来ない。蘭ちゃんは考え方をしているのか、視線をノートに落と

して沈黙していた。待っている間、湯気の消えたコーヒーにミルクと砂糖を入れて、口にする。やつぱり、ちょっと温かつた。

どれくらい沈黙が続いたらどうか。実際は1分ちょっとしか経つてないんだろうけど、私には何十分も経つたように感じられた。

再び蘭ちゃんの声が聞こえたとき、私は自然と背筋を伸ばした。

「……3日」

「え……？」

「今日を含めて3日。その期間内に完成させられたら、採用する。作曲とか練習とかもあるから、それが限界。私も平行して作詞は続けるから、もし間に合わなかつたら私のを使う。それでもいいなら……やっていいよ」

「蘭ちゃん……！　うん、絶対に間に合わせるから！　蘭ちゃん、本当にありがとう！」椅子を跳ね除けるようにして立ち上がる。はしたないとも思つたけど、それくらい嬉しかつたのだから大目に見てほしい。

そんな私の様子を見た蘭ちゃんは一瞬だけ呆れ顔を見せた後、静かに笑みを浮かべた。それはモ力ちゃんが見せたのと同じように、とても優しげだつた。

「気にしないで。まあ、『恋愛』をテーマにした曲はまだなかつたし、ちょうどいいんじゃない？　私たちの中でそんな経験をしてるのはつぐみだけだろうし」

「そ、そうかな……？ 蘭ちゃんは、気になる人つていのいの？」

「わ、私は別に……まだ、そういうのはいい……って、今はつぐみの話でしょ……！」

思わぬ反撃に照れているのか、蘭ちゃんは顔を真っ赤にしていた。でも、蘭ちゃんは美人だから、きっとそう遠くない内にそういう人が見つかる気がする。

「とにかく、ありがとう！ 私、頑張るから！」

「うん、期待してる。ああ、そうだ。最後に1つだけ」

休憩時間の終わりが近かつたので、急いでコーヒーを飲み干してシンクを持って行こうとしたところ、蘭ちゃんに呼び止められる。

「さつきはあんな言い方したけど、『恋愛』をテーマにした曲つて、元々誰か1人の為に歌うものだと思う。有名なのとかも、そうだし。そういう意味では……つぐみの我儘な考え方か、一番大事なのかもしれないね」

それを聞いた私は喜びが溢れんばかりの笑顔で力一杯領き、蘭ちゃんのアドバイスを心に刻んだ。

これで、やるべきことは決まった。だから……そろそろ、あのことも清算しよう。随分と、待たせてしまつたから。

*

翌日の放課後。私はファミレスの、シートが向かい合わせになつて席で1人座つてい

た。注文したドリンクバーから注いだアイスコーヒーをちびちびと飲みつつ、私は黙々と作詞に取り組んでいた。

とはいって、今日はその為にファミレスに来ているのではない。待ち合わせをしているのだけど、相手が来るのを待つまでの間、少しでも作業を進めているだけだ。なにせ、残り2日しかないのだから。

正直、苦戦している。自分の言いたいことを表現しつつ、それでいて字数を揃え、語感もよくしないといけない。蘭ちゃんはこんな難しいことを毎回こなしているのかと思いつ、改めて感心しているところだつた。

作詞を手伝ったときは、自分の考えをみんなと擦り合わせて、それを蘭ちゃんに伝えるだけだつたから、厳密には作詞には関わっていない。なので、実質これが初めての作詞となる。

蘭ちゃんから借りた作詞の教本片手に進めているけど、なかなか大変だ。

でも、大変だからと言つて立ち止まるつもりはない。そんなに軽い気持ちで言い出したことじやない。

あーでもない、こーでもないと試行錯誤しつつ、少しずつ書き進めていった。

そんなとき、入店のメロディーが店内に流れる。時間的にもそろそろだろうか。私は店の入り口の方を見る。

居た。日焼けした、丸刈りの男の子。加藤くんだ。私は手を振つて自分の場所を知らせる。

すると、それに気づいた加藤くんがこちらにやつってきた。その間に、広げていたものは片付けておく。

「ここにちは、加藤くん。ありがとう、急な呼び出しだつたのに来てくれて」
なにせ、連絡したのは昨日の夜だ。予定が合うのは数日は先になると思つていたけど、幸運にも今日、待ち合わせをすることができた。

「いえ、今日は部活もなかつたんで大丈夫です」

そう言つて向かいの席に着いた加藤くんは、すぐに呼び鈴を鳴らして追加のドリンクバーを注文する。それから加藤くんが自分用のメロンソーダを持つてきたところで、話し合つう準備が整つた。

「えつと、それじやあ……早速になつちやうけど、前のお返事をさせてもらつてもいいかな？」 その、すごく待たせちゃつてごめんね？」

そう、今日はいよいよ加藤くんの告白の返事をすべく、来てもらつたのだ。あの日から、実に2週間ほどが経つっていた。

「だ、大丈夫です……！」 いつでもいいつて言つたのは俺の方ですから……！」
「ありがとう。じゃあ、言うね……」

一拍間を置いて、一度だけ深呼吸。ここまで来て、あまり待たせてしまうのもよくな
いだろう。答えはもう決まっているのだから、一気に言つてしまふべきだ。

なので、胃が締め付けられるような緊張に苛まれつつも、一息でその言葉を告げた。
相手を傷つける、決定的な言葉を。

「——ごめんなさい」

一瞬、加藤くんの呼吸が止まつたのを感じた。誰がどう見ても簡単に分かるくらい
に、動搖を全身で表現していた。胸に刃物を突き立てられたように、沈痛な面持ちで唇
を一文字に結んでいた。

「そう、ですか……」

「うん。気持ちは、とても嬉しかつたよ。でも、あれから色々考えて……気づいちやつた
の。私、他に好きな人がいるんだって」

一切の誤魔化しをせずに、正直に自分の気持ちを伝える。残酷なことをしているとい
う自覚はあるけど……私の気持ちが変わることはない。私が好きなのは、木下くんなの
だ。その想いを曲げることはできない。

「だから、加藤くんとは……付き合えません。……本当に、ごめんなさい」

頭を丁寧に下げる。額がテーブルにくつつきそうになるギリギリまで下げる。目も
閉じてるので、加藤くんの姿が見えなくなつた。

この程度で彼のショックを緩和できるとは思ってないけど、せめてもの気持ちだつた。彼が気が済むまで、頭を下げ続けるつもりだ。

「あの、顔を上げてください。そんなことされても、どうしたらいいのか分からないんで」

加藤くんに促されて、姿勢を戻す。すると、先程までは違ひ、彼の顔には貼り付けたような笑みが浮かんでいた。……無理をしているのは、明らかだ。

「……あんまり気にしないでください。ぶつちやけ、ダメ元みたいなどこはあつたんで。ほとんど話したこともないのに、上手くいくわけないですよね……はは」

自らに言い聞かせるかのように、早口で捲し立てる加藤くん。撤回することも、フォローすることもできない私は、黙つて聞いてるしかなかつた。

「もしかして……あのバイトしてる男ですか？」

「えっ!? ど、どうして……！」

……黙つて聞いてようとしてたけど、加藤くんの名推理を前にたじろいでしまつた。

『Afterglow』のみんなとどちらともかく、まさか加藤くんにまで見抜かれてるとは思わなかつた私は、あからさまな反応を見せてしまつた。

耳の端が、微妙に熱を帯びる。

「実は夏休みの間、告白しようと思つて、何度かあの商店街をうろついてたんです。で

も、全然声をかけられなくて……そしたらあの日の午前だかに、あの男と一緒に歩いてるのを見ちゃつたんです」

それはきっと、スイーツの調査に一緒に出かけた瞬間のことだろう。確かに、傍から見たらデートにしか見えない……というか、今思い返しても完全にデートだつた。私自身、当時は無自覚だつたけど、それらしい反応を見せていた。

「そしたら、居ても立つてもいられなくなつて……夕方、待ち伏せして、勢いで言つちやつたんです。でも……一緒に出かけるような相手に敵うわけないですよね」

その問いには答えずに、沈黙をもつて答える。肯定はしてないけど、私がなにを考えているかは加藤くんにも伝わつただろう。

しばらくして……加藤くんはぼそりと、「もう、行きますね」と告げた。

すると、彼は一気にメロンソーダを飲み終え、迷わず席を立つ。同時に、テーブルの伝票入れの筒から2枚の伝票を抜き取つてしまつた。

「あ、待つて……！ 私の方が年上なんだから、それくらい……」

「いいんです。というか、これくらいさせてください。一応これでも男ですし。迷惑をかけたお詫びです」

そんな言い方をされたら、なにも言えなくなつてしまつ。伝票を取り返そうと伸ばした手を、途中で引っ込めてしまつた。

「それじゃ、なんというか、ありがとうございました。こんな真面目に答えてくれて。その、応援……してますから」

それだけ言い残すと、加藤くんは手早く会計を済ませて、お店を去ってしまった。歩き出した方向の関係か、背中を向けた姿しか視線で追えなかつた。

角を曲がつて消えてしまふその最後の瞬間まで目を離さなかつたけど、結局、背中しか見ることができなかつた。

「……1人、常連さん……失くしちやつたかな」

自嘲気味に呟く。後悔はない。でも、せつかくの好意を断つてしまつたことに胸が痛むのも事実だつた。いつか、私よりいい人が見つかってほしい。そう、心から思った。

それと最後の、応援しているという言葉。それが本心なのかどうかは分からぬ。でも、彼がそう言つたのだから、きっとそうなのだろう。そう、思い込むことにした。

……たつた1つの想いを形にする為に、色んな人に迷惑をかけてしまつた。傷つけてしまつた。だからこそ、止まつてはいけない。そう、強く言い聞かせる。

「よし……頑張らないと……！」

必ず、絶対に完成させる。改めて確認したその熱い想いを胸に、私はもうしばらくファミレスで作詞を続けるのであつた。

第12話 手紙

蘭ちゃんと約束した、作詞の期限の最終日。その日はスタジオでの練習があつた。作詞も大事だけど、練習も大事だ。そもそも完成度が低かつたら、お客様をがっかりさせちゃうし、新曲を作る意味なんてないのだから。

昨日から一気に調子を取り戻した私は、それまでの不調が嘘であつたかのように、練習でも綺麗に音を合わせられるようになつた。雑念がなくなつたことで指が淀みなく回り、ミスが目に見えて減少した。

元々、個人練習はハードにこなしていたのだ。気がかりさえ消えてしまえば、その成果が如実に現れてくれた。ずっと調子が悪かつた分、一気にバネで飛び上がつたみたいな成長ぶりだった。

その突然の変化に、事情を知らない巴ちゃんとひまりちゃんは驚きつつも、これなら絶対にイケると満面の笑みで喜んでくれた。

よかつた。ずっと心配させちゃつてたから、その分の信頼をちゃんと取り戻さないと。

一方、事情を知つてる蘭ちゃんとモカちゃんは、まるで子供を見守る母親のような温

かい眼差しで私のことを見ていた。

……嬉しいんだけど、流石にそれはちょっと恥ずかしいよ、2人とも。

その後も滯りなく練習は進み、久しぶりに意義のある時間にすることができた。

*

練習の終了後、撤収の為の片付けをしていたところ、ギターケースを背負つた蘭ちゃんが声をかけてきた。

「つぐみ、作詞の調子はどう？」

他の3人に聞こえないようになら、やや声を落としていた。私が採用されるかは現段階では分からないので、3人にはまだ内緒にしている。

「えっと、半分行くか行かないかくらい……かな」

「……大丈夫そう？」

こちらを心配するような調子の声。確かにペースとしては遅れ気味だけど、私はしっかりと笑顔を返す。心配しなくても大丈夫、と。

「その、行き詰まつてるとかじゃないの。逆に、書きたいことがいっぱいありすぎちゃつてどうしようつて感じで……でも、作詞自体は少しだけ慣れてきたから、今日頑張れば完成させられると思う」

「……そつか。なら、待つてる」

「ありがとう、蘭ちゃん。明日、学校のお昼休みに渡せばいいんだよね？」

「うん、それで大丈夫。その後私が確認して、OKだつたらそのまま放課後に打ち合わせするから、そのつもりでいて」

了解、と頷く。そうなると、実質的なタイムリミットは明日の朝、家を出るまでとなる。今夜が踏ん張りどころだ。

実を言つてしまふと、昨日もあんまり寝ていない。夜更かししようと思つてしたのではなく、夢中になりすぎて、気づいたらすごい時間になつていたのだ。

でも、不思議とまだ眠気はない。今でも、とにかく作詞の続きをしたくて仕方がないのだ。

「つぐー！ 蘭ー！ そろそろ行こうよー！」

ひまりちゃんが呼んでる。スタジオの使用時間も残り数分だし、そろそろ出ないと。帰る支度を終えた私は蘭ちゃんと一緒に、先に出口へと向かっていた3人に続くのであつた。

* *

夜中の午前1時。日付は既に変わつている。普段なら、余程のことがない限りはとつくに寝ている時間。でも、今日の私はそのつもりは毛頭なく、今も机にかじり付いて作詞を続けていた。

「えつと……」許されないと分かつていても貴方を愛しています……うう、ちょっと直球すぎるかな……」

声に出して読んでみると、思った以上に恥ずかしい。自分で考えた歌詞なのに、胸の奥がむず痒くなつて、枕に顔を埋めてジタバタしたい衝動に駆られる。

……やつぱり、『貴方が好きなんです』くらいにしようかな。その……あ、愛してるって言い方は、ちょっと大人っぽすぎるよね。

紗夜さんなら合いそうだけど、まだ私には早いや。そう結論付けて、その部分を修正した。

そんなことを考えながら、新しい歌詞をノートに書き込んだり、ときには消しゴムで消しては修正したりする。

今のは7割くらいだから……休憩を挟みながら朝まで頑張れば、なんとか間に合います。

少しずつ終わりが見えてきたことに期待と安堵を感じつつ、軽く伸びをして全身をほぐす。

すると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。この時間だと珍しい。

「はーい？」

「つぐみ、入つてもいいかい？」

「お父さん？ うん、大丈夫だよ」

がちやり、とドアが開く。それと同時に甘い匂いが鼻腔をくすぐり、優しく食欲を呼び覚ます。この匂いは……カフェモカだ。

「簡単にだけど、夜食を用意したよ。カフェモカとサンドイッチだけど、これで平氣かい？」

「わあ、美味しそう……！ ありがとう、お父さん……！」

お父さんがお皿の乗ったトレイを側に置いてくれる。サンドイッチはハムサンド。挟まれているトマトやレタスが色鮮やかで、それだけでも元気が出てくる。

「どうだい、作詞の方は？」

「大変だけど、なんとかなりそう。……多分、ほぼ徹夜になっちゃうけど

声のトーンが落ちる。黙つていようかとも思つたけど、夜食まで作つてもらつちゃつた以上、正直に言つた方がいいと思つた。

かつて無理をして倒れたという前科があるので、あまり好ましい状況ではないのは分かつてている。完成するまで寝るつもりはないけど、それでも少しばかり申し訳なかつた。

ところが、お父さんは私を責めるようなことはしなかつた。ただ、頷きを一つ挟むだけ、顔は穏やかなままだつた。

「そつか。頑張るんだよ」

「……いいの？」

「よくはないけど、つぐみはやりたいんだろう？ なら、後でちゃんと休んでくれば、なにも言わないよ」

「……うん、ありがとう」

お父さんが淹れてくれたカフェモカを一口。……とても、温かい。溶けたチョコの甘みが口の中で広がって、幸せな気分だ。

「……それに、また木下君がつぐみと一緒に居てくれるようになれば、無茶することもなくなるだろうしね」

「つ？！ お、お父さん……！」

唐突に放り込まれたからかいの言葉に、私の羞恥心が爆発する。こういうことを親に指摘されると、こんなにも心が乱れるのだと、たった今知った。夜中なのに、大声を出してしまった。

「ごめんごめん。でも、本当にそう思ってるんだよ。木下君には前に言つたんだけどね、2人が一緒のときは息がピッタリだつたし、いつもお互いを助け合つてゐるように見えたからね。彼と一緒に心配なさそうだなって」

お父さんの話に目を見開く。そんな風に思つてくれたんだ……私と木下くんのこ

と。でも、確かにそうだつたと思う。

木下くんは私の生徒会やバンド活動に合わせてシフトを入れてくれていたし、私も木下くんが働きすぎないように気をつけたり、1回だけだけど勉強会で勉強を教えた。

結果として、全体的にはしっかりとバランスが取れた。

「……そうだね。うん、私も木下くんと一緒に居たい。一緒に働くのは……しばらくは無理だと思うけど」

「まあ、それは仕方ないかな」

そこはお父さんも同意する。流石に校則を破つてまで働いてほしいとは思わない。私だつて生徒会の人間だし。

「それじゃ、そろそろ行くよ。おやすみ、つぐみ」

「うん、おやすみなさい」

パタンとドアが閉じた。私は作業を一旦中断し、早速お父さんが用意してくれたサンドイツチに手を付ける。……うん、レタスがシャキシャキしてて美味しい。アクセントのピクルスの酸味が、疲れを和らげる。

思う存分夜食を楽しみ、十分な休憩をとつたことで英気を養つた私は、再び全力で作詞に取り組むのであつた。栄養を摂つたおかげか、さつきまでよりずっと作業は捲つた。

*

夜食の後、時間の感覚があやふやになるくらい集中しながら作業を続けた。ペースがどんどん加速し、何回もシャーペンをノックしては芯を出した。時には芯を補充したりもした。いつの間にか、すごい量の消しカスが机の上に散らばっていた。

見えるのはノートに綴られた歌詞の文字だけ。一節書いては、頭から読み返して語感やバランスを確認する。ちょっとでも納得いかなければ、修正を試みる。そのおかげで、完成を目前にしながらも、一部を没にしてやり直しになることが多々あつた。

あまりにも消した回数が多くて、ノートのその部分だけボロボロだつた。消しきれなかつた分が、ページのそこら中に黒い跡として残つていた。蘭ちゃんに見せる前に別のページに書き写しておこうと思いながらも、時間がもつたないので今はそのページを使い続ける。

何時間経過したのかは分からない。でも、多分ものすごい時間が経つたんだと思う。ずっと同じ姿勢だつたせいか、体の節々が微かに痛んできだし、流石に眠気も徐々に強まってきた。気をつけてないと、瞼が自然と重くなる。

……でも、それだけ頑張った甲斐はあつたみたい。その瞬間が、いよいよ訪れる。「できた……！」

ついに、100%納得のいく新曲の歌詞が完成したのだ。

達成感のあまり、胸が熱くなつた。完成したのが嬉しくて、何度も読み返す。その度に、会心の出来だと、かつてないほどの自信を持つて断言するのであつた。

シャーペンを机に置いて、窓の方を見る。カーテン越しではあるものの、既に朝なのが分かるくらい明るくなつていて見えた。

時計を確認してみると、後30分くらいしか寝る時間がなかつたことに驚くのであつた。……やつぱり、ほぼ徹夜だつた。

私は少しでも休もうと、部屋の電気を消してからベッドに沈み込むように倒れるのであつた。

……それから50分後。ギリギリ学校に間に合う時間に、私はかなり久しぶりに親に起こしてもらつたのは内緒のお話。

*

学校でのお昼休みに、屋上で完成した歌詞を蘭ちゃんに見せたところ、すぐに合格を貰えた。自信はあつたけど、そう言つてもらえたのはとつても嬉しかつたし、肩の荷が下りた心地だつた。

この後、私が作詞した歌詞をベースに新曲を作るという方針を、他のみんなにも共有した。

その過程で、私と木下くんの間に起きたことが残りの2人に知られちやつたけど、な

んとかひまりちゃんのメッセージのことだけは誤魔化すことができた。

あのことは気にしてないし、もちろん怒つてなんていないけど、やっぱり知られたら氣まずくなっちゃうと思うから。

私が作詞をした経緯を話し終えたとき、巴ちゃんとひまりちゃんは、当初は私のことを心配してた。喧嘩別れしたようなものだし、当たり前の反応だと思う。

でも、私が大丈夫そうだと分かると、一転してあからさまにニヤつき始めた。その視線が痛くて、思わずその場から後ずさつてしまつた。

ひまりちゃんは「つぐ、頑張れー！」って抱きついてきたし、巴ちゃんは目を細めながら私の頭を撫でてきた。嬉しいやら、恥ずかしいやらでのときは黙り込んでしまつた。

ともあれ、作詞が完了したので練習と平行して蘭ちゃんの作曲作業が始まつた。それで、私が作詞を担当したということで、私もその作業を手伝うこととなつた。ううん、手伝うというよりは、私の希望を蘭ちゃんに伝える感じだつたかな。

例えば、ソロで歌いたいのはどの部分かとか、できればその部分はキーボードのソロにしてほしいとか、そんな感じで。各パートのボリュームの調整とか大変そうだなと思いつつも、この件に関しては妥協しなかつた。

放課後、時間があるときは必ず蘭ちゃんの家に寄つて、急ピッチで曲を作り上げて

いつた。土曜日に至つてはお泊りまでして作業を手伝つた。そのおかげかどうかは分からぬけど、作詞を終えた日から5日という早さで新曲は完成したのであつた。

新曲が完成したことで、披露するセットリストの曲が全て揃つた。後はひたすら練習を繰り返すのみだ。

『ガルスパ』まで残り2週間ちょっと。私たちは猛烈な勢いで仕上げていくのであつた。

バイトを辞めて、羽沢先輩との関わりがなくなつてから、およそ1週間が経過した。まだほんの1週間なのに、バイトをしていた日々が既に遠い過去のように感じられる。生活のリズムは、バイトを始める前の状態に戻つてしまつた。適当にゲーセンで遊んでは、家で読書か勉強をする。それだけの日々に。

特に、勉強に没頭することが増えた。単純に今月は大事な模試があるからそれに備えてというのもあるし、なによりも、勉強していれば余計なことを考えなくて済むから。……今でも思うことがあるのだ。なんで、あんなことを言つてしまつたんだろう、と。羽沢先輩が目当てでバイト始めたとか、もう会うつもりはないとか。

いや、なんでなのかは分かっている。どうせ意識されていないならば、いつそのこと嫌われてしまいたいと思つたのだ。そうすれば、諦めもつくんじやないか。そう思つて。

いくら羽沢先輩でも、あのストーカー紛いのバイトの動機を聞けば気味悪く感じるだろう。言葉ではああ言つてたけど、きっとそう思つてる。

……だから、そう……諦めた。その、筈だ。

でも、本当にそうなら、なんで僕は連絡先をそのままにしてるのだろう。

チャットツールは再インストールしてしまえばいいし、電話番号は番号を変えるなり着信拒否なりすればいい。

そうすれば、疎遠になるのは確実となる。

……いや、分かつてるんだ。口ではなんと言つたところで、未練が残つていることは、せめて、別れを告げる前に正面から気持ちをぶつければよかつた、とか。

事故とは言え、気持ちを知られたのだから、そこから押せばなんとかなつた未来もあつたのでは、とか。

あのときは失意と混乱で見えなかつた可能性が、今になつていくつも思い浮かぶ。

それだけじやない。実生活にも、少なからず未練の影響は出ている。

ゲーセンでもあのキーボードの音ゲームはショッピングモールのことを思い出しても

しまうので、今は意図的に避けてしまつてゐる。

勉強をしているときでも、ふとしたタイミングで羽沢先輩の笑顔が脳裏に浮かぶことがある。その度に、一瞬だけ手が止まつてしまつた。

コーヒーも……わざわざ豆を挽いて淹れるのは、止めてしまつた。だが、その為の器具を片付けてしまうことは……できなかつた。

なにもかもが中途半端。そして後悔だらけ。なのに、それを取り戻す為の行動を起こそ勇氣すらない。羽沢先輩と会う前の、情けない僕に退化してしまつた。

*

今日もまた学校の授業が終わり、HRが始まる。

僕の心は虚無で満たされ、退屈を誤魔化す為に窓の外へと視線を向けていた。もしかしたら商店街が見えたりしないかな……とも思つたけど、見える筈もなかつた。

見えるのは、体育を終えて校舎に戻つてゐる体操服の生徒の集団だけだつた。そんな中で、担任の話が始まる。今日は、2週間後の日曜日に、学年全体で受けることになつてゐる予備校主催の模試についての詳細な説明があつた。

難関校を目指す人向けのレベルの高い模試であること。

上位10名の名前を壁に張り出す予定なこと。

来年のクラス分けの基準や3者面談の資料として用いられること。

そして、受験は校内で行い、次の日の月曜日を振替休日にすること。説明はそんなところだつた。

模試……か。中学のときにもいくつか受けたけど、その結果次第では父さんがうるさうだ。

上位10名とまでは行かないまでも、30位以内には入つておかないと、と思う。

今日の連絡の主なポイントは模試のことだけだつたのか、その後は大した連絡もなく、速やかにHRが終了した。

少しだけ、自習していこう。そう決めた僕は、掃除を終えると同時に自習室に向かうのであつた。

*

1時間半くらい自習をした後、僕は下校することとした。学校を出てからしばらく歩き、学校近くの駅に到着する。

家に向かう電車をホームで待つてゐる間、反対側のホームが目に入る。バイトがあつたときは、いつもあつちで電車を待つていた。だけど、もうバイトはない。

駅の改札からホームへの道は、2つの階段に分かれている。1つは自宅方面のホームに繋がり、もう片方は商店街方面だ。

学校の帰り、その分かれ道を見る度……胸が締め付けられるような、もどかしい気持

ちになつた。

上がる階段を変えるだけで、『羽沢珈琲店』に行ける。羽沢先輩にも会えるかもしけない。

なのに、僕の足は毎回自宅方面の階段を選んでしまう。
……電車の到着を知らせるアナウンスが流れる。僕は、大きな溜め息をついた。それがどういう感情に起因するものだつたのか、自分でも分からなかつた。

*

最寄り駅で降りて、自宅に向かつて歩く。駅から、およそ徒歩で20分くらいのところの住宅街に家がある。慣れた今となつては大した距離ではない。
家に着き、ポストを覗く。いつもの習慣だ。

案の定、封筒やらチラシがいくつか入つていた。それを取り出し、確認していく。
もつとも、僕宛てのものなんて滅多にないけど。

滅多にないのだけど……今日ばかりは違つた。1通だけ、僕宛ての封筒があつた。滑らかな肌触りの青白い封筒。

「……え？」

そして、その差出人の名前を確認した瞬間、時間が止まつたように感じられた。

……指先が、知らぬ内に震えている。妙に苦しいと思つていたら、息をすることを忘

れていたことに気づき、慌てて呼吸を再開する。

これだけ動搖してしまっても無理はなかつた。だつて、差出人のところに『羽沢つぐみ』と書かれていたのだから。

しかも、封筒を確認する限りでは……郵便局を経由した形跡がなかつた。それが意味することは、ただ1つ。

「羽沢先輩が、ここに……!?」

弾けるような動きで周囲を確認する。当然と言えば当然だつたが……羽沢先輩の姿を確認することはできなかつた。ずっと自習をしていたし、来たのはだいぶ前だろう。無意識だつたけど、がつくりと肩を落としてしまい、なにを残念がつているのだと自身を心の中で叱咤する。

それはそうと、問題はこの封筒だ。わざわざ家まで届けたのだ。なにか大事なものに入つていてるに違いない。

急いで家に入った僕はリビングに他の奴を放り投げて、素早く自室に飛び込んだ。早く中を確認したい。

椅子に座り、丁寧に糊の部分を剥がし始めた。まるでそれがなにかの思い出の品かのようだ。慎重に。

そして、破かずを開いた口の方を逆さにして、中身を取り出した。ストン、と滑るよ

うに落ちてきた中身のものを、手のひらで受け止める。

「……チケット？」

入つてたのは、折り畳まれた便箋と1枚のチケット。

……チケットには、『ガールズ☆スーパーフェス』と記載されていた。ご丁寧に開催場所まで。これがなんのチケットかは、一目瞭然だ。

間違いなく、ガールズバンドのライブ用のチケットだ。1枚だけということは、知り合いの招待や宣伝用とかではなく、僕の為にだけ送つてくれたということ。

……羽沢先輩が、僕にライブのチケットを送つてくれた。あんな突き放すようなことを言つたのに。複雑な心境が邪魔して、感想が出てこない。

……僕は悩んだ末に、便箋を開いた。するとその便箋には、びつしりと文章が書き込まれていたのだった。

伝票とかで見覚えがある。それは、羽沢先輩の文字だった。

僕は飛びつく勢いで手紙の中身に目を通し始めた。

＊＊

まずは最初に謝ります。ごめんなさい！ 手紙を届ける為に、履歴書から勝手に住所を確認させてもらつちゃいました。本当にごめんなさい。これで私も立派なストーカーです。おあいこだね。

封筒に、チケットが入っていると思います。『ガルスパ』って呼ばれてる、ガールズバンド向けとしてはとても大きな野外ライブのイベントのチケットです。

私たち『Afterglow』もそのライブに出ます。チケットの裏に書いてあると思うけど、14時くらいから出る予定です。

そのチケットはいわゆる招待枠のチケットで、私たちの出番のときなら、1番前で見ることができます。

私たちが出るその時間だけでもいいので、木下くんには絶対に見に来てほしいんです。私からの最後のお願いです。

……本当は言いたいこと、話し合いたいこと、たくさんあります。でも、今の木下くんには言葉だけでは伝わらないこともたくさんあるんだって思つてます。

だから、ライブに来てください。私たちの歌と演奏を聞いてください。私たちの熱意を感じてください。会場の盛り上がりを見てください。

その上で……私たちの言葉をどう受け止めるかを決めてください。

絶対、絶対に来てください。待つてます。

つぐみ

**

……手紙を読み終えた僕は、チケットの裏面を確認する。確かに、『Afterglow

W』の名前が記載されている。開始予定時刻も、手紙にある通りだ。

まさか、こんな手段で連絡を取りに来るとは思わなかつた。

きっと、前の電話で僕が先輩のことを強く拒んでしまつたから、黙つてポストに投函しておくという手段に出たのだろう。

実際、チャットで会いたいと連絡されるよりも、ずっと効果的だつたと思う。チャットだつたら、意気地になつて拒んでしまつたかもしれないから。

……あの羽沢先輩がここまで強く念を押すということは、なにがなんでも来てほしいつてことだらう。最後のお願い、なんて言うくらいだし。

それに、先輩にしては随分と挑戦的な書き方だつた。先輩の方からこんなに自信がありそうな言い方をしたことは、今までなかつたと思う。

こんな手紙を貰つて、嬉しくないわけがない。自分から嫌われるよう仕向けたのに、まだ嫌われてはなさそうだと、安堵している自分がいる。

心の奥で燻つていた未練が、正真正銘の最後のチャンスだとしきりに訴えてくる。
……それくらい、分かつてゐる。

行きたい。できることなら行きたい。いや、ものすごく見に行きたい。最後に、もう1回だけでもいいから、羽沢先輩のライブの演奏が見たい。本気で、それを熱望してい
る。

「20日の……日曜日……」

……でも……でも、絶対に行くとは……即決できなかつた。できない理由があつた。こんなにも、運命を残酷だと思った瞬間はない。

「……なんで、1週間ズレてないんだ」

『ガルスパ』が開催される日は……20日の、日曜日。その日は……校内での模試の日なのだ。終わつてから急いで向かつても、『Afterglow』の出番はとつくに過ぎている。

3者面談でも参考にされる重要な模試。そんな簡単に無視できるようなものではない。

サボつたつて必ずバレるし、その場合は担任からも親からもこつ酷く絞られるだろう。事情を話したところで、どうにもならないであろうことは明らかだ。仮病を使つたら、今度は外出する口実がなくなつてしまふ。

つまり、『ガルスパ』を見に行くには、後に怒られることを承知の上で模試をサボるしかないのだ。それも、いかにも模試を受けに学校に行く……という体を装つて。

「……どうしよう」

行きたいという気持ちは本物だ。最後のチャンスだということも、分かつていて。なのに、どうしてサボるという決断ができないんだろう。

進路に関わるから？ 怒られるのが怖いから？ 羽沢先輩と向き合う勇気がないから？

……きっと、全部だ。

そして、行けるか分からぬことを羽沢先輩に連絡することすらも……反応が反応がなくて、メッセージを送ることができなかつた。

「ああ、クソッ！ なんで、僕はいつもこんな……っ！」

己の髪を搔きむしる。急に物に当たり散らしたい衝動に襲われたが、それを必死に抑える。大きく息を吸つて、荒々しく吐き出した。

……危ない。もう少し自制が遅れていたら、きっとスマホを壁に叩きつけていた。事実、手に持つて振り上げるところまでは行つていた。

手の施しようがないくらいの臆病さ。昔からずっと、やりたいことと實際にとつた行動が一致しない。そんな自分が大嫌いだし、頭に来る。

なんでこんな名前なのに、こんなにも勇気がないんだ……！

「……どうしたら、いいんだよ」

自己嫌悪に陥つた僕は椅子にもたれかかつたまま、項垂れるしかなかつた。心の中で、繰り返し羽沢先輩に謝罪しながら。

*

……2週間後。『ガルスパ』当日。

何度も何度も何度も悩みつつも……結局僕は制服を身に纏い、模試を受けるべく学校へと向かうのであつた。未練がましく、『ガルスパ』のチケットを鞄に入れておいて。連絡は……していなかつた。

第13話 本当に大切なものの

午前8時40分。学校の教室で出席番号順に座つた僕は、前から問題用紙と解答用紙が回つてくるのを待つ。

待つてゐる間、外の方へと視線を向ける。今は窓際には座つてないのでチラリとだけ。

……どんよりと曇つてゐる。雨こそ降つてないものの、空一面灰色だ。

結局、僕は『ガルスパ』ではなく校内模試の方を選んでしまつた。チケットは今も鞄の中にあるけど、それだけだ。この場ではなんの意味も持たない。

『ガルスパ』のやつてゐる公園までは、ここから向かうと大体50分くらい。道中走つたりすれば、40分まで縮められるかも知れない。いずれにせよ、まだ余裕で間に合う時間だ。

そう……今から向かいさえすれば。

今も、迷いは消えていない。行つた方がいいのでは……いや、でも……と頭の中で右往左往してしまつてゐる。

どうしよう、どうするべきだろうと思つてゐる間にも、試験の準備が着々と整いつつ

ある。そしてついに、僕は問題用紙と解答用紙を受け取つてしまふ。

それに、教室内ではクラスメイト全員が着席しており、担任の先生が教壇に立つている。試験前特有の、ピリピリとした空気も感じる。

ここから抜け出すのは精神的にかなり困難だ。風邪でもないのに体調が悪いと嘘をつくこと自体にも抵抗がある。

……だけど、羽沢先輩だつて、僕のこと待つていてるに違いない。もし、時間になつても僕がライブの会場に居なかつたら……なにが起きてしまうのだろうか。

……いくら先輩でも、今度ばかりは本気で怒るに違いない。失望するに違いない。本当に、縁が切れてしまうだろう。羽沢先輩の厚意を踏みにじる結果になるのだから、当然と言えば当然だ。

胃が酸で灼ける。心臓が締め付けられる。羽沢先輩が抱くであろう怒りと失望を想像するだけで、生まれたての子鹿のように手足が震える。

「それでは、始めてください」

そんなことを考えていい内に、試験が始まつてしまつた。反応が少しばかり遅れ、周囲がページをめくる音でようやく現実に引き戻される。ちなみに、最初は数学だ。

慌てて筆記用具を手に持つて問題を解き始めるものの、内容がほとんど頭に入らない。全くと言っていいほど、集中できない。解答のペースが通常の半分以下な上、計算

ミスも頻繁にしてしまう。急いで消そうとしたせいで、消しゴムを数回机から落としてしまった。

結局、僕の頭の中は終始羽沢先輩のことでいっぱい、数学の試験の出来は散々だった。結果を待つまでもなく、とんでもない点数であることは明らかだった。

続けて、国語の試験に入つたものの、僕の調子は相変わらずなのであつた。

『ガルスパ』はライブだけを行うイベントなのではなく、一種のお祭りのようなイベントだ。いくつかのライブ用のステージがあつて、その周辺にたくさんの屋台が出店している。

えつと、つまりなにが言いたいかというと……私たちの出番までの間は、私たちも純粹に『ガルスパ』を楽しむ側だということ。

今は午後の1・2時を回つたくらい。ちょうどお昼どき。周囲はたくさんの人で賑わっていて、天気が曇りであることを忘れそうになるほど各ステージのライブが盛り上がりつているようだつた。

そんな中、私たちはお昼ご飯の確保の為に、周辺の屋台を回つていた。

まあ、私たちと言つても、私とひまりちゃんと蘭ちゃんの3人でだけどね。モ力ちゃんと巴ちゃんは飲食スペースで席を確保して待つてくれている。

「あ！ 見て見て！ あそこに牛タンがあるよ！ 買つてきていいかな!?」

「うん、平気だよ。行つてらっしゃい、ひまりちゃん」

「あ、ひまり。ついでにモ力に頼まれてた分もお願ひ。8枚入りの奴つて言つてたと思
う」

「りょーかーい！ ではでは、行つてきまーす！」

そう言うや否や、ひまりちゃんはお目当ての屋台の方へ一直線に向かつて行つた。

『ガルスパ』当日だからなのか、お祭りの雰囲気のせいなのか、ひまりちゃんはいつも以上に元氣いっぱいだつた。

「蘭ちゃんはなに食べるか決まつた？」

「まあ、ライブ前だから軽めのものにしようとは思つてる。つぐみも、今回は結構歌うことになると思うから、あんまり食べない方がいいよ」

「あ、そつか。そうだよね、食べすぎないようになないと」

お腹いっぱいになると声が出にくくなつちやうもんね。気をつけないと。

うーん、そうなると……もしかしたら1人分でもお腹いっぱいになつちやうかもしけないから……。

「……そうだ！ 蘭ちゃん、半分こにするのはどうかな？」

「うん、そうだね。それがいいと思う。つぐみはなにがいいの？」

「えつと……あ！ あれとかどうかな？ ローストビーフ丼だって」

視線の先に映った屋台の看板を指差す。屋台で売っている食べ物の中ではさっぱりしてそうだし、写真を見る限りでは量もそんなになさそうだ。なにより、とつても美味しそうだし。

「いいんじゃない？」

「よかつた！ ジやあ、私が買つてくるね」

「お願ひ。その間に、私は巴に頼まれた分を買つてくる。お金は後で返すから」

「うん、了解。それじゃあ、また後でね」

その場で蘭ちゃんと別れて、私は目的の屋台の列を目指す。結構並んでいる。買うのに、ちょっと時間がかかるかも。でも時間はまだあるし、大丈夫かな。

えつと、最後尾は……あそこ、かな？ 人が多いから、少し分かりにくい。

うーん、ちょっと聞いてみようかな。私は、最後尾と思しき所に立っている女の人に

声をかけてみることにした。

「あの、すみません。ローストビーフ丼の最後尾つてここで合つてますか？」

「ええ、合つてますよ……つてあれ、羽沢さん？」

「え……？」

最後尾であることを確認したはいいものの、それを聞いた相手の人に名字を呼ばれて、疑問が生じる。相手の人の顔をよく見てみるけど、知らない顔だ。
 ……初対面、だよね？ 私が忘れちゃってるだけなのかな……？ ……あれ？ でも、どこかで見たような気も……。

そんな風に頭を悩ませていると、私の考えを察したのか、女の人は苦笑いを浮かべていた。

「ああ、ごめんなさい。私が一方的に知ってるってだけで、初対面だよ。木下勇樹は知ってるでしょ？ あいつの姉なの、私」

「……えっ!? 木下くんのお姉さんですか!？」

驚きのあまり、大声を上げてしまう。幸い、周囲の喧騒のおかげで注目を浴びることはなかった。でも、すごい偶然だ。まさか、偶々話しかけた人が木下くんのお姉さんだなんて。

確かに、言われてみれば……顔立ちがどことなく木下くんに似ている。見覚えがあると思つたのは、兄弟故の面影を感じていたせいだつたみたいだ。

そういえば、木下くんはお姉さんが私と同じ羽丘に通つているつて言つてた。ということは、学校の先輩ということになる。

「えっと、木下先輩……で、いいですか？」

「うん。好きな呼び方でいいよ。私の方も羽沢さんで大丈夫?」

私は「もちろんです」と笑顔で頷く。すると先輩は「よかつた」と返してくれた。

「ところで、勇樹がバイトするようになつてからあんまり店には行けてなかつたんだけど、どんな感じだつた? 本人はあんまり語りたがらなかつたんだよねえ……」

「えつと、きの……勇樹くんには、バイトでいつも助けてもらつてました。すぐに仕事覚えて、コーヒーまで淹れられるようになつちやつたので、びっくりでした」

嘘偽りなく木下くんのことを伝える。好意云々を抜きにしても、木下くんはとても貴重な戦力だつた。

「へえ……そだつたんだ。あいつも頑張つてたんだねえ……。あ、そういういえばごめんね、勇樹のバイトのこと。私の方から連絡しとい、あんなことになつちやつて」

「あははは、確かに急で驚いちゃいましたけど、大丈夫です。今はシフトもなんとか持ち直してますから」

本当は木下くんが辞めちやつたとき、すごいショックを受けてたのは隠しておく。先輩がどの程度まで事情を知つているのか分からないので、当たり障りのない範囲に留めておく。

それからしばらくの間、木下先輩と他愛のない会話を楽しむ。そうしている内に列は

どんどん進み、すぐに私たちの番となつた。

先輩は2人分買い、私は1人分を買って余分に器とスプーンを貰う。本当に、あつという間の時間だつた。

「それじゃあ、羽沢さん。ライブ頑張つてね。後で見に行くから」

「ありがとうございます！ お待ちしてますね。あ、そうだ！ 先輩、今日は何人で来てるんですか？」

「友達と2人でだけど、どうして？」

「よかつたら、これどうぞ。私たちのライブだけですけど、最前列で見れるライブの招待チケットです」

ちようど2枚だけ残つていたチケットを懐から出して、先輩に渡す。バンド繋がりのお友達の何人かが来れなくなつてしまつた為、余つていたのだ。

「え、いいの？ わざわざありがとね」

「いえ、余らせててもつたいないだけですから。勇樹くんにも同じチケットを渡したので、もしかしたら一緒になるかもせんね」

私としては、それとなく木下くんも誘つていることを伝えようとしだけだつた。

だけど、それを聞いた先輩は予想外なことに、突然顔を曇らせた。

「え？ 勇樹のこと、誘つてるの？」

「はい、そうですけど……？」

「……羽沢さん。今すぐ勇樹に連絡した方がいいよ。多分、まだここに居ないから」「えつと……？ でも、まだ私たちの出番まで時間はありますし……」

「ああ、そういうことじゃなくてね」

私の考え方を否定するように先輩は首を横に振る。

なんだろう、と首を傾げていると……先輩は衝撃的な事実を私に告げるのであつた。「勇樹の奴、なんか大事な模試があるとかなんとかで、今朝制服で出てつたよ。今頃、学校に居るだろから早く連絡しないと来ないかも知れないよ」

このとき、私はまた木下くんに難しい選択を迫つていたことに気づいた。

* * *

国語の試験が終わり、昼休みに入る。今は12時40分。残っている英語は1時間後の13時40分から準備に入る。

……もしその時間を過ぎれば、もう引き返せない。ライブに間に合う可能性は完全に閉ざされる。

諦めがつくから早くその時間が過ぎてほしいと思っているのか、それともまだ間に合

うことに安堵しているのかも分からぬまま、僕は学食で昼食を食べることにした。

校内模試とはいえ、1学年しか登校していない為、学食は結構空いていた。カレーを購入し、適当に席に座つて食べ始める。

午前中の試験のことを振り返る。酷いものだつた。そもそも最後の問題まで辿り着いてないとかそういうレベルで酷かつた。こんなこと、初めての経験だ。

駄目だな……僕。羽沢先輩の誘いを無視しているにも関わらず、そのことが気になつて模試の方でも力を発揮できないなんて。中途半端な態度が、そのまま結果に現れている。

憂鬱な結果にげんなりしながら、20分くらいのスローペースで食事を終える。

そして座席に留まりながら、試験中は電源を切つていたスマホを起動する。昼休みが終わるまで、適当に弄くり回していようと思つたのだ。

起動時のセットアップが完了し、ホーム画面が映る。

——その直後、チャットのメッセージの通知が飛んできた。どうやら、切つている間に届いていたらしい。

恐る恐る、差出人を見る。姉さんからだつた。そのことに安心したのも一瞬のこと。メッセージには、今最も触れてほしくない話題が書かれていた。

『ちょっとあんた！ さつき偶々羽沢さんと会つて、聞いたよ！ ライブ誘われてたん

だつて!? なに呑気に模試なんか受けてんの！ とつととこつち来なさい!!』

「……簡単に言わないでよ」

こつちの気も知らないで、と苛立ちが募る。その決断が簡単に出来るようなら、こんなに悩んでいないし、罪悪感も感じてない。

送り主が姉さんであることで変に意気地になつてしまつたからだろうか、結局そのメッセージは既読無視してしまつた。

——だが、それから10分後に届いたメッセージは無視することができなかつた。差出人を見た瞬間、すぐさまアプリを開いた。……差出人は、羽沢先輩だつた。

『木下くんのお姉さんから聞いたよ。木下くん、今日は大事な模試だつたんだね。知らなくてごめんね。困つちやつたよね、突然ライブのチケットなんか貰つちやつて。こつちのことは気にしないで！ ライブの映像は後々ネットにアップされるらしいから、そつちを見てくれば大丈夫だから！ それじやあ、模試頑張ってね！』

どうやら姉さんが模試のこと話を話したらしい。余計なことを、と思うももう遅い。

「……羽沢先輩」

僕だつてそこまで馬鹿じやない。羽沢先輩が気を遣つてこんなメッセージを送つてくれたことくらい、分かつている。

……でも、その言葉に甘えてしまおうとしている自分がいる。表面上は怒つている様

子がないことに安心してしまう自分がいる。

どんどん楽な方に流れようとしているのを自覚しつつも、麻薬依存のようにそれから抜け出せないでいることに情けなさを感じ始めるのであった。

13時20分。既にライブ衣装に着替え終えた私は、ステージに併設されている楽屋スペースのすぐ外から、スマホでメッセージを送った。

相手は木下くん。ライブのことは気にしないで模試に集中してほしいという旨のメッセージを送った。

「うん……これで、いいかな」

これで、木下くんも安心して模試に臨める筈。流石に、模試の予定をライブなんかで潰しちゃうわけにはいかないから。

それに、動画がアップされるというのは本当なので、ちゃんと後でライブを見てもらうことはできる。なら、問題はない。

だから……これでいい筈だ。いい……筈なのだ。

「つ……」

……なのに、なんでなんだろう。目の奥から熱いものが込み上げてきちゃうのは。倒れてしまいそうなくらい、胸が痛むのは。

駄目……駄目だよ。もうすぐ出番なんだから、泣いちや駄目。そう思うのに、涙はどんどん瞼の上に溜まつてきて……遂に、頬を伝い始めた。

声こそ出さないものの、その代わりと言わんばかりに涙が洪水のように溢れ出した。抑えきれない感情が肩を震わせる。どうしてこうなるのだと、心の中で叫ぶ。

悲しくて仕方ない。悔しくて仕方ない。木下くんが模試なんかを選んだことが。ライブを選ばせることができなかつたことが。振り向かせることができなかつたのが。なにがいけなかつたの？ 熱意が足りなかつた？ やつぱり遅すぎたの？ それとも……単に運が悪かつただけ？

……こんなにも本気で取り組んだのに、必死だつたのに……運が悪いだけで、全部台無しになつちやうの？ そんなの、あんまりだよ……。

「つぐみ、モカが戻つたらライブ前の最後の打ち合わせ……つて、つぐみ!? どうしたの……!?

しまつた。様子を見に来た蘭ちゃんに気づかれてしまつた。慌てて涙を手の甲で拭う。

「な、なんでもないよ……えへへ」

「そんなわけ、ないでしょ……！　また木下とのことで、なんかあつたんでしょ……？」

誤魔化そうとしたけど、やっぱり遅かった。

蘭ちゃんは心配そうな顔で私に駆け寄り、持っていたらしいハンカチで涙を拭いてくれる。同時に、背中までさすってくれた。とても、優しい手つきで。

「つぐみがものすごく頑張つてたつてこと、一緒に作曲した私はちゃんと知つてる。だから、無理して隠そとしないで……！」

「つ……！　蘭ちゃん……！」

それが限界だつた。背中をさすられたことで気が抜けたせいか、逆に我慢しようとしていた分の涙まで出てきてしまつた。

視界が歪んで、蘭ちゃんの姿がおぼろげになる。そして気づいたら、私は蘭ちゃんに抱き締められていた。

「つ……木下くんね……今日、模試があるからつて……つ！」

「うん」

「だから、私ね……つ……気にしないで模試に集中してつて連絡しちやつたの……つ！　本当は、ライブに来てほしかつたのに……ッ！」

「……そうだよね」

「私、あんなに頑張つたのに……ぐす……つ……なのに、選んで、もらえなかつたの

……つ！」

いきなりこんなことを言われても、蘭ちゃんだつて困るだろうに、言葉が止まらない。

ここまで言つてしまつた以上、もう全部吐き出してしまいたかつた。

その間、蘭ちゃんはただただ相槌を打ちながら、背中をさすり続けてくれた。

* *

5分ちょっとくらい経つただろうか。ようやく落ち着いた私は、そつと蘭ちゃんから離れる。

いざ落ち着いてくると、今度は恥ずかしさが込み上げてくる。……さつきの蘭ちゃん、まるで巴ちゃんみたいだつた。

「……どう、平氣？」

「うん……ありがとう。ちょっと、樂になつた……かな」

気持ちが晴れたわけじやないけど、それでもさつきよりは全然大丈夫だ。突然、涙が込み上げてくるようなことはない。

「蘭く、つぐく。どうしたのく？」

「つ、モカちゃん!?」

気が緩みきつたところで、突然後ろからモカちゃんに声をかけられた。びっくりしちやつて、飛び跳ねるようにして蘭ちゃんから距離を取つてしまふ。

モカちゃんは飲み物を買いに行つてたようで、その手には中身の入つたペットボトルが握られていた。もちろん、既に衣装に着替えている。

「あれ～？ もしかして、お邪魔だつたかな～？」

「そんなわけないでしょ。なんでもないから、早く楽屋に戻つて。打ち合わせ始めるよ」
「はいはーい」

それだけ言うと、モカちゃんはトテトテと楽屋に入つて行つた。なんだか、急に嵐が来て、急に去つたみたいな感じだつた。

「つぐみも、もうちよつとしたら楽屋に戻つてて。私もすぐ行くから」
「うん。……あれ？ でも蘭ちゃんは？」

「私もやつぱり飲み物買つてくる。だから先入つてていいから」

そういうことならと、私は頷く。まだちよつと目が赤くなつてゐるだろうし、もう少しだけここに居ようと決める。

蘭ちゃんと別れた私は、楽屋の壁に背中を預けながら時間を潰すのであつた。

＊＊＊

教室に戻つた僕は時計を確認する。13時35分。後5分で、タイムリミット。仮に

今から向かつたところで、羽沢先輩たちの出番はほとんど終わっている。

今、どんな気持ちなのだろうか、僕は。この板挟みの状況からようやく解放されるという期待感？ それとも、取り返しのつかないことをしてしまった後悔？ なんだかごちゃ混ぜになつていて、よく分からぬ。

残りの5分が経てば分かるのだろうか。そう思つたとき、スマホが振動しているのをポケット越しに感じた。

危ない。昼休みに起動してそのままだつた。僕はスマホを取り出す。

——しかしその瞬間、僕は画面を見て固まつてしまつた。

着信だつた。ただし、それは羽沢先輩からではなく……美竹先輩からだつた。
 ……正直、迷つた。出るべきか、出ないべきか。もうすぐ昼休みも終わるし、スマホの電源を切つておかないといけない。それに、なんの為の電話なのかも想像がつく。
 だけど……今まで散々不誠実な行為を続けていたからだろうか。積み重なつた罪悪感がそれを阻んだ。いい加減にしろと、心のどこかからか聞こえた気がした。
 僕はスマホを手に持つたまま、廊下に出て通話ボタンを押した。

「もしもし……あの、美竹先輩？」

『……木下。時間がないから、1回しか言わない』

僕の応答は無視されたが、有無を言わせぬ威圧的な声に押し黙つてしまう。美竹先輩

の顔は見えないけど、分かる。絶対……怒つてる。初めて会った日に詰め寄られたときの顔を思い出す。あのときは、本当に怖かつた。

一体どんな罵声が飛んでくるのだろうかと、身構えてしまう。

……だけど、飛んできたのは罵声ではなかつた。

そして、その声のトーンは怒りを孕んでいるようなものではなく、責めてはいつつも……どこか、僕を諭すような感じだつた。

『……つぐみ、さつきまで泣いてたよ』

「え……？」

泣いてた……？ 羽沢先輩が……？ まさか、あのメッセージを送つた後に……？

……ひんやりとした汗が、背中を伝つた。その間も引き続き、美竹先輩の声が電話越しに聞こえる。

『つぐみはこのライブの為に、ほぼ徹夜で新曲を作つた。なんでか分かる？ あんたに聞いてもらう為だよ』

え……新曲？ それも、僕の為に……？ どうして……？ ……いや、もしかしなくても、ライブで僕になにかを伝える為……？

だから、あんなに来てほしいと念押ししてたのだと理解する。その新曲を、『ガルスバ』という大舞台で聞いてほしかつたのだと。

……そして、次の美竹先輩の言葉で、僕の価値観は大きく揺るがされることとなる。

『私は、あんたがどんなことを考えているのか知らないし、悪気があってのことじやないことくらいは分かつていて。でも……あんたが受けてる模試つて、つぐみを泣かせてまでして優先したいことなの?』

「……っ!?

天地がひっくり返った気分だつた。ずっと目の前に置いてあつた探しものに、たつた今ようやく気づいたかのような感覚。

『……私からはそれだけ。後は、あんた次第だから。……じゃあ、切るから』

直後、通話が切れた。僕は、ゆっくりとスマホを耳から離した。そして、ぼーっとしたまま画面を眺めていた。

……すると、今度は青葉先輩からメッセージが来た。アプリを開く。

『ちなみに、これが証拠の動画。それと、新曲は最後にやる予定』

まるで美竹先輩との電話を聞いていたかのようなタイミング。

メッセージに書いてある通り、動画が添付されていた。サムネには、羽沢先輩の姿が。ごくりと唾を飲み、震える指先で再生ボタンを押した。

……本當だ。羽沢先輩、泣いている。これ……青葉先輩が撮つたのだろうか。いや、そんなことはどうでもいいか。

とにかく、先輩が泣いているのだ。……僕のせいで。

「……馬鹿だ、僕」

美竹先輩の言つていた、羽沢先輩を泣かせてまで模試を受けたいのかという問い合わせ。なんで、こんな簡単な比較を思いつかなかつたのだろうか。

……答えは決まつていて。ノーだ。羽沢先輩に、泣いてほしくなんてない。ずっとずっと、笑顔でいてほしい。そう思つたからこそ、先輩を支えようと頑張つてたんじやないか。

あんなメッセージを断腸の思いで打つっていたであろう羽沢先輩の気持ちを思うと……申し訳なくて仕方がない。こんな最低な男に、ここまで気を遣わせてしまつた。

大体、なにが絶対に怒るだ。失望するだ。僕が行かなかつたとしても、羽沢先輩がそんな風に考えるわけないじやないか。それくらい、優しすぎる人なんだから。恐怖に駆られて、僕の目は完全に曇つていたらしい。

もう間もなく、昼休みが終わる。ライブの開始には間に合わないけど……もしかしたら、新曲には間に合うかもしれない。

……心は決まつた。この後、どれだけ怒られようと、非難されようと、罰を課されようとも、知つたことか。

まあ、それに……どうせ最後の英語で満点を取れたとしても、総合で30位以内に入

るのはもう無理だろう。それくらい、午前中の出来は酷かつた。だつたら、受けようと受けなかろうと同じことだ。

だからというわけじゃないけど……決断した。羽沢先輩の所に行こう。今すぐに。

教室に戻り、急いで荷物を纏める。突然帰り支度を始めた僕に、クラスメイトたちが怪訝そうな視線を向けているのが分かる。普段なら萎縮してしまうだろうけど、今に限つては別だ。怯まずに、支度を済ませる。

そして、偶々視界に入つた隣のクラスメイトの人に一言告げる。

「稻垣さん。体調悪くなつたから早退するつて先生に言つておいて。それじや」「え……え!?

返事は聞かず、再び廊下に出る。急がないと先生が教室に来てしまう。鉢合わせになつたら面倒だし、さつさと行かないといと。

道中走りながら向かえば、約40分。なんとしてでも新曲が始まるまでに辿り着くべく、僕は廊下を駆け、靴を履き替え、学校を飛び出すのであつた。

第14話 Even Guilty

走る。全力で走る。革靴にも関わらず、猛烈なペースで駅に向かつて走る。飛ばしに飛ばし、限界を越えて走る。

一時的ではあるものの、今ならきっと駅伝の選手とも張り合えるかもしれない。そう思えるほどの速度だつた。

運動は苦手というほどではなく、平均よりちよい上くらいはある。でも、運動不足が祟つて体力はそんなになかった。まだ学校から駅までの途中なのに、早くも息が上がつてくる。

だけど止まらない。どれだけ足が痛くなろうと、気持ち悪くなろうと止まるつもりはない。それが今、僕にできる最大限の贖罪でもあるから。

駅に着いたときに、丁度ぴつたりに電車が来るように祈りながら、僕は更にペースを引き上げるのであつた。

もう間もなく、私たちの出番だ。ステージ裏からこつそりとお客様のスペースを覗く。今までに見たことのないほどたくさんのお客さんが待っている。最前列には木下先輩の姿もある。

本来なら、驚きと嬉しさで胸がいっぱいになるところだ。でも、実際にはそんなことはない。心はモヤモヤとしたものを抱えたまま。だつて……木下くんが、ここには居ないから。

……なに言つてるんだろう、私。居なくて当然だよね。木下くんは今頃、学校で模試を受けてる筈だもん。そしてその背中を押してしまつたのは、他ならぬ私なんだから。「つぐ……平氣か？」

流石に木下くんの不在に気づいたのか、巴ちゃんやひまりちゃんが難しい顔で私のことを見ていた。私が木下くんにチケットを送つたのはみんなが知つていることだ。

一瞬、言葉がつつかえたものの、私はなんとか笑顔を作つてみせる。

「うん、大丈夫だよ……！　こんなにたくさんのお客さんに来てもらえたんだもん。これはもう、いつもの100倍は頑張らないとだね！」

「……そうだな。見せてやろうぜ、私たちの最高のライブ！」

「……うんうん！　せつかくの『ガルスパ』だもん！　楽しんでいい——う！」

私の本心はきっと、みんなには見抜かれてる。それでも、みんなはそれに気づかない

フリをしてくれた。私の言葉に敢えて乗つて、モチベーションを高めようとしてくれる。今はその気遣いが、とてもありがたかつた。

『ガルスパ』までの間、みんな私の為に色々と協力してくれた。特に、蘭ちゃんには感謝してもしきれない。

だから、その恩返しをしないといけない。たとえ木下くんがここに居ないとしても、最高のパフォーマンスを發揮しないといけない。それが、なによりの恩返しになるのだから。

それに、あんなにたくさんのお客さんがいらしてるんだもん。その期待には、ちゃんと応えないといけないし、応えたいと思っている。

「……よし！」

難しいかもしけないけど、気持ちを切り替えよう。今は目の前のお客さんに楽しんでもらうことだけを考えよう。

直接見てもらえないなら、せめて最高の出来の演奏を動画に残すしかない。動画越しでも伝わるような、熱い想いの籠もった演奏を。

……そうだよね。まだ諦めるときじゃないよね……きっと。とにかく、今は頑張ろう……！

そうやって自分を奮い立たせることで、開始寸前ながらもなんとか気力を取り戻すこ

とができた。更に気合を入れるべく、両頬を手のひらで軽く叩いた。

「開始1分前です。スタンバイお願ひします」

スタッフさんの呼びかけに応じて、いつでもステージに出れるようにする。

いよいよだ。ごくりと生睡を飲む。まだ始まつてもいないのに、耳の裏の辺りからタラリと汗が1滴流れ落ちる。体に余分な力が入つてたのに気づき、すぐに抜く。ライブは何度もやつてきたけど、『ガルスパ』ほどの大舞台は初めてだ。流石に緊張してるみたい。

でも、大丈夫。みんながいるから。たくさん練習したから。絶対、成功させるんだ……！

「……行こうみんな。いつも通り、最高の演奏で」

蘭ちゃんの静かな激励の直後、スタッフさんが合図をする。それと同時に、私たちはステージに飛び出した。

空気が震えるほどの大歓声が響き渡り、厳しい残暑にも負けないほどの熱気が会場を包んだ。それを受けて、否が応でも私たちの士気は高まる。

みんなの顔つきが引き締まる。プロのスポーツ選手のような真剣な表情。必ず成功させるという想いが、私たちを1つにする。

私はキーボードの前に立ち、指をキーに添える。これでいつ始まつても大丈夫だ。

蘭ちゃんがギターを提げながらマイクの前に立つ。マイクが正常に動作していることを確認し、蘭ちゃんは挨拶を始めた。

「……来てくれてありがとう。今日は最高の演奏を届けるから……よろしく」

「それじゃあ1曲目……『ツナグ ソラモヨウ』」

——曲が始まった。みんなの音に溶け込ませるように、私はキーボードを鳴らし始めた。

張感。

電車移動の間に少ない体力を回復させた僕は、再び全力疾走をしていた。渋谷ということでかなりの人混みだ。苛立ちを募らせながらも、僕は彼らの間を縫つて進む。しかし直後に信号に引っかかり、足止めを食らう。舌打ちをするも、状況に変化はない。

息を整えながら、スマホで時間を確認する。『Afterglow』の出番が終わるま

で、残り15分を切つた。つまり、残された時間は5分と少し。

もうちよつとで『ガルスパ』の会場だ。電車移動の際にステージの場所も確認済み。間に合うかどうかは五分五分といつたところだ。

いや、五分じゃ駄目だ。絶対に間に合わせる。そう決めたんだ。だから信じるんだ、必ず間に合うって。

最短のルートを思い描きながら信号の色が変わることを待つ。そして変わった瞬間、弾けたバネのようにスタートを切る。

もう全身は汗だくだ。喉は乾いてるし、暑くて暑くて仕方がない。足なんて、石になつたかのようだ。ペースが落ちかけるのを、気力でなんとか支えている。

明日、筋肉痛になつても一向に構わない。なんなら体調を崩してしまつたつていい。だから、お願ひだ。今だけは動き続けてくれ、僕の足。

羽沢先輩の所に……どうしても行きたいんだ。

その願いに応えてくれたのかは分からぬ。でも、僕の足はどれだけ重さを増しても、決して限界を迎えることはなかつた。壊れかけながらも、粘り強く稼働を続けてくれた。

……見えてきた。公園だ。ここからでも分かる。すごい盛り上がりを見せている。あちこちから音楽や歓声、ときには拍手が聞こえる。その中に、『Afterglow』

のものもある筈だ。

僕は真っ直ぐ入り口に飛び込み、目当てのステージを目指す。人の密度が一段と増した為、人の流れに逆らうようにして掻き分けながら進んでいく。泥の中に浸かつたまま歩いているみたいだつた。

急げ、急げと己を急かしながら、少しでも前へと強引に進む。偶に近くの人から非難の目線を浴びせられるが甘んじて受け入れる。悪いのがこっちなのは分かつている。でも、そう思つてくれて構わないから、先に行かせてくれ。

どれくらい泥の中を掻き泳いだだろうか。いつまで経つても目的のステージが見えてこないことに焦りを覚える。人の壁が視界を阻み、泥に加えて濃霧の中に迷い込んでしまつたかのようだ。

本当に、こっちで合つているのだろうか。合つている……ような気はする。でも、はつきりはしない。

仮に道を間違えていたら、すぐに引き返さないと間に合わなくなる。合つてるのどうかと、悩む時間が長すぎても間に合わなくなる。

どうする……このまま信じて進むか、それともどこか目印になりそうなものを探すか。ここに来て判断に迷い、足の速度が緩む。

——そんなときだつた。僕の耳が微かに、聞き覚えのあるメロディーを拾つたのは。

その瞬間、数ヶ月前に見た『Afterglow』のライブ映像が脳裏に浮かび上がった。

メロディーが聞こえたのは、進行方向の先の方からだつた。

「……『True color』」

……間違いない。僕はちゃんと正しい方向に進んでいた。もう、目と鼻の先の所まで来ている。

確信を抱いた僕は一気にペースを上げる。何度もぶつかってしまいながらも人混みを突破していく。

そして……演奏が止み、歓声が上がるのと同時に、僕はついに人海の壁を突破した。一気に視界が開け、大きなステージが目に入つた。

……居た。ステージの上に、羽沢先輩が立っている。前のライブのときと同じ衣装で、あそこに居る。まだ遠目だけ……ようやく、一目見ることができた。体の疲れは、どこかに吹き飛んでしまつた。

間に合つたのだ。少なくとも、新曲には。前屈みになり、息を整えながらも、頬が次第に緩み始める。走っていたのとは別の理由で、心臓が早鐘を打つ。

早く、羽沢先輩に知らせたい。僕はここに居るぞと、伝えたい。

でも、どうしよう。会場はたくさんの人でぎつしりだ。密度で言えば、さつきまでよ

りも遙かに高い。チケットがあるとは言え、ここから最前列まで行くのは……困難だ。ついでに、迷惑もある。

「……次がラスト。新曲をやるから」

マイクで拡大された美竹先輩の声がタイミングミットが近いことを知らせる。急がな
いと。

なにか方法はないかと考えつつ、ステージを見る。可能な限り、羽沢先輩を視界に取
めておきたかつたからだ。

——そんなときだつた。羽沢先輩と、はつきりと目が合つた。まん丸に見開かれた先
輩の瞳が、こんな遠くからでもくつきりと分かるのであつた。

淀みなく指を踊らせ、キーボードを鳴らす。巴ちゃんのドラムが快音を響かせ、ひま
りちゃんのベースが調和を司る。モ力ちゃんのギターの音が軽やかに舞い、蘭ちゃんの
凛とした歌声が澄み渡つて、お客様を魅了する。

最後にギターの余韻とドラムが曲を締めくくり、演奏が終わつた。再び、大きな拍手
をしてもらえた。

ライブはとても順調だ。みんな、練習の成果が出てるし、私も十全の力を発揮できて
いるという自負はある。ミスも、今の所皆無だ。

……いよいよ、最後の曲だ。私が初めて作詞を担当した新曲。私は演奏の準備を整えておく。

ある意味では、私にとつてはここからが本番だ。ミスをしないのはもちろんのこと、
込められる限りの情熱を演奏と歌に乗せないといけない。

簡単に喉の調子を確認する。うん、大丈夫。ちゃんと歌える。

「……次がラスト。新曲をやるから」

蘭ちゃんが新曲の存在を明かす。それだけで、会場は再び熱気を増した気がする。

この後、ちょっとだけ私にMCが回つてくる予定だ。なんの為に曲を作ったのか、話しておく為に。

再度、最前列を確認する。分かつてはいたことだけど、木下くんの姿はない。それで
も、ズキリと胸に鋭い痛みが走つてしまつた。

パフォーマンスに影響が出るほどじゃない。だけど、やつぱり木下くんに居てほし
かつたという気持ちはある。もしかしたら模試をすっぽかして、こっちに来てくれるかも……なんて都合のいい
ことを考えてしまう。

例えは漫画だつたら、たつた今到着して最後列の方に居たりして……。

「……え」

お客様の最後列からほんの少し離れた場所。そこに……居る筈のない人が立つているのが見えた。いや……まさかと、自分の目を疑う。きっと、私の妄想が生み出した幻に違いない。そう思つて、ぱちくりと何回かまばたいてみる。

……でも、結果は同じだつた。何度見ても……木下くんが、そこに居た。

なんで……ここに？ 私は、来なくていいって言つちやつた筈なのに。ここから1時間近く離れた所で、模試を受けてる筈なのに。

疑問は尽きない。ただ、1つだけ確かなのは、木下くんがここに居るということだけ。……学校の制服を着ている。模試を受けていたのは本当なんだと思う。

気になるのは木下くんの姿勢。両膝に両手を付いて、前屈みになつてている。そう、まるで運動後で疲れ果ててるときのような姿勢。

……もしかして、走つてきたの……？ 駅から、ここまで……？ ううん、学校を出たときから……？ だとしたら……すごく長い距離を走つてきたんじや……。

「あ……」

——木下くんが顔をこちらに向けた瞬間、目が合つた。その刹那、まるで世界に私たちだけになつたかのような錯覚に陥る。同時に、雷に打たれたような痺れが背筋を駆け

抜けた。

……本来なら、確信を持つてそうだと言えるような距離じゃない。でも……なぜか、私は断言できた。木下くんと、目が合つたんだと。

来て……くれた、の……？ 大事な模試を、放棄して……？ そんなに疲れちゃうくらい、全力で走つて……？ 私の歌を、聞きに……？

……やつた。……やつた！ 来てくれたんだ！ 聞いてもらえるんだ！ 直接……

！ 私が作詞した新曲を……！ 私の想いを……！ 生のライブで、正面から！

「つ……！」

また、視界が歪んできた。いけない……最近、涙腺が緩んでばかりだ。まだ、1曲残つてるんだからしつかりしないと。

でも、今までの涙とは違う。この涙は、私にいっぱい力を与えてくれる。全力を越えた演奏をする力を。今までの限界を軽く飛び越せるような力を。

「普段は私が曲を作つてるんだけど、今回だけは違う。今日披露する新曲を作つたのは、キーボードのつぐみ。……続きを読む彼女から」

ちようど、蘭ちゃんが私にMCをバトンタツチしたところだった。蘭ちゃんは半ばまで振り向きながら、手のひらを私の方に向けた。

……零れそうになつた涙を堪える。そして、自然と上がつた口角と共に傾いて、口元

をマイクに近づけた。

「こんにちは！ 改めまして、キーボードを担当している羽沢つぐみです」

お店の接客のときのように元気よく声を響かせる。拍手と共に、お客様の視線が私に集中した。その中には、木下くんからのものも含まれている。

私はそれらの視線をじっくりと見渡し、言葉を続ける。

「今回、初めて作詞というものをやってみました。蘭ちゃんに無理を言つて、やらせてもらつたんです。それには、理由があります。私にとつては、とつても大切な理由が」

視線を木下くんへと戻して、固定する。

「この前、お友達と喧嘩しちゃつたんです。私が無自覚のまま、とても酷いことを言つちやつて、傷つけてしまいました。それに気づいたときには、ちゃんとお話をできなくなつちゃうくらい、心の距離が開いてしまいました」

細々とした部分を省きつつ、なにがあつたのかを正直に告白する。懺悔をしているみたいだつた。

「だから、この場に居るその人に音楽で伝えたいんです。私の今の気持ちを。そんな想いを込めた曲です」

蘭ちゃんたちが私のことを見た後、客席の方へ視線をやるのが見えた。きっと、私がさり気なく木下くんがここに居ることを教えたからだと思う。

視線が私の方に戻ったとき、みんなは胸を撫で下ろしたような顔をしていた。よかつた、みんな木下くんのことを見つけられたみたい。

これで、演奏の準備は万端だ。

「それでは聞いてください！——『Even Guilt』！」

始めよう、本日最後の音楽の時間を。楽しもう、『ガルスパ』という大舞台での演奏を。そして伝えよう、私の想いの全てを。

感情は声に、情熱はキーボードに乗せて。伝えたい言葉は歌詞として歌い上げよう。身を焦がすように燃え上がったこの想い。押し潰されそうになつた罪の意識。罪人でありながら尚も欲する卑しさ。そのどれもが私の本心だ。そんな表裏合わせた私の全てを、見てほしい。

罪人を鞭打つような激しいドラムがけたたましく暴れまわる。その痛みにのたうち回るような音色を、私は指を攣りそうな勢いで跳ね回らせることで実現した。それをベースが優しく宥めると、ギターが切なげに吐息を漏らした。

ロツクバンドらしく、反抗的に。ペンキをぶちまけるように感情を喚き散らして。都合よく、我儘だけを言葉に変えて。

告解と告白の時間が、始まった。

『Afterglow』の演奏が始まった。その瞬間、魂の奥まで震えだす。幾重にも束ねられ、制御された音の暴力に圧倒される。今までイヤホン越しに聞いてきた音楽とは全く違う。

律動する音の反響。共鳴するメロディーが奏でる、何層にも折り重なった立体的なハーモニー。それに呼応するようボルテージを上げ続けるステージと観客。

影が地面に縫い付けられたように、その場から動けない。こんなにも音楽はすごいのかと、目が乾くのも気にせずにステージを視界に捉え続ける。僅かな音も聞き漏らさないようとに、耳を澄ませる。

イントロが終わり、歌詞が加わった。

——『神様 私は罪を犯しました』

出だしの歌詞は、罪の告解。当事者だった僕にはすぐに分かった。羽沢先輩が僕に恋愛相談をしてから、事故で僕の気持ちを知つてしまつたここまでを綴つていた。

棒で泥を掻き回しているような混沌としたメロディー。胸の内が無数の針に蝕まれているような痛みが走る。羽沢先輩の抱いている後悔を、一緒に感じているみたいだった。

——『気づくのが遅すぎたこの気持ち 一晩中枕を濡らす』
「気持ち……？」

心臓が跳ねる。健康診断だつたら異常値だと診断されそくなくらい、心拍数が上がる。

淡い期待が膨らむ。いや……まさか、と思いつつも止められない。もしかしたら、もしかしたらと今だけは都合のいい方向に考えてしまう。宝くじで確認した最初の数桁が一致していたときの、ぬか喜びを予感させてしまうような感覺。それでも、先の桁を確認するのを止められない。

——『どうすれば伝わるの どうすれば信じてもらえるの』

諦めたつもりでいたとき、僕は羽沢先輩を拒絶した。これ以上傷つきたくない、耳を強引に塞いだ。

でも、それが間違いだつたのでは……と今になつて気付かされた。羽沢先輩が伝えようとしたのは、もつと違うことだつたんじゃないかと。

次第にメロディーが整い、ドラムがテンポを上げ、ギターが唸りを上げる。遠くへ跳ぶ為には助走をつけるのと同じように、サビに入る前の盛り上げの段階に入つたのだと分かつた。

段差を飛ばして階段を駆け上がるよう、どんどん熱気が膨れ上がっていく。でも、

まだ爆発しない。熱気を溜め込んだ不可視の風船が膨らんで、膨らんで……まだ膨らむ。

まだか……まだなのかと、その瞬間を待ち続ける。想定していた限界はとうに越え、今にもはち切れそうだった。

——大地を叩き割るような怒号がキーボードから放たれた。その瞬間に最高潮に達し、一気に弾けた。爆発した熱気が大きく波打ち、僕の全身を突き抜け、突風が如く髪を揺らした。

——『私は最悪な罪人 決して許されではない罪人』

……すごい。本当にすごい……！ それしか、言葉が浮かばない。前に見たライブと比べても、圧倒的な完成度の演奏だった。音楽に疎い僕でもそれが分かるくらい綺麗な音だった。

新曲ということは、本番までそんなに時間はなかつた筈なのに……一体どれだけの努力を重ねたのか、想像もつかない。しかも、羽沢先輩は僕に聞かせたくて、新曲を作つたと言つてた。その完成度が、新曲にかけた情熱を物語ついていた。

……サビが終わり、熱が引いていく。熱の籠もり過ぎた空気を冷やすかのように、静かなキーボードソロが始まつた。同時に、歌い手が羽沢先輩一人だけになつた。

山奥の清流のようにひつそりとしたメロディー。まるで独り言を呟くような、どこか

寂しさを感じる歌声。

空気が一気に引き締まり、まるで舞台の上で羽沢先輩にだけスポットライトが当たっているかのような雰囲気になる。もう、先輩の姿以外なにも見えなかつた。

——『私は最悪な罪人 決して許されてはいけない罪人 それでも それでも……！ 許されないと分かつていても……っ！』

サビにもあつたフレーズ。でも、その後に続いた言葉が違つていた。

羽沢先輩の声に力が込められ、キーを叩くスピードが増していく。歩くような速度から、走るような速度に。加速し、再び空気が加熱していく……！

——と思つたそのとき、演奏が一瞬止まつた。静寂が訪れたその刹那、羽沢先輩は一言だけポツリと、大きな声で囁いた。

——『……貴方が好きなんです』

「あ……」

世界が止まつた。切り抜かれた映像の1コマのように、周囲が固まつて見えた。

……いつの間にか、天気は晴れていた。雲の間から日光が差込み、神々しくステージを照らしている。そんな光の中……羽沢先輩は目を細め、柔らかな笑みを僕に向けていた。

僕にとつてそれは、女神の微笑みそのもので……歴史上のいかなる偉大な芸術家にも

表現できない、黄金比中の黄金比を成した美しさだった。

一目惚れしたときのことを思い出す。あのとき受けた衝撃も、なかなかのものだつた。でも、今受けた衝撃はその比ではなかつた。天と地の差とはこのことだ。

竹取物語において、かぐや姫はその魔性の美で数多の男を惹きつけた。男たちもまた、彼女の出した無理難題に応えようとした。それほどまでに、彼女の虜になつていたのだろう。

今なら、その男たちの心が手に取るように分かる。だつて、僕も同じ気持ちだから。僕はずつと勘違いをしていた。意識なんて全くされてないと思つていた。ただの友達としか思われてなかつたのだと勝手に結論付けた。片思いだつたのだと諦めていた。しかし……そうではなかつた。たつた今、羽沢先輩は己の想いを明らかしてくれた。好きだと言つてくれた。

その言葉が嘘でないことは、観客の反応を見れば明らかだ。偽りの言葉で、ここまで観客を盛り上がらせることなんてできるわけがない。

僕は羽沢先輩のことが好き。羽沢先輩もまた、僕のことが好き。

……頬を抓る。痛い。夢……じゃない……？　じゃあ、ほんと……なんだ。ほんとのほんとに、そういうこと、なんだ……！

ぶるりと、体が震えた。抑えきれない感情の轟きが、心の内で激しく疼く。

この気持ちは、なんて表現すればいいんだろう……！　嬉しい……なんて言葉だけじゃ到底足りない。なら歓喜……？　いや、それでも足りない。どんな言葉を以つても、この愛しさを表現することは叶わない。いかなる例えも、決して釣り合うことはない。

だけど、もし……今までの人生で最高だった瞬間を選べと言われたら……今この瞬間だと即答できることは確かだつた。そしてそれは、今後一生変わることはないと断言できる。

……次は、僕の番だ。これだけのことをしてもらつたのだ。だつたら僕も、それに値するだけの勇気を出さないといけない。

今度こそ、ちゃんと正面から伝えよう。僕の精一杯の気持ちをぶつけよう。好きなんだと、はつきりと言葉にしよう。

——もう二度と、羽沢先輩からは逃げ出さない。

最終話 いつまでもずっと

あの素晴らしいライブからしばらくして。僕は、楽屋スペースの近くで羽沢先輩たちが出てくるのを待っていた。

手には買ったばかりの飲み物のペットボトルがある。長いこと走った後だったので、久々にスポーツドリンクにした。酸味の混じった濃厚な甘さが、今の僕には丁度よかつた。実際、既に半分も飲んでしまった。

「木下くん！」

待ち侘びていた声が聞こえた。ライブ衣装から私服に着替えた羽沢先輩が、キーボードが入っていると思しき黒のリュックを背負いながらこちらに駆け寄ってきた。その少し後ろには、先輩方の姿も見える。

「羽沢先輩……」

「今日は来てくれてありがとう！ その、どう……だつたかな……？」

最初こそ勢いのよかつた羽沢先輩だが、なぜか次第に言葉は萎んでいき、ついには俯いてしまった。よく見てみると、髪の束から覗く先輩の耳は茹でダコになっていた。

「あの、どうかしました……？」

「う、うめんね……！なんか、その……急に恥ずかしくなつてきちゃつて……。私……すげく大胆なことしちやつたのかも……」

……今更ですか、それ。羽沢先輩って、意外と後先考えないで行動するよね。まあ、それが先輩のいいところでもあるんだけど。

ただ、ライブでの堂々とした姿とのギャップを考えたら、やっぱりおかしく思えてしまつて、つい笑いが溢れてしまつた。

「あ！木下くん、今笑つたでしょ……!? 木下くんの為にやつたことなのにつ！」

「い、いやつ、そんなことないですよ」

「ううん、絶対笑つてたよ！ 木下くんの嘘つきっ！」

羞恥心を紛らわそうとしているのか、強い口調と共に紅潮させた顔を突き出してくる。その表情は険しいが、顔が赤くなつている時点であまり効果はなかつた。

ひとしきり笑つた後、羽沢先輩が拗ねてしまつた前に謝罪をした。

……ああ、胸が温かい。羽沢先輩との他愛ない会話。たつたそれだけなのに、こんなにも満たされる。この半月ちよつとの間、ずっと感じていた喪失感が癒やされる。諦めたフリをしつつも、本当はこれが欲しくて仕方がなかつたんだ。

「……羽沢先輩。今日は来るのがギリギリになつてすいませんでした。わざわざチケツトまで届けてくれたのに。それに、あんなに気を遣わせてしまつて」

久しぶりの雑談を楽しんだところで、いよいよ自分の方から本題を切り出す。ライブが終わった時点で、僕の覚悟はとつくに完了している。怖気づいたりはしなかった。

「ううん、気にしないで。最後の新曲には間に合つたんだから、それで十分だよ。私の方こそごめんね？ 大事な模試だつたんだよね……？」

「あー、まあ……そだつたんですけど……午前の時点で結果は絶望的だつたんで、もう大した問題じやないです」

きっと近日中に教師、両親の両方からキツイお叱りを受けるだろうが、それだけだ。あの素晴らしいライブを見れた代償としては安いものだ。

「それに、美竹先輩から言われたんですよ。羽沢先輩を泣かせてまでして模試を受けたいのかつて」

「えっ！？ ら、蘭ちゃんがそんなことを……!?」

羽沢先輩は凄まじい勢いで美竹先輩の方に顔を向ける。情報をリーケした美竹先輩はというと、素知らぬ顔で明後日の方向を見ていた。こつそりと共に犯になつっていた青葉先輩は、いつも通りの態度だつたので発覚しなかつた。図太い神経持つてる人だなー、とか思つてしまふ。

「美竹先輩はなにも悪くないですよ。不甲斐ない僕が悪かつただけですから。それに、美竹先輩のおかげでこうして間に合つたんですから」

「うう、そうかもしないけど……」

泣いてたことを知られるのは恥ずかしい。でも、それを僕が知らなければ駆けつけることもなかつた。そのことを理解しているからか、羽沢先輩はなにか言いたそうにしながらも口ごもるだけだつた。

「それで、羽沢先輩。話があるんですけど、今大丈夫ですか？　その、なんの話かは分かつてるとは思うんですけど……」

「あ…………う、うん、大丈夫だよ……」

途端に頬を染め、両手を前で合わせながら指を絡ませ、しおらしく頷く先輩。その反応からして、僕の言わんとしたことは伝わつたのだろう。

「あっ！　ま、待つて……！　やつぱりここじや駄目！　場所、変えよう……！」

ところが、急に我に返つたかのように羽沢先輩は視線を己の背後へと一瞬向けると、慌てて場所を変えを提案してきた。僕も釣られて視線を動かすと、そこにはにんまりとした表情をした先輩方の姿が。青葉先輩に至つては既にスマホを横に構えていた。

……危ない。一部始終を見られるところだつた。気が逸り過ぎていた。覚悟は決めたけど、流石にこれから話そうとしていることを直に聞かれたら恥ずかしさで死ぬ自信がある。

羽沢先輩は先輩たちの所に行くと、大声で、少し外すから待つてほしいう旨を

伝えていた。対する先輩たちもまた、頑張れだのファイトだのみたいなことを大声で返していた。

その勢いに押し負けたのか、羽沢先輩は脱兎の如くこつちに戻ってきた。頬はますます赤みを増していた。

「じゃ、じゃあ行こつか……！　こつちだよ」

人気の少ない場所に心当たりがあるようで、先輩は迷わず真っ直ぐ歩きだした。来たばかりの僕は素直に先輩の案内に任せることにした。

会場の中心から離れる方向へと進む。あれだけ聞こえていた人の賑わいも次第に静かになつて、本来の公園らしい雰囲気が戻つてくる。

最終的に辿り着いたのは、池を中心にも多くの木々に囲まれた、小さな庭園のような場所だつた。東屋と幾つかのベンチがあるだけの自然豊かなスペースで、イベントのせいか人の姿はない。池の小さな噴水がチョロチョロと水面を揺らしているだけで、森の中のようすに静かだ。

「ここなら平氣かな……」

羽沢先輩が周囲を見渡し、改めて人が居ないのを確認する。あからさまにほつとしたのが見ているだけで分かつた。

……いよいよだ。僕は居住まいを正し、先輩と正面から向き合う。

「羽沢先輩、聞いてほしいことがあります」

「……うん」

羽沢先輩は僕を見上げる。その瞳が一瞬揺らいだのを見逃さなかつた。その揺らめきがどのような意味を持つかは分からぬ。だけど、それが期待であつてほしいとは思つた。

深呼吸を1つ。あまり待たせたくはない。ここは一気に言つてしまおう。先輩の瞳をじつと覗き、一言だけ告げた。

「……好きです」

息を呑む気配を感じた。既にお互いの気持ちを知つているにも関わらず、空気が緊張で張り詰める。僕は間を置かずに言葉を続ける。

「初めて会つたときからずつと。一緒に働くようになつてからは、もつと好きになりました。先輩の努力家なところとか、優しいところとか、真面目なところとか。先輩の新しい一面を知れば知るほど、先輩に惹かれました。先輩のようになりたい、先輩を支えたいと思うくらいに」

羽沢先輩が僕を変えてくれた。失敗が怖くてなにも行動を起こそうとしなかつた僕でも、羽沢先輩の為なら少しずつ、行動を起こせるようになつた。支えられるようになつた。

ただ、好きというだけの人じやない。僕にとつての羽沢先輩は、そう……大切にしたい人であると同時に、僕が頑張る為の原動力なのだ。

「だから、羽沢先輩……僕と、付き合つてください。色々ありましたけど……やつぱり僕は、先輩と一緒に居たいです」

ついに、正面から想いをぶつけた。こういうとき、どういう姿勢でいるのかが最善なのか分からなかつたので、代わりに軽く頭を下げた。

後は返事を待つだけだ。……手のひらが、気づいたら汗ばんでいた。

沈黙が僕たちの間を訪れる。僕は返事を貰うまで口を開きにくいし、その羽沢先輩からの返事もなかなか来なかつた。

噴水や木々の葉擦れの音だけが延々と流れる。数十秒はそんな状態が続いただろうか。草木のざわめきに焦燥を募らせた僕は、思わず顔を上げてしまつた。直後、僕は虚を突かれることになる。

——そこには、目を潤させている羽沢先輩の姿があつた。今にも、頬を伝つて涙が流れそうだつた。

またなにかやつてしまつたのか。焦燥から一転して、冷や汗が背筋を伝つた。ど、どうしよう……！

「はっ、羽沢先輩……!?」

「う、うめんなさつ……！　違うの、これは……悲しいんじやなくて……！」

僕の考えを読んだかのように慌てて首を横に振る。それに合わせて、溜まっていた涙がキラキラと周囲に散った。同時に、先輩は強く目を瞑つた。しばらく、そんな状態が続く。

……口を開き、再び正面を向いたときの羽沢先輩の顔には……笑顔があつた。雨上がりの晴れの日に浮かぶ虹を思わせる、輝かしい笑顔が。

「嬉しいの……やつと想いを伝えられて。お返事を貰つて……好きつて言つてもらえて。すごく、すごく、嬉しいの……っ！　諦めないで頑張つてよかつたなあ、つて……！」

「先輩……」

きつと、羽沢先輩にも多くの葛藤があつたのだろう。挫けそうになつたタイミングがあつたのだろう。でも、それらを乗り越えて、こんな僕の為にあんなにも頑張つてくれたんだと悟る。

……やつぱり、あのとき決心して学校を飛び出してよかつた。苦しみながらも走つてよかつた。ライブの最後にギリギリ間に合つて、本当によかつた。

「私も……好きだよ。木下くんのなにげない優しさも、頑張り屋さんなところも、私が辛いときにいつも支えてくれた頼もしさも、全部。いつの間にかそれが当たり前になつ

ちやつてて、気づくのは……少し遅れちやつたけど

僕に恋愛相談をしてしまったときのことを言っているのだろう。確かに、当時はそのことに憤つたし、苦しみもした。でも、あの歌を聞いてからというものの、そんな気持ちはどこかに消えてしまった。僕は静かに頭を振る。

「もう、それはいいですよ。今となつてはどうでもいいです」

過程はどうあれ、あの出来事があつたからこそ、あの最高のライブに繋がつたのだ。今ならば、あの事件が起きてよかつたとすら思えてくる。きっと、互いの気持ちを通い合わせるのに必要だつたのだと納得できる。なんなら、感謝したつていいくらいだ。

羽沢先輩も同じなのか、コクリと頷いてくれた。

……そしてついに、先輩は僕が求めていた返事をしてくれた。

「だから、えつと……こちらこそ、よろしくお願ひします。お付き合い、させてください」
 ……胸が、じんわりと温かくなつた。ああ……ずっとこの瞬間を夢見ていた。心のどこかで、こんなことが叶うわけがないと思つていた。でも、叶つた。

ときにはすれ違つたり、僕が腑抜けなせいで迷惑がかかつたことも多かつた。そんな僕を、たくさんの人気が助けてくれた。姉さん、マスター、それに先輩たち。こんな僕でも、みんなの支えのおかげで、大事なものだけは最後に取りこぼさずに済んだ。感謝してもしきれない。

たつた今……僕たちは恋人になつたんだ。その実感が湧いてきたころ、僕たちは照れ臭さを誤魔化すようにぎこちない笑みを見せ合うのであつた。

*

恋人になつてから10分後、僕たちは近くのベンチに隣り合わせで座つていた。肩が触れ合い、互いの温もりをしつかりと感じる。

以前カツプルシートで座つていたときは緊張しまくつてたものだが、今は草原を撫でるそよ風のように穏やかな気分だ。きっとそれは、既に気持ちを確かめ合つた後だからだろう。

ただ一緒に並んで座つているだけなのに、温泉に入つているように幸せだ。

すれ違ひの1ヶ月を取り戻す勢いで、僕たちは会話を交わす。お互にこの1ヶ月なにをしていたのかとか、今日のライブのこととか、ただの世間話など、思いついたがままに会話を繰り広げるのであつた。

そんな中、僕はあることを話題に出した。

「……僕、いつも行動するのが怖かつたんです。失敗したらどうしようつて、嫌われたらどうしようつて。実は、バイトも姉に無理やり応募されたもので、元々自分の意思で行動したわけじやなかつたんです」

なんとなく、自分が消極的であることを話し始めたのだ。唐突なタイミングではあつ

たが、羽沢先輩は戸惑うこともなく、静かに耳を傾けてくれた。

「いざ羽沢先輩にアプローチをかけようとしても声をかけられなかつたり、肝心な話が切り出せなかつたり……まあ、とにかく、先輩の拒絶が最初は怖くて仕方がなかつたんです」

「だけど……」と前置きしてから続きを話す。

「あの雨の日に先輩と話して……思つたんです。先輩みたいに、頑張つて行動できるようになりたいって。それで、先輩を少しでも助けられるようになりたいって。……なんというか、それだけなんですけど」

そこで言葉を終える。別に、羽沢先輩になにか言つてほしいわけじゃない。ただ、先輩は自身の弱さを歌で表現した。だから、僕も自分の弱い部分をちゃんと知つてほしかつた。

この1ヶ月で存分に知られてしまつたかもしれないし、そうでなくとも今聞いたことで幻滅されるかもしれないけど、それでも言葉で伝えたかつた。

……ふと、右手が温かいもので包まれた。それが羽沢先輩の両手だと気づくのにしばらくかかつた。内心の動搖を隠しながら先輩を見る。その表情から察するに、先輩もそれなりに勇気を出してこのような行動に出たらしい。

僕の右手をギュッと握り、目を僕と合わせながら、先輩はただ一言だけ呟いた。

「……ありがとう」

「え……」

そのたつた一言で、僕の心は熱いもので撃ち抜かれた。なにか、心の奥で凍っていたものが溶けた気がした。

「話してくれて、ありがとう。でも大丈夫。それくらいで、私の気持ちは変わつたりしないから」

「先輩……」

「きっと誰にだつて、駄目なところはあるんだよ。私だつて、木下くんのこと傷つけちゃつたし。でもね、思うんだ。……誰にだつてそれと同じくらい、いいところもあるんじやないかって」

「いいところ……」

山彦のように羽沢先輩と同じ言葉を呟くと、先輩もまた「うん、いいところ」とオウム返しで返事をした。

「木下くんは察しがいいし、あんまり怒らないし、勉強が得意だし……ほら、木下くんのいいところ、私はたくさん知つてるよ?」

「勉強会のとき、あんまり教えることなかつたもんね……」なんて補足しながら先輩は笑う。まあ、あれは単純に自分のとこの授業の進みが予備校いらざの速度なだけという

か……。羽沢先輩が特別勉強が駄目ということではないとだけ言つておく。

「だから、それでいいんじゃないかな？ 駄目などころがあつても助けてもらえばいいし、いいところがあるなら、それで他の人を助けてあげればいいんだよ。それが助け合うつてことだつて、私は思うな」

……前言撤回。やつぱり、羽沢先輩になにか言つてほしかつたんだ。それでもいい、つて僕の弱さを受け入れてほしかつたんだ。そして、先輩は実際に受け入れてくれた。

……最後に残つていた心のしこりが、すつきりと取れた。もう、僕を悩ませるものはない。そして、羽沢先輩の為であれば今度こそすぐに行動に移そうと固く決心する。

「……ありがとうございます、羽沢先輩」

「……うん、どういたしまして」

僕は羽沢先輩の手を握り返す。小さくて、柔らかかった。こんな小さな手であんな演奏をしてくれたのか。……羽沢先輩はすごいな。そう思うのであつた。

* *

それから更にしばらくその場に留まって、会話を楽しんだ。せつかくの『ガルスパ』なのだし、そろそろ会場の方に戻つてみようかと提案しようと思つたそのとき、先に羽沢先輩が口を開いた。

「ねえ、木下くんはこの後も時間大丈夫？ 模試に戻らなくても平気？」

「大丈夫ですよ。もう今から戻つても終わつてますし、早退するつて言つてきちゃいましたから」

「今になつて思えば、クラスメイトの稻垣さんには無茶ぶりをしてしまつたと思うけど。ごめん、稻垣さん。」

「それじやあ、よかつたらなんだけど……家に来ない？」

『家』という言葉に反応して、一瞬ドキリとしてしまうも、すぐにそれが店の方を指していることに気づく。少々紛らわしい。

「いいんですけど……もうバイトはできないですよ？」

「うん、分かつてるよ。そうじやなくて……ただ、お店の方でゆつくりしたいなつて思つて。しばらくの間、お店で一緒になかつたから」

「そういうことでしたら……喜んで」

上手く言葉では言い表せないけど、羽沢先輩の言いたいことは分かつた。せつかく恋人になれたのだから、慣れ親しんだあの店で一緒に過ごしたい。多分、そんな感じな気がする。

「あ、そうだ。木下くんが丁度辞めちゃつた日に、ズコットがケーキセットに入つたんだ。試食、まだだつたでしょ？ 食べてみてほしいな」

「そうですね、食べてみたいです。……あ、だつたら代わりに僕がコーヒー淹れますよ」

「え？ でも、バイトは駄目なんじゃ……」

「ちょっと場所を借りるだけです。ちゃんとマスターにも話を通しますから」

「……うん、それじゃあ、お願ひしようかな」

2人で一緒に立ち上がり、荷物を持つてから歩きだす。その際一度手は離れたものの、自然と再び繋がれた。別に離したままでもよかつたのだが、そういう気にはなれなかつた。向こうの力が緩む気配もないし、この今までいいだろ。

先輩たちを待たせたままだつたことを思い出しが、後で連絡を入れれば店に来るだろうと思い、頭の隅に追いやつた。

「あ……ねえ、木下くん。今日のコーヒーなんだけど、ブラックにしてもらつてもいい？」

「別に僕はいいんですけど……羽沢先輩、ブラック苦手じゃないですか」

「うん、でも頑張つて飲んでみようかなつて。ずっと、克服したいとは思つてたから」

そこで一旦言葉を止めた後、先輩は繋いでいる手に力を込めながら僕のことを見上げる。すると、「それに……」と続きを言い出した。

「木下くんの淹れてくれたコーヒーなら、ブラックでも飲めるかもしれないから」

「つ……！」

向日葵のように眩しい笑顔をいきなり見せられて、たじろいでしまう。いきなりなんてことを言うんだ。やばい、顔が熱くなつてきた……。

この人は……自分がどれだけ恥ずかしいことを言つてているのか分かつているのだろうか。いや、きっと分かつてないんだろうな。それで後でそのことを思い出して、さつきみたいに顔を赤面させるのだろう。

でも、まあ……もちろん、そんなこと言われて悪い気はしない。だから……頑張つて淹れてみよう。先輩でも飲めるようなブラックコーヒーを。真心込めて。

「……はい。任せてください」

手のひらに秘められた温かな幸せを噛み締めながら、僕は羽沢先輩と共に歩みを進めるのであつた。いつまでもこうしていたい。そんなことを、思いながら。

——僕たちの頭上に広がる空は、どこまでも青く澄み渡つていた。

アフター

打ち上げとお祝い

『ガルスパ』が終わり、日が落ちて辺りがすっかりと暗くなる。夕飯どきとも言えるこの時間帯に、僕と『Afterglow』のみんなは『羽沢珈琲店』に集合していた。ホテルから店の入口を見ると、"Open"と書かれた看板が掛かっているのが分かる。つまり、店はもう閉店しているということだ。本来ならば、閉店には少し早い。ならなんで閉店になっているのかと言うと、原因は僕たちにある。

「えつへん……では皆様、お飲み物はお持ちでしようかー?」

上原先輩がオレンジジュースの注がれたコップを手にしながら、テーブル席に着いている僕たちの前に立つて声をあげる。語尾が伸びたりしているものの、やけに丁寧な口調だった。

「ひまり、気取り過ぎ。別にいつも通りでいいから」

「えー!? だつて、あの『ガルスパ』の打ち上げの挨拶なんだよ! それにつぐと木下君のこともあるし!」

美竹先輩の指摘に、上原先輩は頬を膨らませる。先輩の筈なのに、なんだか子供みた

いだ。隣に座っている羽沢先輩も「あはは……」と苦笑いを浮かべている。

「ほらほら、そこまでにしておきなつて。そんなんじやいつまで経つても始まらないぞ？」

「そうそ、う。早くしないと、せつかくの料理が冷めちゃうよ！」

宇田川先輩が2人を宥めると、青葉先輩がそれに追従する。テーブルには色とりどりの料理が並んでいて、どれも香ばしい匂いを放っている。意図せずして腹の虫が鳴ってしまうくらいだ。青葉先輩が先を促す気持ちも分かる。

……もつとも、そんなことを言つてる青葉先輩は既に食べ始めているが。美竹先輩が呆れた様子でそれを見ていた。

「こ、こほんっ！　じゃあ改めて……みんな！　今日はお疲れ様！　おかげで『ガルスパ』のライブは大成功！　そしてそんな記念すべき日に、つぐと木下君が晴れて結ばれました！　おめでとう2人とも！　はい拍手！」

上原先輩の合図を皮切りにパチパチと拍手が僕たちに浴びせられ、おめでとう、と祝いの言葉まで贈られてきた。先輩たちの温かい目線が僕たちに集中する。

……なんとなく恥ずかしくて、後頭部の髪の辺りを搔きながら俯いてしまう。チラリと羽沢先輩の方を見ると、彼女も困った風に肩を縮こさせていた。

「というわけで、料理も飲み物もいっぱい用意してもらつたから、いっぱい楽しもうね！」

それでは……乾杯！」

かんばーい！ と僕たちは飲み物の入ったコップを持ち上げて、大人のマネをしてコップをぶつけ合つた。カラランカララン、と中に入っている氷が心地のよい音を響かせた。ちなみに、僕は緑茶にしてもらつた。

……まあ、つまりは『ガルスパ』の打ち上げ兼、僕と羽沢先輩のお祝いパーティといふことだ。元々打ち上げは夜にここでやる予定だつたらしいので、お祝いの方をくつつけてもらつた形になる。

「木下くんもお疲れ様。今日はたくさん走つたから疲れちゃつたよね？ 用意も手伝つてもらつちゃつたし、好きなだけ食べていいんだからね？」

「ええ、ありがとうございます。そうさせてもらいます」

実は、僕と羽沢先輩も料理の用意は手伝つていて。日中、店に行こうと提案してきたのはそういう意図もあつたらしい。最初は羽沢先輩だけが手伝いに入ろうとしていたところを、僕が無理に加わつたのだ。お金は発生してないからバイトじゃないと言いつ張つて。

結構ギリギリに完了したので、結果的に手伝つてよかつたと言える。

近くに置いてあるサンドイッチをいくつか取り、パスタを何種類か皿に盛る。更にオーブンで焼いたチキンやらを取つていく。羽沢先輩が言つた通り、今日はもう腹ペコ

だ。これだけ美味しそうならば、いくらでも食べれる気がする。

ちなみに、羽沢先輩が作った料理を多めに取つたのは内緒だ。

「あ、そのポモドーロとかは私が作つたんだよ。食べてみて？」

……と思ったら、バレていた。下心までは見透かされてないと思うけど、なんだかムズムズする感じだつた。恥ずかしさを誤魔化すことも兼ねて、言われた通りに食べてみる。

……うん、美味しい。トマトソースが丁寧に煮込んであるから酸味や苦味が全くない。トマトの甘みと、油で炒めた香味野菜の旨味がパスタにぎゅっと染み込んでいる。そこにオリーブオイルの風味が合わさつて深いコクを生み出している。パスタの茹で加減も完璧だ。

「どうかな？」

「美味しいですよ。トマトソースがめっちゃよくできます」

「ほんとう？　ふふつ、よかつた」

両手を合わせて、花を咲かせるような笑顔を浮かべる先輩。釣られて、僕も口元を緩めてしまつた。

「お、早速いちやついてますな～」「あ、青葉先輩……っ！」

タイミングを見計らつたかのように青葉先輩が乱入してきた。その手には料理が山積みにされた皿が。この人、男の僕より遥かにたくさん食べるんだよね。最初見たときはびっくりしたものだ。

「つぐの料理、とつても美味しいよ」

「えへへ、ありがとう。どんどん食べてね」

「うん、そうする」

そう言うや否や、青葉先輩は口いっぱいにパスタを頬張る。これさえあれば、なにもいらないと言わんばかりの幸せそうな顔をしていた。羽沢先輩も嬉しそうだ。

「ところでー、つぐ、ゆく君？」

食べ物を飲み込み終わつたらしい青葉先輩が、僕たちになにか聞きたそうにしている。僕たちは口を揃えてどうしたのかと聞いてみた。

すると、青葉先輩はまるで道を尋ねるかのような軽い調子で問い合わせてみた。
「恋人になつたんだし、名前で呼び合わないの？」

空気が固まつた。少なくとも、僕にはそう感じられた。名前……そう、名前ね。名字じやない方の呼び方だ。もちろん、分かつてる。

……うん？ え？ 名前？ 待てよ、よくよく考えたら、女子を名前で呼んだことなんて一度も……。

「そうだよ2人ともー！　名前で呼び合えば心の距離はグッと縮まるんだよ!?　絶対そうした方がいいよー！」

どこから聞きつけたのか、上原先輩が会話の輪に飛び込んできた。ジャーナリストの取材ばかりの勢いに、僕は上体を反らした。

「名前……ですか」

「そうそう！　ほら、ちゃんと向き合つて！」

上原先輩は強引に僕の座つている向きを変える。力の差を考えれば抵抗することもできた筈なのに、どういうわけかその気迫に押されて成されるがままだつた。一方の羽沢先輩も、青葉先輩に同じことをされていた。

2人の言つていることは正しいとは思う。付き合つてているのだし、ちゃんと名前で呼び合うべきだ。ただ、この場でそれをするのはちょっと……と思つてしまふ。それは羽沢先輩も同じだろう。そう思い、向き合つてている先輩の様子を確認する。ところが、目に映つた光景は想定とは違つていた。

「……う、うん！　そうだよね！　こ、恋人なんだもん……！　よーし……！」

あ、駄目だ。顔こそトマトのように真つ赤だけど、完全に乗り気だ。そうだ、先輩はこういう人だ。この中でも一番行動力に溢れているのだつた。これは、逃げ場がない。

先輩は覚悟を決めた様子で僕のことをしつかりと見据える。まだ戸惑つている僕は

と言うと、矢で射抜かれたかのようにたじろいでしまう。間を置かずして、先輩は口を開く。

「……勇樹くん！」
「つ……は、はい」

一発だつた。僕の返事の情けなさが際立つレベルで、元気よく名前で呼んでくれた。上原先輩の挨拶のときのように、なぜだか周囲から拍手が贈られる。いつの間にか、全員がこの場に注目していた。余計にやり辛くなつてしまつたと思う。

……分かつてゐる。次は、僕の番だ。

先輩を見る。子犬が餌を欲しがつてゐるときのような、期待に満ちた先輩の視線が眩しい。その上目遣いは反則だ。

いや、言うよ？ ここまで来たら言いますとも。……ただ、先輩の後ろでニヤニヤしている青葉先輩は後で絶対引っ叩いてやる。

胸を突き破りそうな勢いで弾む鼓動を感じながら、深呼吸を繰り返す。心拍数が下がる様子はないけど、心の準備だけはできた。

……よし、言うぞ。ちゃんと言うんだぞ、僕。

「えつと……その……つ、つ……ぐ……」

言葉に詰まる。たつたの3文字なのに、上手に言えない。どんどん空気が張り詰め

る。炎で炙られているかのように体温が急上昇する。

……いや、逃げないと誓つたばかりなんだ。ここは絶対に言つてみせる。

そう決意すると、喉につつかえているなにかを無理に押し出すようにして言葉を吐き出そうとする。頑張れ僕……もうすぐ、もうすぐで言える筈だ。

——その圧力が最高潮まで高まつたとき、堰を切つたように言葉が飛び出した。

「つ……つぐみ先輩！」

「あ……うん！」

やつた……言えた。顔は赤熱した鉄のように熱いし、過呼吸になりかけてたけど、無事に言えた。みんなの拍手は恥ずかしかつたけど、同時に関係が進展していることが実感できて、とつても嬉しかつた。

こんな感じで、打ち上げは始まつた。食事を楽しんだり、アップされたばかりのライブ映像をテレビに映して振り返つたりしながら、過ごしていくのであつた。

*

各々が思い思いに誰かしらと雑談に講じる中、僕は静かにオレンジジュースを飲みながらテレビを眺めている美竹先輩の近くに座つた。

美竹先輩は僕の姿に気づいたのか、コップをテーブルに置く。

「……なに？」

「いえ、まだお礼言つてなかつたなと思いまして」

ピンと来ないのか、それともとぼけているだけなのか、美竹先輩は眉をひそめる。「電話のことです。あれのおかげで、僕はなによりも大事なことに気づきました。……ありがとうございます」

「……別に、あんたの為にやつたわけじゃないから」

美竹先輩はそう言うと、無表情を保つたまま視線をテレビに戻した。顔が赤くなつてゐるわけでもないし、本当にそう思つてゐるようだ。

「ただ、泣いているつぐみが見ていられなかつただけ。あたしは2人が付き合つても付き合わなくともどつちでもよかつたけど……つぐみがあんたのことをどれだけ想つているのか、よく知つてたから」

「……それでも、ありがとうございます。あの電話がなかつたら間に合わなかつたかもしないので。全部、全部……美竹先輩のおかげです」

美竹先輩としては先程の言葉通りの意味しかないのかもしね。けど、それを聞いて、はいそうですかでは僕の気が済まない。

だから僕は、頭を下げた。しばらくは反応がなかつたが、僕のことを目の動きだけで確認した美竹先輩は、再び顔をこつちに向けてくれた。一応、こちらの誠意は伝わつたらしい。

「言つておくけど、今回は色々偶然が重なつただけつて分かつてゐるから、なにも言わないだけだから。もし次、つぐみのことを泣かせるようなことがあつたら今度こそ許さないから……！」

「……はい、肝に銘じておきます」

美竹先輩の言葉を重く受け止める。全くもつてその通りだ。あんなにも胸が痛くな るようなこと、二度と起こすわけにはいかないし、起こしたくもない。

「……分かつてゐるならそれでいいけど。ああそれと……まあ、一応……つぐみのこと、よろしくお願ひ。大事な、幼馴染だから」

「え……はい、それはもちろん」

虚を突かれて間抜けな返事をしてしまつたが、すぐにしつかりと応じる。

そのときの美竹先輩の表情は、特に変わつていらないように見えたが……よく見ると、耳の端が微かに赤みを帯びていた。なにを考えてその言葉を僕に託したのかは明らかだつた。気難しいところはあるけど、やっぱり誠実な人だなと思う。

ただ、会話はそこまでだつた。美竹先輩は顔を逸らすと、テレビの観賞に戻つてしまつた。

僕の用もこれで終わりだ。邪魔はしてはいけないと思い、僕は席を立つてその場を離れるのであつた。

*

続けて、僕が立ち寄ったのは上原先輩と宇田川先輩の所だった。楽しそうに、ライブの感想を語り合っているようだつた。

「それでねー……あ、木下君！」

「ん？ お、本当だ。お疲れさん。ごちそうになつてるよ」

「うんうん！ とつても美味しいよ！」

2人の褒め言葉に、お礼を返す。仕込み自体はつぐみ先輩の両親がやつたとはい、そう言つてもらえるのは嬉しかつた。

「ライブのことを話してたんですか？」

「ああ。無事、大成功に終わつたしな。お前が最後に駆けつけてくれたおかげだ。ありがとな」

「いえ、僕は別に……」

「そんなことないよ！ 今日のつぐの歌、すつごくよかつたもん！ 私も思わず泣きそ
うになつちゃつたくらい。きっと、木下君があそこに居たからだよ」

上原先輩の真つ直ぐな言葉に、僕はなにも言い返せなくなつた。つぐみ先輩もそうだ
けど、上原先輩もそういうこつちが恥ずかしくなるようなセリフを簡単に言うから、返
答に困つてしまふ。

「まあ……ありがとうございます」

だから、ぶつきらぼうに感謝を伝えるしかできなかつた。そんな僕を見て上原先輩はニツコニコの笑顔を浮かべてゐる。きっと、僕が照れてるのに気づいてゐるからだろう。

「それはそうと……つぐとのこと、あんまり力になれなくて悪かつたな。つぐから話を聞くまで、全然気づかなかつたよ」

途端に話題が切り替わり、宇田川先輩は顔を曇らせる。すると、上原先輩も同様の表情を見せた。……いや、むしろ上原先輩の顔の方が幾分か暗いように見えた。その理由は、およその見当がつく。

「うん、そうだね。……改めてになつちやうけど、私の方もごめんね。あんなメッセージを送つてなかつたら、こんなややこしいことにならなかつたのに」

……そう。実は、『Afterglow』の全員が、僕とつぐみ先輩の間で起こつていたいざこざの全容を知つてゐる。あらすじではなく、一から十までの全ての内容をだ。それは例えば、上原先輩のメッセージが発端になつたということかも含めて。

打ち上げの準備が始まると、僕とつぐみ先輩で話し合つた上で、みんなにちゃんと包み隠さず打ち明けようと決めたのだ。

そして……先輩たちが店に来たとき、全てを話した。もちろん、上原先輩を責めよう

「という意図をもつて打ち明けたのではない。そんなマイナスな理由ではない。むしろ、その逆だ。

「さつきも言いましたけど、気にしないでください。結果論かもしだいですけど、あれがあつたから、最後に上手く行つたんだと思つてますから」

冷静に言葉を返す。慰めの為の取り繕つた言葉ではない。本心からそう思つて言つているのだ。

もし、あのメッセージがなかつたら、僕の気持ちがつぐみ先輩に伝わることはなかつた。あのタイミングで伝わつたからこそ、つぐみ先輩が加藤とやらへの返事を考えるのを一旦止めることができた。そして、つぐみ先輩が自身の気持ちに気づくきっかけとなつた。

あれがなかつた場合、つぐみ先輩の性格を考えると……もしかしたら、もしかしたかもしれないのだ。あのとき、僕はつぐみ先輩のことを諦めかけていたのだから。

「……うん、ありがとう木下君。でも、やっぱりこれからは気をつけることにするよ。今回のことは偶々いい方向に転がつただけだし」

上原先輩なりに思うところがあるようだ。まあ、ここから先是先輩自身の問題だろう。これ以上、僕があれこれ言つても意味はなさそうだ。僕は反論せずに頷いた。

「今更つて思うかもしれないけど、なにか困つたことがあつたらまた相談してくれよ。

アタシたちにできることなら力になるからさ」

「あ、もちろん私も力になるからね！ 遠慮なく言つてね！」

「……はい。そのときは、よろしくお願ひします」

先輩たちの頼もしい言葉に、僕は再び力強く頷くのであった。

* *

最後に、僕は青葉先輩のもとへ向かつた。先輩は、未だにマイペースに料理を楽しんでいた。

「お～、ゆ～君、どうしたの～？」

「えつと、さつき美竹先輩にも言つたんですけど、お礼が言いたくて」

「お礼ー？」

「はい。あの動画のこともそうですけど、つぐみ先輩の異変にすぐ気づいて支えてくれたこと……本当にありがとうございます」

つぐみ先輩の話では、僕たちの関係が拗れたとき、先輩が立ち直るきっかけになつたのは青葉先輩の助言だつたらしい。しかも、青葉先輩は相談されてもいないのにつぐみ先輩の苦悩を見抜いてしまつたそうだ。本当に、すごい人だ。

「まー、まー、幼馴染として当然のこととしたまでだよ～。ゆー君はあたしのお得意様だしへ？」

「……確かに、そういうこともありましたけど」

ニヤリと不敵な笑みを携える先輩。お得意様……あの、秘密裏に買い取つてたつぐみ先輩の写真のことだろう。最近はあまりそういうことをしてなかつたけど、既に3枚も青葉先輩から買い取つてているという、ろくでもない実績を持つていてのも事実だ。

「あ～でも、そういうえば～、明日はやまぶきベーカリーで新作のパンが出るんだよね～。」

「……ゆー君、今日模試だつたんだから明日暇だよね～？」

「……分かりましたよ。お礼に好きなだけ買つてあげますよ」

露骨な催促を、僕は渋々と受け入れた。青葉先輩のおかげで色々と助かつたのは本当のことだし、それくらいはしよう。ただ、今はもうバイトはできないので加減はしてほしいとは思う。

「ところで～、お兄さん～、そろそろ4枚目は欲しくはないかい～？」

「……あー、いや、前と違つてバイト代が入るわけじやないのでこれ以上は……」

それに、流石にそろそろつぐみ先輩に申し訳ないし。3枚も買つといてなにを今更つて感じはあるけど。

「いやいや～、今回は出血大サービス～。お祝いに、プレゼントしちゃうよ～」

「いえ、そういうことではなくてですね……」

「いいからいいから～、ほら～試しにどうぞ～」

断ろうとするも、青葉先輩は退かない。それどころか、自身のスマホを弄ると僕に向けて画面を無理やり見せてきた。

逡巡はあつたものの、あくまで仕方なく……仕方なく、画面を確認する。さて、今回はどうなのだろうか。

そんなことを考えていた僕に、全身を稻妻が駆け巡るような衝撃が走った。予想だにしてなかつたものが目に映り、思考が止まる。

「こ、これは……」

「つぐが迷走してたときの格好だよ。この1枚が最初で最後の、激レア写真です」
言葉が出なかつた。その写真の中のつぐみ先輩の格好は、僕が知る先輩のイメージとは対極に位置するものだつた。

まず、最初に入つたのはオールバックにされた前髪と大きめのグラサン。もう、この時点で誰だという感じである。だが、それ以上にヤバイのがその服装だ。黒の革ジャンなのだ。しかもロックの為のアクセントという感じではなく、下もレザーパンツで統一したライダースーツに近い形だ。そしてなにより、トゲ付きの肩パッドがこれでもかと存在を主張していた。そんな明らかに異質な格好で、足を組みながら乱暴な姿勢で椅子に座つていた。

これは……本来の意味でヤバイ。ロックじやなくてデスマタルとかになつちやつて

る。つぐみ先輩を知っている人がこの写真を見れば、満場一致でどうかしたのかと心配になるレベルだ。

た、確かにこれはリアな写真かもしれないけど……ちょっと、これを貰うのはどうなのだろうか。というか、本人も闇に葬りたい格好なのでないだろうか。

……そういえば、以前雨の日に励ましてもらつたときに、どれだけ聞いても頑なに詳細を話してくれなかつたものが1つだけあつたような……まさか、これのこと？

「勇樹くん？ モカちゃん？ 2人でなにを見て……つ、わ、わわああ!? ど、どうしてそれが……!? だ、駄目！ 見ちや駄目ええ!!」

写真観賞の時間の終わりは唐突だつた。偶然僕たちに話しかけてきたつぐみ先輩が写真に気づくや否や、猫に勝るとも劣らない俊敏な動きで僕と青葉先輩の間に割り込んできた。結果、写真は見えなくなつた。

背中を向けているせいかその表情は窺えないが、代わりに燃え盛る炎のようなものが見えた気がした。羞恥心と……怒り、だろうか。1つ分かるのは、息が詰まるくらい凄まじいオーラであるということだけだ。

「モカちゃん！ それ！ 早く消して！」

「えー、でもー」

「消して！」

「……はーい」

お、おおー……あの青葉先輩が押し切られた。今のつぐみ先輩の気迫なら、どんな猛獸だろうと大人しくさせられそうだ。

しばらくして、「これでいーい？」と青葉先輩がつぐみ先輩に確認を取っていた。そのやり取りから察するに、無事消去されたようだ。だが、それで終わりではなかった。くるりつ、とつぐみ先輩がこっちを向く。その瞬間、蛇に睨まれた蛙のように体が動かなくなつた。その顔は紅潮していたが、同時に視線だけで人を氣絶させられそうなくらい険しい表情をしていた。

「勇樹くんも。あの写真のことは忘れて。いーい？」

「……はい」

そう答えるしかなかつた。そして、今後二度とこのことが話題に上がることはなかつた。

*

宴もたけなわ。しかし、僕たち高校生が外出できる時間は限られている。打ち上げも、そろそろ終わりを迎へようとしていた。

そんなとき、上原先輩がとある提案をした。

「そうだ！ 最後にみんなで写真撮ろうよ！」

そう言うとすぐにスマホを用意した上原先輩は、マスターに撮影をお願いしていた。他の先輩方も既に動き出している。提案というか、もうそうするのが決まっている流れだつた。もちろん、僕も賛成だ。

「えっと、じゃあこの辺がいいかな?」

つぐみ先輩がよさそうな撮影スペースを確保してくれる。ちょうどキッキン側がいい感じに背景になつてくれる場所だ。

今日は『Afterglow』が主役なわけだし、僕は端の方がいいだろう。そう思い、適当に先輩たちが並び終わるのを待つ。

「ちよつと、木下君はそつちじやないよ! 木下君は真ん中でつぐの隣に座つて!」

ところが、そうはならなかつた。上原先輩にセンターに入るよう促されてしまつた。「え、いや、でも……」

「いいからいいから! ほら、こつちこつち!」

上原先輩に物理的に背中を押されて、席まで強引に運ばれる。本当にいいんだろうかと思いつつも、なんだかんだで従つてしまふ。

「つぐもほら、ここに座りな」

「わわっ……あはは、それじやあお言葉に甘えて」

つぐみ先輩も宇田川先輩に引き寄せられるような形で僕の隣の席に着いた。

椅子はぴつたりと横付けされていて、片方の腕が完全に密着する距離だ。公園でもそうしてたとはいえ、今度は先輩たちやマスターたちの前だ。多少視線が泳いでしまうのは許してほしい。とはいえるそれも、少ししたら落ち着いてきた。

ふと、つぐみ先輩と顔を見合わせる。すると、つぐみ先輩はすぐに柔らかな微笑みを返してくれた。胸が温かい。その温もりがもつと欲しくて、僕は思わず手を下から差し出してしまった。一瞬目を丸くした先輩だが、すぐに目を細めて手を取ってくれた。しつかりと握る。

甘えちゃってるなあ、と思いつつも、決して自分から離すことはなかつた。

「よし、それじゃあ撮るよー」

マスターの掛け声があつたので、正面を向く。可愛らしいデコレーションの成された上原先輩のスマホのレンズがキラリと光る。

……隣につぐみ先輩が居る。それも、恋人として。気持ちが通じ合っているのは、しつかりと繋がれた手を見れば明らかだ。これで幸せじゃないわけがない。

自然な笑顔を見せられない理由は、皆無だつた。

「はい、チーズ！」

カシャリ、とシャツタ一音が響いた。直後、上原先輩が確認にマスターの方へと駆け寄る。そして納得のいく一枚が撮れていたのか、「みんなー、見てみてー！」と僕たちを

呼んだ。

すぐに全員でワイワイと上原先輩の所に集まり、画面に映っている写真を確認した。
——それはいつまでも眺めていたい、最高の一枚だった。